故に五となるなり、されば五を以て二と三とよりは多しとせざるへからず。彼の英國派の學者は常に經驗を口にすと雖も經驗のみにて知識に生するにあらず、之を統合して知識となすは實に我心の上にあり。

前述せし如くカントは吾人が外界の事物を感覺經驗し之を我心の上に結合するを得るは畢竟我心の本躰一なるが故なりとし、此主觀の本躰を名けて自覺の躰と云ふ。而して主觀と客觀とは並立するものなれば、主觀に於て自覺ありと云ふと同時に外界現象の本躰なるものは存在せざるへからず、假令之を知るを得ざるも其存在は明了にして疑ふべからずと云へり。由此觀之氏の說は人の知識感覺經驗は皆自覺の上に顯はれたる主觀的のものにして客觀事物の本躰は別に我心を離れて存在すとしたるなり。然れども氏は既に外物の本躰は或る限界の爲に遮斷せられ之を知るを得ずと唱へながら、外物の本躰あるは疑ふべからずと云ひしは氏か哲學の一大缺點にして論理上の撞着を免れず。蓋し氏は從來の二元論とは相異なりと雖も亦一種の二元論を主唱せし人にして、其以前の二元論は單に物心の現象上に說きたるものなりしも氏は本躰の上に二元を分つに至れり、若し果して本躰





の上に二元の別あるものならば物の本躰の我心に知らるべき理なきは勿論なるに心の外に此本躰ありと斷定せしは氏の缺點なり。故に此論は更に一歩進めて物心の本躰一なりと云へる一元論とせば明かに領會するを得べきなり。是を以て氏の以後フィヒテ、セーリング、ヘーゲル等皆カントの二元論を進めて一元論の方向を取れり。然らば何故にカントは一元まで說き及ぼさゞりしか、是れ氏が從來の哲學を引繼きて折衷說を唱へたるものなれば其見識の未だ此點に達せざりしも道理なり。蓋し氏の以前には一派の論者は外界を本とし一派の論者は內界を主とし其說全く相反對し水火相容れざる有樣なりしを以て、氏は之を結合せんとしたるものなれば未だ此の如く性質の反對したりしものゝ其躰一元なりとは考へ得さりしなるべし。然れども純理批判を讀むに其說一元論の門戶に達せるを覺ゆ。氏も或場合に於ては感覺以上に至れば物心の本躰が或る一の基礎より成立せるか如き言を發せしとあり。而して斷定批判に於ては純理批判と實理批判とに說きしを結びしものなれば物心二者をして稍一致せしむるか如く說きたり。故に氏の說は其表面に於ては二元論なるも其內實は一元論を含有せり。是れカントが後世學者に

講究すへき餘地を與へたるものと云ふへし。此の如く氏の說は論理上完全なるものと云ふを得されとも其以前に於て單に現象の上に止まりし問題を更に進めて其本躰を發見し以て一元論の端緒を開き、是に由て氏以後の哲學をして益盛ならしめしは實に氏の功と云はざるへからず。

今カントの哲學が論理上撞着せる一例を擧ぐれば氏は、人智は現象の範圍內に止まるものにして其本躰は知るへからざるも、己に現象あれば其本躰の存在は疑ふべからずとす。何となれば主觀のみにては事物の現象を示すと能はず、假令其現象は心の上に顯はるゝも其現象を與ふる本躰心外にありて存せざるべからざるを以てなり。而して之を說明するに原因結果の理を以てし外物の現象我心に顯はるゝ以上は其原因たる實躰なかるべからずとせり。此原因結果の原則は十二の原則中の因果則(Causality.)なる一理なり。此證明は論理と撞着を免かれざる點にして、初め本躰は別に獨立せるものなりとしながら、因果の原則を當欽めて此れ有るを知らは我が思想を之に當欽めて知るにあらずや、既に我知識を實躰に及ぼして知らは實躰なるものは我知識以內にありと云はざるべからず。是れ後にフィヒテが物の





本躰を心內に入れて唯心論を完成せし所以なり。又カントは外界の事物は常に變化して止まらざるものなれとも此變化中に變化せざる基礎あり。即ち現象と本躰との關係なり之を十二原則中に躰象則(Substance.)と云ふ此原則によるに事物の基礎たる本躰なかるべからずと證明せり。是亦論理上の撞着を免れず此原理も十二原則中の一にして、之を當欽めて本躰あるを定むるは、是亦思想を事物の本躰の上に當欽めし者なれば、本躰は思想中に存すゝなさゝるべからず。以上は氏が哲學の一大缺點なるが、此缺點あるが爲めに其後に至り一元の理愈明らかなるに至れり。要之純理批判にては先天性の道理に依りて事の物本躰は吾知識の與り知る所にあらされとも其本躰の存在は決して疑ふべからずと結び、純理批判はては更に進んで理性なるものを覺性悟性の上に加へて說きたり。而して理性の上には觀念ありて、此理性の觀念は知識の境遇を超へて尙ほ一層高き處に立ち覺性悟性に於て云はさる所の精神の不滅意志の自由、及び天帝の實在と云ふことを考へ出すと說けり。然るに氏は純理批判に於ては此等の問題は皆空想に止まるものとして悉く之を排斥せり。抑き此世界の事物万有に秩然たる規律ありて運行成立するは之を造

出したるものありて定めしならんと云ふものあれとも是れ空想にして此世界に如何なる規律あるにもせよ之れあるを以ての故に神ありとするは不當の理にして我が知識の上に考へて正確なりと認むるを得す、畢竟此等の想像は人が理性に欺かれたるものにして覺性悟性は現象の範圍外に一歩も出つるを得されとも、理性は之を超えて無限の想像をなすを得るものなれは、此等の事は總て理性に欺かれたる眞の空想なりと破壞せり。此の如く破壞し終りて實理批判に至れは此問題を成立たしめたり。是れ氏が心を二樣に見、一は論理より一は倫理より見たるを以てなり。論理の作用は智力に屬し、倫理の作用は意志に屬す。智方一方より見れば天帝の實在の如きは正確なりとするを得されとも之を意志より見るときは正確なりと認むるを得べし。蓋し純理批判は理論を目的とし、實理批判は實際を目的とするを以て、道理が二樣の方向に働き、純理批判にては道理が外界に關係して如何なる位置に立つかを說示し、實理批判にては道理が道德に關係して如何なる位置に立つかを說示し、前者は心か所作用の位置にありて外界を待ち、後者は心が能作用となりて外界を制する方となる。故に一方に破壞せしものを一方に於て構成し知



力の上には空想なりとするも意志の上には必要のものとなる。此の如く純理批判にては智力に限りありて無限に達するを得されとも、實理批判にては我意志は無限を知り無限に達する力ありとし、兩者全く相反せるを斷定批判にては之を一致せしめ以て一元論に近つかしめたり。

カントが神の實在等の問題は純理上空想なりと判斷せしとは既に陳述せしが、其說遂に懷疑に陷れり。氏は通俗の有神說に對して曰く、彼等が神は實存せりと云ふは蓋然の道理を直に必然として論するものなり、神は蓋し在らんと云ふ論理は吾人の認め得べきものなるも、之を以て必す存在せりと云ふは論理の正鵠を失するものなり。又彼等は原因結果の理を推して神の存在を證明すれとも、もと此規則たる吾人の經驗を以て考定したるものなれは、吾人の經驗の範圍內に於てこそ云はるれ經驗範圍外の神に適用するは其應用を誤るものなりと謂はざるべからず。又彼等は宇宙の秩序整然たるを見、恰も玆に家室あれは必す其構造者あり、玆に書籍あれは必ず其著作者あるが如く、此世界には豫め此世界を造りしものありて之に規律を賦與せしめたるものなりと云へり、吾人は此世界ある以上は其構造者あり

と云ふとは幾分か想像し得ざるにあらず、然れども唯其構造者ありと云ふを得べきのみ、豈に其創造者ありと云ふとを得んや、材料を集拾して家屋を組立つるものあるも未た材料をも創造する大工あるを知らずと。此の如く純理批判よりは此等の問題は全く空想に過きずと排斥せしが、此點は實にカントの説の懐疑に陷りたるを疑はしむるものなり。然れども氏は純粋の懐疑論者にあらず、もとヒュームの懐疑説に反對し道理一方より論し出したるも、尚幾分か懐疑説の餘響を蒙りて其臭味を脱すると能はざりしのみ。要するに氏はヒュームの懐疑説を破壞し、尚ほ一層深高の點に於て懐疑となりしものなり。

純理批判と實理批判とは全く反對の結果を顯はし前者に破壞したるものを後者に於て構成せり。然れども又一方より見れば斯く二者反對の位置に立つも其實は只一なり、蓋し其見る所の方面相異りて一は論理よりし一は倫理よりしたるを以てなり。今カントが實理批判に説く所の倫理説を見るに其主唱する所全く義務説にして、氏の所謂義務とは人の必す然かせざる可らざることを云ふものにして、此義務の觀念は外界に制せられて起るにあらず、全く我心の自由力の指揮する所な





り。從來の經驗論者は凡て道德は經驗より起るとなせども、氏は之を排斥し義務は尚ほ一層深き處即ち意志の自由より起るものにして、道德上の自由は感覺の境遇によりて支配せられず外界に對しては獨立して能作用たる力を有すと。是に於て純理批判に否定せる問題を實理批判に於て正定するとを得たり。

以上論せし處に就いて其論理上の撞着を舉くればカントは純理批判に破壞せしを實理批判に構成したるは、其撞着の慊を免かれたるが如く見ゆるも、其實決して然らず先つ純理上より云へば氏は第一に經驗のみにては眞理を證明するに足らずとして經驗論に反し、人の知識は先天性の形式より生する者にして外界の經驗は此先天的形式の上に成立すと論し、次に知識の材料となるへき外界は其實主觀上の現象なり此現象の外に外物の本躰あるへきも我知識は現象の外に進むことと能はすと説き、其結局に至りて我理性より想像せし神の如きは空想なりと排斥せり。是其撞着を免かれざる點にして始に心内より生する先天性知識を正確なりとし後には心内の理性一方より想定するものは虛妄にして眞を證するに足らすとして之を排斥し、又前には人智は現象以内に止まり其外に及ほす力なしとして後

には外物の本躰實にありと論定せしは非論理的と云はざるべからず。此の如き誤謬は尙ほ其他に多し。而して實理批判にも亦同樣の撞着あり、我意志は能用作にして自由の力を有し外界を自由に命令支配するを得とせしは道理あることにして、斯くせざるべからずとして外界より支配せらるゝにあらず、然れども道德上の規律を充たすべき躰質は何によりて生するか、是亦外界の經驗なりと云はざるを得ざるべし、恰も純理批判にて我智識には先天性ありて之を充たすものは經驗なりとすると同しく實理批判にても亦先天後天の兩性相待たざるべからず。再言すれば心の外界に及ぼす力は道德上の規律形式なり、然れども之を充たす躰質は外界の經驗即ち吾人の欲望に對する幸福快樂是なり。然るに其物柄たる人によりて各異なるものなれば、我願望に對する外界の幸福快樂は普遍必要なる先天性と云ふを得ず、之に反して道德上の規律は先天性なり、故に氏は經驗上より得る所の快樂は道德上の規律となすに足らずとして道德上の本分に加へざりしと雖も是れ亦氏の一僻論たるを免れず。何者氏は道德上に於ても經驗より來るもの(後天性)と經驗より來らずして本來存するもの(先天性)との二種に區別せしが、凡そ人には願望





情欲ありて此中には下等に屬するものあれども又高等なる仁愛の如き情なきにあらず、若し此情なくは決して道德は成立つものにあらず、然らば先天のみ尊きにあらず後天亦何ぞ賤しむに足らん、然るに氏は先天性の一方にのみ重みを置きしは誤謬なりと謂はざるを得ず。但し氏が道德上の形式は先天性なりと云ひしは確論なり。要するに氏が實理批判に於て先天と後天とを結ひ付けんとして遂に結ひ付くるを得ざりしは、蓋し氏が從來の獨斷懷疑の餘響を禁りしに由る者ならん。

實理批判は分解法と辨證法との二段に分る。前にカントが道德の形式と躰質とを結合すること能はざりきと云ひしは分解法に論する所なり。分解法に於ては道德は道理を本とすることを說き、其道理は先天性のものなれは外界に接して起る所の情欲願望とは全く異なるものなり、故に道德は苦痛快樂と同一視すへからず、而して道德は或場合には苦痛を顧みずして實行せざるを得ざることあり、換言すれば道德は感覺に制せられずして感覺を制するものなりと。又氏は此點に於て道德上の意志の自由を說き、外界に制せらるゝものは先天性にあらず、從て又自由なりとは云ふべからず、外界の事情に制せられす却て外界を支配するを以て自由と云

ふべし、故に道德の規律は先天性なりと論ぜり。此說は甚た功妙なるが如く見ゆるも、氏は單に先天性の骨のみを取りて之が肉となるべき外界より來る所の願望情欲の如き後天性を棄却したるは誤謬と云はざるを得ず。然れども氏は辨證法に至りて遂に幸福を取り出せり。元來氏は道德は高尙なる理性より成ると說き道理敎を主唱するものなるが、此道理敎に二ありて一はケラーク、プライス等の說く所、一はカントの說く所なり、前者は普通の道理を以てすれども後者は高尙の道理を說く、故に氏は道德上自然に感覺を顧みざる傾向あり。而して氏が道德上の善なる者は外界に制せられずして單に意思の自由に依りて働くものなりと云へるは、既にスピノザの說く所にしてスピノザは道理を本として內に省み神に合するに至るを以て道德上の善とす然れども此說遂に厭世の傾あるを以て此弊を救はんが爲にライプニッツは外界の上に道德の規律を立たりカントは此兩說を折衷せんことを企てしが尙ほ純正高尙の道理を本とせり。然るに辨證法に於ては分解法にて賤みたる感覺快樂も道德上に混入せざるを得ざるに至れり。是れ氏が辨證法に於て無上至極の善を說きしを以てなり。此の無上至極の善は總ての善の大本にして





人間究竟の目的なり。而して又最上の德と稱せらるゝものなり、然れども德のみを以て善と爲すを得ず、何となれは人の一般に希望する所のものは幸福なればなり若し幸福を捨つるときは最上の善とは謂ふべからず、是れ氏か幸福と德とを一致したるものを以て善としたる所以なり。然らば既に最上の善中に幸福の加はるものとせば幸福は本と快樂と常に相關係するものなれば快樂も亦此善中に加へざるべからず。是に至りて始めて幸福論と非幸福論とを結合せりと謂ふ可し。

純理批判に於て破壞せし自由意志を實理批判に構成せしことは既に陳べたるか如し、是より靈魂不滅の說に及ぶべし。凡そ人の道理は人間の最上究竟の目的たる善に達せんことを望むものなり、既に人の道理にして最上の善を目的とするものならは當に想像上のみならず實際上其望を滿たす方法なかるべからず。然るに其善は本より最上至極のものなれは僅少有限の時間中に爲し得るものにあらず。殊に人間は肉躰を有し其命亦有限なるものなれば到底此目的を達するを得ざると明なり。故に道理上此目的を達し此望を滿さんとせば、人間の壽命をして無限に永續せしめざるべからず、無限に永續せんとするには即ち靈魂不滅ならざるべからら

ずと。由此觀之道德上の目的を實行する爲には靈魂不滅ならざるべからずと云ふは一應理あるとなるも、之を以て靈魂は眞に不滅なりと斷定するは誤謬の論と云はざるを得ず。然れども氏は此說を以て數理と等しく正確の道理なりと信ぜり。

次にカントが神の存在を證明せし說を陳べんに、人の最上の善は人間最上の目的にして、其善と德と幸福とを統合せしものなれば其善中には快樂も亦加はらざるべからず、然るに快樂は萬有自然の狀態に屬するものなれば人の先天的と其關係を異にす、即ち萬有自然は萬有自然の規律を以て支配せられ人の先天性の規律に支配せらるゝにあらず。然るに吾人が最上の善を完うせんには萬有自然に支配せらるゝ快樂を待たざるべからざるを以て吾人一個人の力にては到底之を自由に左右して無上の幸福を得、最上の善に達するを得ず故に此場合には物心萬有の上に位する神の力を借らざるべからず。神は本と無上無限の力を有するものなれば人の善惡得失を支配し以て其人に幸福快樂を與ふるを得べし、若し神なくは吾人は幸福を得ると能はざるべし、何となれば此世界に疾病等の災害なくは吾人は常に幸福なるべきも吾人は之を隨意に左右するを得ず唯之を自由にするは神のみ





なればなり。而して此神の存在せることは實理上實に缺くべからざる必然の理にして殊更に證明を要せずして正確なりと。此の如く氏は神の存在を說明せり。

凡そ人の一身の道德上には理性なる高尙の道理より起る規律と外界の狀態に應じて起る規律との二法ありて吾人は之によりて支配せらるゝものなり、換言せば人は先天的或は道理的と後天的或は感覺的との二性を有するものなり。然るに此二性は吾人の上には牴觸するものにして一方には人欲の私即ち感覺より起る刺戟によりて或る事を爲んとし、一方には之に反して理性の上より之を抑制せんとし二者相一致すること能はず、故に道德は先天性を以て主とす。然れども道理は制限なき廣大なるものにして、吾人は道理には如何に高尙に如何に完全なることをも考へ得るも實行上には後天的感覺上の境遇の障碍に由りて之を爲し遂ゲること能はず、故に道德を說かんとするには勢ひ神は存在し靈魂は不滅なりとなさゝるべからず。靈魂にして永久不滅なるときは幾萬年を經とも完全に向て進むことを得べく、加之神の存在するときは神は常に之を助け自由に幸福を與ふることを得べしと。

由此觀之カントハ始に感覺より起れる幸福快樂は純粹なる道德を汚瀆するもの

として之を廢除せしが、其終りに人生最大の目的を說くに至りては幸福快樂も道德中に挿入せざるべからざるを覺り遂に二者渾して結合せしめたるものなり。

カントの實理批判に論ずる所は往々論理上撞着の責を免れず、氏は始に感覺上より受くるものは悉く之を排斥し、苟も肉躰上の願望情欲にして道德に混入するあらば是れ道德の純粹を汚がすものなりと迄極論しながら、後に最上の善を說くに至りて幸福を加へたるは前後矛盾の甚しきものなり、何となれば最上の善中に加へたる幸福なるものは假令幸福中の最上等のものとするも尙ほ幸福は快樂に關係を有するものなればなり。又幸福なるものは吾人の先天性を以て自由にするを得ざるが故に神ありて之を與ふるものなりとして神の存在を假定せしは論理上決して許すべきことにあらず。畢竟氏が幸福を以て道德の目的とせしは始に道德は單に先天性の規律より生ずるものとしたるも後に其說の道理に適はざるを自ら證明するものと謂ふべし。

然らば此撞着は如何にして療治すべきか、曰く此の療治をなさんとするには內部よりするか外部よりするとの二法あり、外部の療法は人心を二に分ち、一は先天性



の規律、一は外界より受くる感覺とす、而して此二は全く別なるものにして前者は唯形式のみを有して之を充たす材料なく、後者は躰質のみありて之に形を與ふる規律なし、斯く二者をして全く異なるものとするときは第三の者を設け來りて媒介者となし以て外部より二者の結合を計らんとす、此第三者たるものは即ち神なり。然れども此療方たる正當のものにあらずして人を滿足せしむるに足らず、之に反して內部よりするものは全く此點を療治するを得べし、凡そ人の心中には先天後天の兩性本來同一にして一躰をなし、一方に先天の規律あれば一方には之を滿たす感覺上の願望あり、一方に道德を實行せんとせば一方には高尙の情感起り以て人間の幸福を求めんとす、是れ快樂も規律も其內部の本躰一にして共に表裏相伴うて存するが故なり。斯の如く內部よりするときは撞着の責を免かれ神を立てて調和を計るの必要なし、然るに氏の未だ此點に考へ到らざりしは實に惜しむべきことゝ謂ふべし。而して氏の以後其門弟フヒテ等の如きは師の說を辨護せんとし、幸福は外部より我道德性に加はるべきものにあらずして、吾人が道德上の目的を實行するに當りては、此世界は最上の善即ち最上の幸福を得らるゝ樣に適當せ

るものにして、即ち此世界には一種高尚なる力ありて道德上の意志が其目的を實行するに適用の成立をなせりと云へり。此說によれば道德上の規律と幸福とは其根原に至れば一にして其一なるもの二者をして相結合せしむと云ふにあり。此說カントに一歩進みたるが如きも尙ほ未だ完全なりと云ふべからず。

カントは斷定批判に至りて純理實理を結合せるを見るに二元の根據が連合すると云ふ傾向あるが如し、即ち先天と後天と外界萬有の規律と吾人內界の自由意志と一致するが如し、然れども未だ內外一元なりとは云はざりき蓋し氏は始より我心性中に斷定なる一種の作用ありて二者反對せるものを結付けんとせしに由るなり。其論中には既に一元の道理を含みたれども氏自身には之を悟らざりき。而して氏は一元を說かずして先天後天を結合せんとしたるを以て遂に天神の存在を說くに至れり。且つ氏は神の存在なる問題は物理學にあらず又形而上學にもあらず、唯道德學上之を許さゐるべからざるものなりと云ひしが、此道德學上天神ありとせしことは後世哲學者の大に異論を唱ふる所にして、又宗敎家の大に喜ぶ所となれり。即ち宗敎家は此說に由りて神は單に道德上の問題にして物理論理形而上





の諸學より決して容喙すべきにあらずとせり然れども哲學上より見れば此神を立てたるは氏の哲學の一大缺點にして之が爲に幾分か氏の哲學の價値を減少せりと云ふべし。

カントノ說一元論の如くにして二元論なることは既に述べたり。而して此點に至るときは却てデカート等の說に近よりしを覺ゆ。デカートは物心二者を結付くるものは物心の外に存する神なりとせしが、實理批判より見ればカントの說も亦物心神三元なるが如し。三元論には凡そ二說ありて一は豫定說にして神が世界を創造するとき豫め物心二者の調和を規定せりとすライプニッツの說く所是なり、他の一說は神は絕えず此世界を支配し時々刻々物心の媒介をなして之をして契合せしむとなす、是れデカートの說なり。カントは此兩說を退け其何れをも取らざりしは其著書中に微して明なり、然らば氏は如何にして神が此物心二者を結合するとを說きしかと云ふに、氏は論理上には此等の媒介を立つるの意なく、神の存在の如きは全く取るに足らざる空想なり、唯々神の媒介せざるべからざるは實理批判の上にありて道德實行の範圍に限れりとなせり。故に氏の論は二方に分ちて之を見

ざるべからず、恰もスピノザの宗教哲學と實際宗教を說ける政教論との關係の如し、カントの理論と實際と全く異なるものとしたるはスピノザの見に類似すれども、前者の後者に異る所は純理批判も實理批判も共に道理を以て本とし、唯同一なる道理が純理批判には理論の形をなし、實理批判には實際の形を取りて其作用を異にするのみとなすに在り。

上來カント哲學の大要を講述し了れり。是より進みて氏が宗教論を講ずべし。抑も氏の宗教論は全く前の道德論に基つくものなれば、既に實理批判に於て其道德論を知れるものは、之を推して其宗教論の何如を窺ふを得べし。

（宗教論）　宗教は道德を基本として起るものなりとはカント氏宗教論の根據なり。氏は先つ宗教と道德との關係を論じて宗教を道德に附屬すると道德を宗教に附屬するとの二樣の見方ありとせり。此見方は吾人の義務を以て神の命令なりと認むるに就きて、義務を先にすると神の命令を前にするとに由りて分るゝなり。宗教を以て道德に附屬するものとなすときは、義務前にありて神の命令其後にあり、即ち神の命令を認むるに先ちて吾人の義務あることを知らざるべからず、之に反して道德を以て宗教に附屬せしむるときは、神の命令前となりて義務後となり、神の命令を本として後に義務あるを認む。此の關係は自然教と天啓教との相別るゝ所以にして自然教は神の命令を認むる前に義務を立て、天啓教は義務を認むるに先ちて神の命令あることを說くものなり。要するに氏の說は凡そ宗教とは吾人の義務を神の命令なりと認むるものなりとの考にして此の義務と神の命令との關係に於て自然天啓の二教の區別を生ずるなり。而して氏は又宗教は必ず道德を本として立ちたるものならざるべからずとせり、何となれば吾人が道德上の幸福快樂を思考するときは、神は必ず存在すと云ふ考の起るものなれども、神の存在のみを思ひたりとて道德の必要を感ずるものにあらざればなり。

自然教と天啓教との區別に就いて、從來の學者中其說の異るものあり。第一は天啓教を必要と認むるものにして凡そ宗教の事たる世界の規律以外に立つものなれば、吾人の道理を以て之を判斷すべからずとす、此說を主張するものは理外教を唱ふるものなり。第二は天啓教は其必要なしと唱ふるものにして一切宗教のことは人智道理を以て解說し得べきものとす、即ち道理教論者の說く所なり。第三は天啓

教は實際に於て成立つを得ずとするものにして、理學上より宗教を見るに天啓教は全く理學の原則に反するものなれば、實際上成立つことを得ざるものなりと、是れ理學者の唱ふる所なり。此の如く天啓教に就て三説あれども尚ほ此他に第四の説なかるべからず。第四説は即ち宗教は客觀的に在りては自然教にして主觀的に在りては天啓教なりとする折衷説なり、何となれば人は單に主觀的の理性の上に立ちて考ふるときは、時々天啓教の道理に達し得るものなり、然れども之を外界の事實の上に照合せば天啓教の信ずべからざるや明けし。故に主觀一方にありては天啓教の必要ありて客觀上には自然教の必要ありとす。此の折衷説はカントが耶蘇教に對して下しゝ見解なり。要するに氏は天啓教は實際上の道理に照せば眞理と認むるを得ざれども、吾人が宗教を研究する場合に當りて時ありて天啓教の必要を感ずることありと云へり。故に氏は其本心は自然教にあれども、亦全く天啓教を捨つるにあらず。

カントが天啓教の解釋は大に通常の耶蘇教説と異なる所あり。氏の宗教論には天啓教の必要を説くに當りて、先つ人の性質中に惡あるは何ぞやと云ふ問題を講究し、以て其宗教説の起る基礎となせり。抑も人の心内に惡の存するは疑ふべからざるとなるが、此惡心は感覺より起るものなるか、將た道德即ち感覺以上より起るものなるか、曰く此惡心は決して感覺上の情欲のみに存するにあらず、若し感覺上にのみ存するものならば、則ち禽獸的生活より起るものにして、道德上の惡と稱するを得ず、既に道德に離るゝものなりとせば、道德上の責任なきや明なり。然らば惡心は道德上の本心の中に存するものなるか、曰く是亦道理に於て許すべからず、何となれば道德上の本心は道德上の規律を與ふるものなり、既に道德上の規律を與ふるものにして其中より已に反對する惡を造り出さば是れ已れ自身にて已を殺すに異ならずして全く道理に反するものなればなり、されば感覺の欲念より起るものは之を獸性と云ふべく、道理上より起るものは之を魔心と云ふべくして未だ道德上の惡と名くべからず、然らば人間の惡なるものは果して何れに屬するか、曰く惡心は決して一方にあらず、感覺と道德との二者の間にありて存す。凡そ吾人の道德上の作用なるものは感覺上の刺戟と道德上の刺戟との二方より起るものにして、此二者常に相戰うて感覺の道德に勝つことあり、又道德の感覺を制することあ

り、而して此二者の關係上より生ずるものこそ即ち惡と謂ふべきものなれ。畢竟二者の關係より心に一種の腐敗を生じて惡となり、此性質祖先より遺傳し來れるものなりと。氏は此說を以て經典のアダム犯罪に適用して之を說明せり。曰く始め神のアダムを造りし時には決して惡なるものあらざりしがアダムは自己の自由意志に任せて惡事を爲し、茲に始めて惡なるもの起り、遂に遺傳して今日の吾人に至り殆と人間の天性の如くなれりと。由此觀之、惡の起りし原因は今日のことに非ずして、天地開闢の時既に自由意志の爲に人心の上に腐敗の元素を生ぜしにあり。然らば此惡を除き其根本なる善に復歸せしめんとするには如何なる方法によるかと云ふに、漸次人心を改良せんとする如き緩慢なる手段に依らずして、人間の性質を一變して、直に元來の本性に復歸せしめざるべからず、而して人間の性質の上に大改良を實行せんとするには、道德の本心をして我意識中に十分發生すべき方法を求めざるべからず。此の道德の思想を强く起さしむるには單に尋常道理上の說明若くは一人一個の善行を以て之が改良を試むるも何等の功なし、之には人間の形躰を取れるものにして、世界多數の人の爲に非常の艱難辛苦を爲し、以て其摸範を示さば、之によりて人間精神の大改良を遂ぐるを得べし。其摸範は即ち耶蘇基督なりと。是れ氏が其說を應用して耶蘇降世を說明せしものなり。蓋し耶蘇は人間の形躰を具へ人間の爲に無量の辛苦を嘗め盡したるものなれば、吾人は之を見て大に道德心を興起し、之が爲に亦吾心も大に改良せらるゝなり。



案するに今日耶蘇敎の世界に勢力ある所以のものは決して其敎の道理如何に關するにあらずして、耶蘇か人間の形躰を有し人間の爲に艱難辛苦し、人間の爲に己の生命を犧牲に供せしと云ふとあるを以てなり。凡そ古來宗旨を問きしものは皆非常の艱難に遭遇せざるはなしと雖も、耶蘇の如き甚たしき艱難に遭遇せしものはあらざるべし。彼の舊敎の如きは耶蘇の十字架上に苦めらるゝ偶像を造り以て其實狀を人に見せしむ。若し門外の人之を見ば或は其奇怪に驚くべけれども、之を信ずる人にありては之を見て益々其信仰を深くすべし。是れ耶蘇敎の信仰を起す第一の原因にして又舊敎徒の新敎徒に勝りて熱心者の如き所以なり

カントの論する所と通常の耶蘇敎說とは大に異なる所あり、然れども氏は能く之

に適合し得べき樣に說明せり。通常の耶蘇敎者は曰く、耶蘇は神子にて吾人を助くる爲に降世し、吾人に代りて其生命を捨しものなれば、吾人の罪惡は之が爲に既に消滅せりとカントは曰く耶蘇は神子にして吾人に代りて其罪を贖ひしを以て、吾人は生れながら無罪の身となりしと云ふにはあらず吾人は耶蘇の一代記を見れば心に完全なる德義の思想を起し、從來爲せし惡行を自ら改むるに至るを以て罪もおのづから消滅するなりと主觀上に說明せり、又氏は耶蘇敎者が所謂耶蘇を拜するものは救助せらるると云へることを解釋して曰く、吾人は耶蘇を拜するときは、吾心に自然道德心を喚起し、其思想は我惡心を抑制するを以て純良なる善人となり、從て以前爲せし罪惡をも後悔し、遂には消滅するに至るなりと。又耶蘇を信ずれば如何なる病魔災厄にも打勝つことを得べしと耶蘇敎者は唱れども氏は畢竟我心の道德心强きを以て、惡魔も之を誘ふと能はざるなりと說明せり。斯くの如く氏の宗敎說は決して耶蘇敎を破壞せしにあらずして、却て之を助けたるものなり。

次にカントは敎會の事に論及せしが、氏は先づ何故に敎會の起りしやと云へる問題に就きて說明せり。凡そ人たるものは其何人たるを問はず皆善事を行はんことを企望しつゝあるものなり。然れども吾人を圍繞せる所の境遇社會及ひ朋友の如き、總べて惡を以て滿たされたるものなれば、吾人は之に抵抗して善を爲すを得ず、若し此等の者をして悉く善ならしめは、吾人の善を爲すは最も容易の業のみ、故に吾人は茲に善を爲さんとせば、善を爲さんとする者相集りて道德を練習する團躰を組織せざるべからず、此の團躰は政治上或は法律上の團躰と全く異なるものにして、法律上の團躰は自然の權利を保持せんとする趣旨なるも、此團躰は唯道德を完うせん爲の集合なり、又政治上の團躰は政治上の代理者によりて組織せられ、又或る一部分の區域若くは或る一種の人民を限れども、此團躰は其國の開、未開を問はず廣く萬國に涉りて、同一の目的を有するものは皆相集りて道德を練磨せんとするものゝ團結なり、此團躰を稱して敎會と云ふ。然れども此の敎會は神の敎會と云ふものとは大に異なるものなり。凡そ敎會には二種ありて、一は神の敎會、一は世間普通の敎會なり。神の敎會は無形世界即ち神の前の集合にして世間普通の敎會は有形世界の集合なり。然れども有形世界の敎會は無形世界の敎會の有樣を摸倣して組織せるものなり。而して神の敎會なるものは吾人の極めて純然たる理性の

中に於て發見するとを得るものなれども、本と吾人人類は不完全なるものなれば、常に其理性中に神の教會を構成するを得ず、是に於て世間普通の有形的教會を組織し、以て神の教會を代表せしむるなり。然らば此の教會の起りし目的たるや、吾人が神に對して道德上完全なる義務を盡し、以て我道德の責任を全うせんとするは何人も等しく思考する所なれども、人力の薄弱なる到底之を爲し遂ぐるを得ず、乃ち有形世界に種々の儀式或は規則を設け外界より之を遵奉する樣に制御せんとするにあり。されば儀式規則は單に方便とするに過ぎずして、普通の教會組織は純然たる道理上に考ふれば一致し難き點なきにあらざれども、其方法によりて吾人の道德心を喚起し、以て純然たる神に達せんとし、又他日之に達するを得ば、假令方便たりとも眞實と看做して敢て不可なるとなかるべし。之を要するに吾人は固より宗教上の思想あれども、感覺的の情欲の爲に妨げらるゝものなれば、有形的教會の不道理なるを知りながら、之を方便として道德心を開發せざるべからず、斯くの如くにして始めて眞正の神の教會を發見するに至るなりと。以上は氏が教會に關する解釋の大要なるが、是より氏が宗教上の歷史に就ての說を陳ぶべし。





カント氏の考によるに、宗教上の歷史なるものは普通儀式上の宗教と、道德上の信仰を以て成立てる宗教との爭を以て充たされたるものなり。即ち從來の宗教歷史は寺院教會僧侶の制度儀式或は一國に關する制度を以て組織せる宗教と道德一方を以て組織せる宗教との互に爭へる狀態を示せるものなり。而して氏は宗教は總て道德を目的として成立たざるべからずと云ふ考、なれば、世間普通の宗教は氏の所謂眞正の宗教に非ず、然れども世間に於ては道德を目的とせざる儀式的宗教却て其勢力を逞うせり、而して道德主義に非ざるものは己の宗旨を以て第一のものとなし、宗教は必す斯の如くならざるべからずと考へ、道德主義のものは亦其宗旨を以て無上のものとし、宗教は總て道德を離るべからずとす、是に於て乎二者の間に爭を生す、此の爭鬪の有樣を顯はせるものは宗教歷史なりと而して氏は次に猶太教と耶蘇教との關係を論して曰はく、猶太教と耶蘇教とは歷史上に於ては前後の關係ありと雖も、其宗教內部に入りて之を見るときは毫も關係なきものなり。抑々猶太教なるものは眞正の宗教にあらず、唯僧侶の政治組織によりて成立ちたる法律的のものにして道德的のものにあらず、何となれば神の命令を以て法律と

し、是れに由りて人民を支配し、全く神の政府を組織するものなればなり。又此教に於ては人間の現在一世の罰を重に論して未來に及はず。又此宗は一神教なりと云ふと雖も其實多神教に大差なきも、のなり、何となれば此教に奉する一神は神に主從あるを說く所の多神教の主神と異なることなく壓制的神なればなり。故に此教は眞正の宗教にあらず、猶太教既に然り、況んや東洋諸邦に行はるゝ諸教をや。されば眞正の宗教歷史は耶蘇より始まるものにして他に決して見ざる所なりと。此の考は獨りカントのみにあらず。當時の社會に於ても皆等しく考へし所なり。氏は曰はく東洋の宗教なるものは恰も壓制政府の形をなし、其神は生殺與奪の權を恣にせる君主の如く、其信者も亦之に對するに諂諛を以て其救助を得んとし、組織上信仰上共に道德的にあらす、又道理的にあらす、故に是れ亦眞正の宗教と謂ふべからず。眞正の宗教は實に耶蘇より始まるものなり、何者耶蘇は法律的信仰壓制的神を以て宗教上無用なりしとて之を改良し、加ふるに道德的信仰を以てし、更に之を己の一身に實行して其摸範を示したるものなればなりと。氏が此論たる甚た狹隘なる考と云はざるべからず、東洋の宗教豈に氏が言ふ如き淺薄なるものならんや。然





れども氏の當時にありては東西の交通未た今日の如く頻繁ならず、從て東洋宗教の事情をも十分に搜索するを得さりしものなれば氏が此說ある亦深く咎むべきにあらざるべし。氏の說によるに耶蘇教にても耶蘇一代の間は純粹の道德を以て成立ちしが、月を累ね年を經るに從ひ漸々猶太教に類する傾向を顯はし、其甚たしき羅馬教の如きに至りては如何なる壓制政府と雖も尙ほ及はざる暴虐政治を行へり、是れ最初純粹の宗教を弘めんが爲に方便とせしものを因襲の久しき之を眞實と認め道德の本來の目的たるを忘れ儀式法律を以て信仰を維持せんとし遂に壓制殘酷の處置を施すに至れり、至して數万無智の人民も亦憐むべし忘信迷想を以て滿たさるゝに至れり、是即ち中古暗世の時代に於ける宗教の有樣なり。然れども近世に移りて再び純然たる光輝の宗教界中に發耀するを得たり、即ち道理上の道德を以て基本とせる信仰發達し、今日に及ひて尙ほ愈々盛んなるの傾向あり。故に宗教は必す今日までの發達せし方向に從て益々進步せざるべからず、然れども之を助くる手段としては經典をも採用せざるべからずと。レッシング既に經典は吾人の宗教心を開發すべき教育的のものなりと云ひしが、カントも此點に於ては同

しく道德的信仰を發達せしむる手段として經典を用ふるとを唱へり。而して其之を用ふるも歴史上の事實を以て壓制せるにあらず、經典中に含蓄せる、道德の意味を以て吾人の信仰を喚起し道理的の道德を開發せしむるものなり。而して僧侶たるものは此の目的を以て他人に經典を敎授し、是れによりて他人の道德的精神を發達せしむるの任に堪へたるものならざるべからず。其他禮拜讀經洗禮供養等の儀式は單に外形上の儀式習慣とせば全く無用のものなれども、之を道德上の方便として利用するときは亦必要なるものなり、若し夫れ道德の精神を忘れて之を用ふるに至らば迷信に陷りて眞正純粹の信仰を發さしむることなかるべし、何となれば眞正の信仰は必ず道德に由りて成立つものなればなり。斯くの如くにして世人盡く道德の人とならば此の世界は即ち天國とならん、假令如此き境界に至るを得ざるも宗敎に從事するものは必ず此れに到達せしめんとする精神なかるべからずと」。

以上陳述したるカント氏宗敎論を批評せんに、此の宗敎論にも亦短所と長所とあり。其短所は道德一方に偏し、道德にあらざれば宗敎にあらずと斷定したるにあり。





勿論宗敎にして道德を離れたるものなしと雖も、宗敎は道德より尙ほ高き處に位するものにして、此點は宗敎に於て決して捨つるを得ざるものなり。若し氏の言ふ如くならば宗敎は道德の範圍内の一部分たるに過ぎず、宗敎豈に斯る狹少のものならんや、宗敎は實に道德の範圍外に涉り又道德に關係するものなり。然れども若し極めて廣き意味を以て道德を說かば、或は宗敎に一致するに至るやも知るべからずと雖も、氏が理性を本として立てたる義務一邊の道德に於ては、宗敎は尙ほ其他に幾多の領地を占有せざるべからず。蓋し道德と宗敎との相異なる所以は直接に我生活する外界に關係するとせざるとにあり。詳言せば道德は單に現世界の上のみに限り、宗敎は此世界以外に無限不可知的の躰ありとす、而して道德は一個人の上より此世界に及ぼす關係を說き、宗敎は世界總躰の上に人類の位置を定め、吾人人類が無限中可知的の躰に對して如何なる關係あるかを示す、故に道德は直接に外界即ち此現在世界に關係し宗敎は間接に此目前社會に關係するものなり。若し此の區別なくば道德も宗敎も敢て異なることなかるべしと雖も、既に此區別ある以上は二者特殊の解釋を與へざるべからず。然るに之れを混合して說きたるは

氏が宗教論の短所なりと云ふべし。然れども又氏の說によりて大に利益する所あり、當時宗教の有樣を見るに神は壓制政府の君主に異ならずして、吾人は全く神の從屬者たり、而して神の命令を以て法律とし、外部の規則によりて信仰を與さしめんとす、而して彼等宗教家は之を以て宗教の本色なりと誤認し其唱ふる所は甚た淺薄にして取るに足らず。氏は之を攝斥し道德上に於て世間普通の法律的宗教よりは尙ほ一層深き處に宗教の基礎を發見せり。是れ氏が宗教論の長所なり。此の如く氏は宗教を道德的に說明せしが、後世の學者之によりて進んで宗教の原理は道德的より尙ほ一層高き處にあるを發見せり。故に氏は宗教哲學の先驅をなしたるものにして、是が爲に一般の宗教說をして大變革を生せしめたり。要之氏は哲學上に於て極めて高尙の道理を說き以て其基本となせしが故に其說乾燥無味のものとなりしが、之と同しく其宗教說も地理的の道德を以て根據となしたるが爲に亦其弊を免れざりき。凡そ物は道理一邊より說き下すときは乾燥無味に陷るを免れず然れとも之が乾燥を醫して潤色あるものとし無味を變して好美のものとなすは唯、情感なり。之を社會上に例するも道理一方を以てせば不和を釀すに至るも若





し之に調合するに人情を以てせば爲に圓滑となるを得べしカント氏は哲學上にも宗教上にも此情感の肉を加ふるとに氣付かざりしが、後の哲學者乃ち之を補ひたり。畢竟氏の茲に至りし所以のものは從來の宗教說が道理の骨なくして唯情感の肉のみより成り爲に肥滿に過きたりしかば、之を去らんことを務め其反動として却て肉落ちて骨のみ出てたる枯瘦羸弱なるものを造り出せり。故に氏の說は完全無疵なりと云ふを得ず。

カント氏が純理批判より宗教論に至るまての全躰を總評せんに、氏の說は總て道理を本とし純理批判にては物の本躰あることを論定し、此本躰は人智を以て窺ひ知るを得すと說けり、是れ既に述べたる如く氏が物心の本躰を結合する點に至りて誤を生したるものなり。而して實理批判に於ては道德は先天性道理に本き義務なる思想より出つるものなりとし義務を充たす所の情感の肉あることを知らずして遂に先天的の道理と後天的の感覺とも一致することを能はざりき。此の如く雙方共に物心の本躰を結合するを得ざりしが、之と等しく宗教說に於ても道理一邊の道德を說きて之を充たす外界上の經驗感覺より來れる歷史上の考を捨て、道理

と天啓とを結付くるを得ざりき。是れ氏が其以前の哲學者の唱へたる二元の思想か飽くまで解けざりしが爲なり。若し此二元を結合して一元を唱ふるに至らば氏の哲學茲に完全せしならん氏は道理は事物其者の本躰に到達するを得ずとすれども、其本躰をして道理中にあるものとせば、純理批判に於て一元論たるを得べし。又道德上にても經驗上の境遇を道德の內部にあるものとせば實理批判に於て一元とするを得べし。又宗教上にありても我一人の心と、世界万有の源なる神と一躰にし、神の一部分我心に存して以て天啓を受くへしとせば、天啓と道理とを一致するを得べし。是れ即ち宗教上の一元論なり。且つ氏は宗教を道德以內に止めたれども勢力も情感も共に天啓に關係するものとして道德に說き及はゝ氏の論更に一層完全を得へし、又智力の上には感覺と道理とあり、此の二者共に外界の現象上天啓を認むること難しと雖も。此二者の間に位する想像に由るときは宗教上の天啓をも說明し得べし。此の如く考ふれば宗教は智力情感意志の上に總て存するものなるに、氏は智力道理の一方にのみ說きたるを以て偏僻の評を免るゝこと能はざりき。又宗教上より見れば宗教の思想は各個人の等しく之を有するのみならず、歷史上亦發達するものなり故に單に心內を搜索するに止まらずして、又他に求むるも得らるゝなり、然るに氏は歷史上の實事を全く排棄せしは氏の缺點と云はざるへからず、然れども又歷史上の實事のみを尊びて之を以て信仰の躰とせる從來の宗教の陋弊を矯正せしは氏の說與りて大に力ありと云ふべし。而して此等の缺點を補ひ天啓と道理、宗教と道德とを結合して說きしものは氏以後の哲學即ち理想學派のセーリング、ヘーゲル等其人なり、カントは實に此理想學派の前驅となりしものにして氏に由りて始めて理想の萌芽を見るを得たり。

是より理想學派に移りて講述すへきなれとも、當時カント氏に反對して道理以外に宗教を說きし一派あり、之を直覺的宗教哲學と云ふ、理想學派は即ち道理教と直覺教との二派を結合して起りしものなれば、先つ直覺學派の說を講し、而して後ち理想學派に及ぶへし。之に對してカント學派は批判的宗教哲學派と名くるなり。



### ハーマン氏哲學 (Johann Geory Hamann)

直覺學派はカント氏の當時にありて其批判的道理教に反對して起りたるものなり凡そ宗教なるものは哲學と其性質を異にし、人智を以て思議すべからざるもの

を本躰とするが故に、道理上より之を說明するを得ざるは固より其所たり。されど古來の宗教家は宗教は不可知的に本くものと云ひて、遂に如何なる奇蹟怪談と雖も、道理上不問に附し妄りに之を信仰せしが、社會の進歩と共に道理の發達するに於ては通俗の宗教家の與ふるか如き單純なる說明に滿足せず、進んで道理上之が解釋を試みんとし、終に宗教は必ず道理に依らざるべからずと說くものなるに至れり、然れども又道理のみに據りて宗教を說くときは道理一方に偏するの弊あり、從て宗教の區域甚た狹少となるなりカント氏の如き最も高尙の道理を基本として宗教を說きたるものなれども、既に道理を本としたる以上は、宗教は道理の範圍內に包括せらるゝものとなるなり。此の如く一方に道德に僻したる說を唱ふるものあれば、之に反して又他の一方には道理以外に宗教を立つる學派の起らざるべからざるは自然の勢なり。今此の反對說を見るに凡そ世界には可知的と不可知的との二ありて、宗教は不可知的より可知的に關係を及ぼすものにして、宗教の本源たるものは不可知的即ち吾人の道理以外にあるものなり。故に宗教の本躰たるものは吾人の智力に因りて知るを得されども吾人の心には智力のみにあらずして





情感意志なるものあり、此情感上より考ふるときは道理の及はざる不可知的の本躰に接して、其狀況を窺ひ以て之と交通するを得べし、是れを名けて天啓感通と云ふ。此天啓は道理上より云へば認知すべからずと雖も、情感上より見れば信許するに難からず。此の如く宗教は情感に本つくものなれば、其情の高下によりて宗教にも亦優劣あり。而して其最も高等なるものに至ては智力の元素を其中に含有するものなり。此天啓を解するに於て人間の智識思想は極めて僅少の區域の外知るを得ず、何となれば此世界は無限絕對の躰なれば、有限の人智を以て無限の世界を知り盡すこと能はざればなり。然れども有限の心を以て無限の宇宙を幾分か推測するを得ば、又無限不可思議の躰よりも吾人に通ずるの道なかるべからず、是れ即ち天啓なり。此天啓は吾人か道理上の考究を要せすして、吾人の精神上に自然に感知悟了するものなり、故に之を直覺と云ふ、即ち直覺は道理に由らずして感情の上に成立つものなり。此說を主張するものは直覺學派の人なり。此の如く宗教には道理教と直覺教との二派ありと雖も、二者何れをも偏廢すべからず直覺一邊を說くも僻說にして必す道理を借らざるべからず、さりとて道理一方に依るときは宗教は

人智の範圍内に止まるものとなるを以て、是亦直覺を以て補はざるべからず。要するに宗教は道理と直覺との二者相提携して進歩し、二者統合して始めて完全の眞理たるを得べきなり。

古來宗教を説くものは言ふまでもなく直覺教に由りしものなるが、近世の初年道理上より説明せんとするもの興り、遂にカント氏に至りて道理一方を以て之が解釋をなせり。而して此道理教に反對して興りしものを直覺學派となす。即ちカント氏の時代に當りて此直覺教を唱へしものはハーマン氏なり。氏は一千七百三十年獨逸ケニヒベルフに生れ。一千七百八十八年沒す。カント氏より若きこと六年なり。

ハーマン氏は全くカント氏に反對し、宗教哲學には信仰と云ふことを以て原理となし、此信仰は道理の更に關係せざるものなることを説けり。凡そ吾人が生存する所以、又吾人の外に事物の存在する所以は唯、吾人が之を信するのみにして、決して道理の作用に由るにあらず。例せば人生るれば必ず死すと云ふことは寸毫の道理を要せずして確實なり、而して是れ唯、信仰に由るより外なし。此等の信仰は神によりて敎へられたる自然の眞理なるものなり。故に吾人が總て信仰することは決し





て道理の關係せざるものなり。夫れ然り信仰は道理に由りて知るべからず、吾人の見て赤しとし、味うて甘しとする、亦何の證明をか待たん此信仰こそ實に宗教の起る所以なれと。此の如く氏は信仰を以て宗教の基礎とし、智力道理を以て論ずる諸學に反對し、哲學の如きは全く人の空想にして畢竟無益の勞力のみ、彼のスピノザ、ヒューム、レッシング、カントの如き只無益の勞を徒費して一も得る所なし是れ魔心の作用にして信仰を有たざる故なり又理學上コペニカスが天文説を一變せし如きも是れ亦學者の空想に過きずとし、總て經典に反對せるものは盡く之を排斥せり。

要するに氏の考は、既に宗教は信仰を本とするものなれば、哲學上如何に研究するも知り得べきものにあらず、恰も天才は熟練を要せず、幸運は功勞を以て測るべからざるが如く、宗教は決して哲學上の論究を以て領會せらるべきものにあらずと斷定し、信仰一邊を取りて道理を排擊し、カント等の説く所は空虛無實の妄論なりとしたるものなり。然れとも氏が極端に奔りて主張する所の信仰一邊も亦無益の空論たることを覺らざりき。蓋し宗教なるものは信仰と道理と相統合して始めて完きを得るものなれば、道理を離れたる信仰は亦空虛無實の信仰たるに過ぎず。故

に氏はカント氏が道理一方に偏したると同しく信仰一邊の極端に傾きたるものなり。

## ヘルデル氏哲學

ヘルデル氏(Johann Gottfried Herder)は一千七百四十四年獨逸モランゲンに生れ、一千八百〇三年ワイマーに歿す、氏は夙にケニヒベルク大學に入りてカント氏に從ひ哲學を學び、二十歳にして或る學校の助教授となり、又哲學神學文學等に關係せる種々の書を著述し、名聲甚た藉々たり。氏は直覺學派の一人に列すと雖もハーマン氏よりは一層高等の位置を占め、又今日の哲學上理學上に非常の効績ありし人なり、其之を直覺學派に列するは道理一方を説くものに反對したるに依りてなり。然れどもハーマン氏の如き宗教上奇怪の事蹟をも單に信仰上より説明せしものに比すれば、一層價値あるものにして決してハーマン氏等と同一視すべきものにあらず。

ヘルデル氏の學は多く先輩の説に基つきたるものにして、經典プラトー、シャフツバリー、スピノザライブニッツ、ルーソー等の諸説を根據となし以て一家の説を組織したるものなり。其中何れか最も氏に影響せしや詳かならされども、就中ルーソーの説は大に影響を及ぼしたるが如し。氏が嘗て大學にありしときカント氏よりルーソーの説を聽き、後ち自らも復ルーソーの説を考究玩味したることあり。此の如く氏はルーソーの説を學ひたれども、氏は決してルーソー門派の人にあらず、唯其人間性の起原を論する點に於て幾分かルーソーに指示せられたるが如し。ルーソーは政治上社會上より人間性の起原を論じて天賦民權の説を唱へ出し、ヘルデル氏は之に異りて理學上より研究して人間の文明言語歴史並に宗教の起原に就きて其發達を論せり。是れ氏が或は近代の言語學歴史學宗教學の理學的研究の元祖と稱せらるゝ所以なり。氏の以前に在りては宗教歴史等を研究するものありたれども其研究の方法たる總て純理的即ち空想的にして夫のカント氏の哲學の如き最も高尚なりと雖も、其講究の方法は批判的即ち消極的なるを以て實際上得る所なし、而るに其方法を一變して實理的即ち理學的の研究を始め、積極的の學風を起し、以て言語學歴史學宗教學を組織したるものはヘルデル氏なり、換言すれば十八十九兩世紀學風の一變せしはヘルデル氏の力與りて功あり。何となれば十八世紀の

末年には英國にヒュームあり獨逸にカントありて道理の論究は大に進歩せしが、其理は空想に流れ懐疑に陥り、只古來の淺薄なる議論を批評分析するに過ぎざりき、然るに十九世紀の學風は一家の新說を組織することを勉め專ら構成統合に力を盡せり、即ち十八世紀には消極的破壞的の風ありしも十九世紀には積極的建設的の方針を取るに至れり。是れ蓋し學問の進路に於て止むべからざる順序たり。近世の初年一たび思想の自由を得しより種々の空想虛理を說くもの相繼ぎて起りしかば、茲に之が批評分析を試むるもの現出せり、然れども舊草の枯るゝは新草の生する所以、批判說の起るは新說の發する所以にして、十八世紀の批判說が舊學の古根腐株を刈り盡したるが爲に、十九世紀新學の萠芽を見るに至れり。而して其間に立ちて十八世紀をして十九世紀に移せし率先者はヘルデル氏なり。ストラウス氏評して曰くヘルデルは十八世紀の關門を破りて十九世紀の道を開きしものなりと。然らば氏は如何にして十九世紀の新學問を開くに至りしかを考ふるに、氏はスピノザ、ライプニッツ等先哲の說を統合し以て新學問を組織せり。而して其之を統合するも外部より一部々々を集めて混合したるものにあらず、內部より化合同化して以て新思想を造り一家の新學風を開きしなり。然れども氏が此の如き新學風を起すに至りしはカントの豫め氏に向て新思想を發達せしむへき餘地を與へたるを以てなり、換言すればカントは十八世紀の學問を統合して十九世紀學問の起るべき準備を爲したるものなり、而してカントをして此の如く爲さしめしものはヒュームなり。更に之を例せんか茲に一の原野あり、之を開墾せんとするには豫め其地の草木を刈取らざるべからずヒュームは其草木を伐採し、カントは株を切り根を斷ち地を均らし、以て種子の自由に發達し得べき準備をなし、ヘルデルは茲に始めて種子を下せり、即ちヒュームは從來の哲學を破り、カントは更に之が根底をも碎き、前者は外部よりし後者は內部よりして破壞し盡さゞるとなし、然れとも尙ほ未だ種子を下せしものと謂ふべからず、爰に新種を蒔きしものは實にヘルデル氏なり。

ヘルデル氏は哲學文學史學等の諸學に就いて新說を立てしが、今こゝに講述せんとするは其中の宗教哲學なり。氏の宗教哲學はスピノザ、ライプニッツ兩氏の說を統合し以て一家の說を組織したるものなり。スピノザ氏の唱ふる所は萬有神教にして世界全躰を以て神とし世間普通の有神說を排擊して神は一種格段の性質を有

するものにあらずと說きたるものなり。此點はヘルデル氏のスピノザ氏を繼承する所にして、神は世界を離れて存在するものにあらず、若し此の世界を離れて存在せば吾人何を以てか其存在を考察するを得ん、然るに吾人は既に神の此世界に關係することを是認するものなれば神は此世界以內に成立たざるべからず。又神は一種特殊の性質を有するものにあらず、若し神にして特性を有するものならは是れ有限なり何ぞ無限と云ふを得ん、然れども何人の考究によるも神は無限なりとす、既に無限なる者ならば特殊の性質、格段の成立なきや明なり。然るに耶蘇敎者は以爲らく神は此世界を離れて存在し、吾人の有するか如き智情意の一層高等なる性質を有し、人の家屋を建築する如く此世界を創造せりと。若し此說をして眞ならしめん乎、神は有限たるを免れざる者なり、豈に其理あらんや、神は實に世界万有の中にありて而も世界万有の本躰たる者なりと。此れヘルデル氏がスピノザ氏に一致するの點なり、然れとも氏はスピノザの說を飽くまで唱へたるにあらず、又スピノザは唯万有の本躰は神なりと云ふに止まりて、其本躰が如何に此世界に關係せしか、如何なる活動を與へ如何にして發達せしめしかと云ふ點に至りては論究せ





ざりき。故にヘルデル氏はスピノザを許して曰くスピノザはデカートの神の思想を受けなからデカートとは大に異なる所ありて万有神敎に向て解釋を試みしも尙ほデカートの影響を免れざりきと。デカードの說明は數學的器械的の方法を用ひしがスピノザも亦數學的思想器械的說明の臭味を脫せざりき、故に其神は死物にして活動せざるものなり。是に於て乎ヘルデルは此スピノザが唱へたる死せる神に活動作用を加へんことを企てたり。而して氏の以前にありて既に此活動作用を說きしものはライプニッツにしてライプニッツの所謂元子は活動作用を有し、物理上に說く如き死物分子にあらず、元子自身に有する所の勢力によりて自ら發達し以て此世界万有を顯はすに至れりとなす、而してライプニッツ氏はスピノザが世界の本躰を一なりとせし論に反對して元子の無數なることを說けり、然れども單に元子の無數なるを說くのみにては世界の說明に支吾を生するを以て元子の上に尙ほ一の神を立てたり又氏はデカートが神か此世界を創造し時々刻々之を支配すと云へる說に反對して神は世界創造の際既に其將來を豫定せりと論ぜり。ヘルデルは此ライプニッツの元子說をスピノザの本質即ち神の上に與ふれば以て活動

作用を有する神たるを得べしと考へ兩氏の說を統合折衷するに至れり、故に氏の所謂神は此世界を離れて一種格段の性質を有するものにあらず、絕對無限の躰にして自存自活自動の大勢力を有し其大活動力の發達によりて此世界を現出したるものなりと。是れ蓋し從來の宗教哲學を比較し來らば必ず此點に歸着せざるを得ず。何となればスピノザが万有神教を唱へたるは固より卓見なりと雖も如何せん其神は活動を有せざる死物なり、之に反してライプニッは活動を論したるも亦万有神教と一致する能はず、故に此兩說を統合するときは即ち活物の神たるを得べければなり。是を以てヘルデルに續で輩出せるシーリング、ヘーゲル等の說く所も亦活動力を有する活物的神を唱へヘルデルの說を完成するに至れり。

今之を佛教の上に比較するにスピノザ以後の說は大乘に似たり。其中スピノザは權大乘に近く、万有の本躰は神なりと云ふに止りて其本躰が如何なる作用を與ふるかを說かず、恰も法相に說く所の眞如凝然として本來獨存し其活動を顯はさずと云ふが如し。カントはスピノザの說を一變し物心本躰上の二元を說きしが、其實唯心論にして分析上に心を說明し以て心の本躰あるを發





見せしも尙ほ心の本躰より此世界を開發せるを說かず、故に是亦權大乘の位置なり。然るにヘルデル、シーリング、ヘーゲル等に至りては活動力を有せる神より此世界を開發するを說くを以て佛教の眞如緣起說に近し、即ちヘルデルの哲學は起信論の眞如緣起說に類する所あり、故にヘルデル以下の哲學を以て實大乘と看做すも亦可ならんか。

ヘルデル氏がスピノザ、ライプニッツ二氏の說を折衷せしことは前既に述へたり、而して其の神の規律を論するに至りても亦兩說を調和せり。スピノザは必然論を唱へ宇宙間唯一の因果必然なる天則ありて宇宙万有を支配し神と雖も此規律內に存して決して之を動かすべからずと。而してライプニッは目的論を說き神が世界創造の時既に豫定せる目的を以て此世界を支配すと。然れども兩說ともに各其弊ありて若し必然論を取れば吾人は因果の規律(器械的)に制せられ若し又目的論に因れば吾人は神の意思に(自由的)に制せらる、故にヘルデルは兩說を折衷し、前者に對しては世界の活動する所以は神躰內に存せる、力の活動するなり、其所謂因果必然の規律は即ち神の中に存せる活動作用なりとし必然論の一邊に偏するを避け、

又後神の者に對しては神自身の活動作用が開發して世界となりし者なれば之を活動と云ふも或は自然の規律と云ふも異なるとなし、故に吾人は決して神に制せらるゝにあらずと論し目的論の弊を除きたり。而して氏が始めて此折衷を唱へしよりシェーリングは絶對無限の開發を說きヘーゲルは之に次で理想の進化を論じ、茲に始て世界と神と二躰になり、又從來一致せざりし必然目的の二論相統合するに至れり。蓋し唯物論者は物質上の規律に本くものなれば必然說に傾き、唯心論者は先天性の心力を說くものなれば自由論に偏するは是れ免るべからざる弊にしてカント以前に在りては此兩說全く一致するを得ざりき、然れどもカントに至り始て一元論の端緒を開きヘルデルに及ひて漸く其理を明かにせり。前段に於てカントが一元論に進みながら之を說き盡すを得ざりしことを述べしが茲に至りてヘルデルは目的必然の二論を一致結合して一元開發の理を啓示するに至れり。ヘルデル氏の世界開發說は既に陳述せし如く、神自身の有せる大勢力大活動力より順序を追ふて万有其形象を現示するものなり、恰も一個の草木が一粒の種子より芽を萠し幹と成り枝と分れ葉を生じ、花を開き實を結ぶが如し。初め世界の開發





するや先つ物質中結晶性のものを生し、順序を經て草木及び動物を生じ最後に人間を生ず。人間に至れば啻に肉躰上の四肢百躰を具ふるのみならず、又精神を有す、而して其身躰は結晶性若くは動植物より遙に高等に位し、精神も亦た一種特殊の性質を有す。されば人間なるものは一方には物質界の最上に位し、他方にありては精神界に交通し、物心兩界を連絆するの位置に立ちて、以て兩界の連鎖たるものなり、即ち人間は生れてより人間自然の發達に順ふて其固有せる本性を發揮し、物質上には有機躰中の最上に達し、精神上には高等の精神界を其躰中に開き以て其の自由を得るに至る故に人間の歷史は人間の人間たる本性開發の順序を示したるものなり顧みて此世界を觀るに其始は渾沌として不整頓不規律なる一塊なりしが、其中より漸々順序成立し規律確定し以て今日に及べるなり、之と同しく精神界も亦最初は不規則不完全の者なりしも漸々秩序相定まり規律備はり道理發達して遂に宏全なる者となれり、是何に由て然るや、即ち神自身の躰に具へたる大活動力の開發なるを以てなり、且つ神は單に人間性の開發を支配するに止まらず、一切万物悉く其支配する所なり、故に神は天地万有の外に存在するものにあらず、万有

の中にありて而も萬有の上に其の大勢力を發現啓示するものなり。要之森羅萬象總て其始は不規律不完全なるも其發達の進むに從ひて事物の關係判明となり秩序整頓し規律確定し遂に相一致契合するに至る、是れ畢竟神の命令支配するが故なりと以上陳へたるヘルデル氏の說はスピノザの萬有神敎論及び因果必然論を持ち來りて之に加ふるにライプニッツの元子開發論及一致契合論を加へて之を統合し以て宗敎哲學の原理を組織したるものなり。

今ヘルデル氏の說をカントの說に比較するにカントハ世界以外に神ありと云ふことは理論上に於ては空想妄說なりとし實際上には必要なるものとせり、然るにヘルデルハ之に反して神が世界の外に存すと云ふは理論上不道理なることにして實際上にも亦不必要なり、然れども此の世界萬有の上に考ふるときは此世界萬有を開發する所の本源たる神は必す現存せさるべからず、而して此神は世界萬有の中に位し、衆勢力の大原因、衆活動の大根本たるものなり、其說たる吾人は確に存在し、又吾人には道理を有し諸種の事柄を思考するを見れば吾人の道理思想の最上に位するものなかるべからず、又此世界の上に山川草木禽獸魚介等森羅萬象の





現はるゝを見れば之を發現すべき原因本躰必すなかるべからず、又萬物の一元子個々獨立の成立を爲すを見れば此總元子の基礎として存せる活動の躰なかるべからざるは瞭乎として火を見るが如し、要するに之を吾人の心內に考索するも又之を外物の上に觀察するも物心萬有の本躰たる大基礎大根本なかるべからず、此者は卽ち是れ神なり、故に曰ふ神は世界萬有の本源なりと、而して其の躰は現象を離れて存するにあらず、現象の中にありて而も現象に活動を與ふ、然れども神其者の躰は無現象なり、故に神を以て一種の現象として見るべからされども、既に現象を顯はすべきものなれば吾人の思想上其本躰あるを推知するを得るなり。又カントは理性に考ふる所のものは(神の現存の如き)盡く空想なりとせしがヘルデルハ之に反して理性の想像は決して偶然にあらず、必ず其の顯はるべき必然の道理の既に內部に存せるを以て然らしむるなり、凡そ吾人の想像觀念するを得る所以の者は其基礎に神の存せるを以てなり、故に吾人の思想中に深く考ふるときは神の存在せるとは明確にして疑ふべからずと。此神の解釋は氏の宗敎說の基つく所なり。

ヘルデル氏の所謂神は最上の勢力、最上の道理を具へたる物心萬境の本躰にして此本躰の勢力萬有の上に及ぼして秩序規律の一致契合を成立たしむと云ふことは既に述べたる所なり。而して氏の所謂宗教とは此世界に顯現する神の作用を吾人の心に領納するものなり、換言すれは吾人は世界の一部分にして世界の全躰は神なりと云ふことを直接に認識し其道理を已に會得するが宗教なり、夫のカントが道德を以て宗教とし、又通俗の宗教者が吾人は世界以外の神によりて支配せられ之に服從する義務ありと云ふことを以て宗教と看做すが如きは皆宗教の全躰を知るものにあらず、吾人は此世界の一部分なることを自ら證見するが即ち宗教にして、之に伴うて道德上の關係も亦起るものなりと。此點は通俗の宗教說及ひカントの道理說に比して一層高尙なるが如し。斯の如く氏は萬有神教に重を置きて宗教の原理を說きたるものなるを以て、吾人に其宗教の道理を告示するものも亦世界萬有にして、此世界萬有は最上の大勢力の發現によりて一大有機躰の有樣を顯はすものなれば、宗教の思想は萬有其者を觀察して領得するを得べし、而して此理を推究するときは太古の人民が事々物々を見て神と想像せしも、決して單純なる空想にあらずして、眞正の宗教思想が開發する最初の狀態なりと云へり。而して氏は此點を取りて經典の奇蹟怪談を說明せんことを試みたり、即ち經典は世界創造の說を始め總の事實奇怪ならさるはなし故に道理を主張するものは之を信憑するものなしと雖も氏は之を說明して曰く、蓋し經典中の怪談たる古代無智の人民が事々物々を以て神なりと想像し、又詩人が天文地理を察して神の作用を感し、其想像を描き顯して天地の美妙を寫出すと同じく、此世界の一大勢力發現の有樣を感じて起したる想像なり、故に之を表面より見るときは不道理なるが如きも、其內部に入りて考察するときは其內に一大眞理の含めるを認むるなり、されば經典は神力によりて開發啓示せる世界萬有の狀態を畫き出したるものなりと云ふも敢て不可なるとなしと。

今ヘルデン氏が此說明を考ふるに此世界は神の大勢力の發動なれば如何なる經典と雖も之を感すとは或は其理なきにあらざるべけれども、經典上の奇蹟怪談をして今日一般の道理上に照すことなく、又之を事實上に徵證せずして論斷せしは氏の闕點と云はざるべからず、若し之をして哲學上の一說となさんとせば道理上

滿足すべき解釋を與へ、又之を事實上に觀察して果して信すべきものなるや否やを論究せざるべからず、故に氏の此說明は決して學術として受取るを得さるなり、然れとも又其長所ありて從來の道理學者は道理一方に偏局し、單に外部を一見して其事の道理に反するあれば直に之を排斥して毫も其內部の如何を顧みざりしが、氏は之と異なりて深く其內部に立入り之か觀察を下せり、即ち蠻民が日月を拜し木石に禮する如き信仰想像は固より非理のとにして取るに足らざれとも、若し其內部に入りて何故に此の如き者を信するかを探究せは、是れ實に世界の活動に感して起したる想像なりと云ふことを知るに至らん。故に氏か此內部觀察は氏の長所と稱せさるべからず。然るに茲に又氏の說の前後相違する所あり、即ち氏は始には幾分か奇怪の事蹟を許せしが、後にスピノザの因果必然論を講究するに至り稍、其說を變する所あり如何に奇怪の事と雖も道理上說明し得さるものには歷史上研究を費さゝれば明ならずと云ひ、道理上の解釋を以て奇怪の事實を除かんことを力めたり、故に前後幾分か相異なる所あり。

ヘルデル氏の天啓說はレッシングと全じく天啓は敎育的のものとす、其說を見るに天啓は決して道理に背反するものにあらず、天啓は總の道理觀念の基礎にして、道理の發育に從て天啓を知り、天啓に由りて道理の發達を促がす、故に吾人は天啓の指揮によりて宇宙間に一大道理の存し一大勢力の有るを發見するを得、是れ天啓を以て敎育的とする所以なり、恰も天啓は母の如く道理は幼兒の如し、母の幼兒を養育して幼兒自身に獨立して步行するに至らしむると同じく、天啓は吾人の道理の幼稚なるを導きて以て吾人が自由に道理を使用するを得せしむるものなり、故に天啓は決して道理を離れたるものにあらずと。又從來の宗敎家は天啓を以て秘密不可知のものとせしが氏は之に反して天啓は道理の發達を促がす先導者なりとす、而して天啓の人智を進步せしむるに於て時と場所とに由りて緩急遲速の相異あるは畢竟神が或る特別の人種に人間自然の本性を開發するに於て特別の時代に特別の資助を爲したるなり、故に時ありて或は賢哲を出し或は聖人を生せしめて人民を開導するとあり。是れ皆神か人民を敎導する方法なり、されば天啓は自然以外道理以外のものにあらざるは明なり。又從來耶蘇敎中神託 (Inspiration) 即ち神が人の精神に憑りて託宣をなすと云ふことを信じ、之を以て理外の理と考へ

たり、然れども氏は是れ神が人の精神を高尚ならしむる所以のものにして決して秘密的のものにあらずと說明せり。

ヘルデル氏は耶蘇敎を以て人間敎の一種とせり、曰く耶蘇敎は人間を愛し人間を助け人間眞正の性質を開發する爲に起りたる宗敎なり、夫の耶蘇を見よ、其一代の所爲は耶蘇敎が人間敎の一種たるを證明せるものにして、耶蘇が己の一身を殺して人間を救ひしは是れ人間敎の人間敎たる所以を實地に行ひたるものなり、蓋し神は天父にして耶蘇を始め吾人々類は皆神子なり、故に耶蘇の心中には人類は總て己の同胞兄弟なるを信じ、之を以て其本心を組立つるが故に人類を愛するの情愈切にして、遂に其身を十字架上に置き以て同胞人類を救助せんとせり、是即ち耶蘇敎が人間敎たるの證なり。此の如く耶蘇敎は人類を愛し人類を進め人類固有の本性開發を目的として成立したる者なれども、其世間に擴張すると共に一種の習慣を生し其本來の性質を失ひ漫に外形の虛禮儀式に奔り、之に加ふるに耶蘇敎以外の風習を混入し肉食を戒め妻帶を禁じ遁世脫俗の風起りて遂に社會進歩の妨害を爲すに至れり凡そ此等の事は悉く人間敎たる耶蘇敎本來の性質に戾乖せる





ものなり、是れ畢竟中世耶蘇敎の極めて盛なりしが爲め此强風に陷りたるものなり。然るに近世に至りて夥多の學者輩出し此等弊習の耶蘇敎の眞意を誤るを看破し以て耶蘇敎の眞面目を形はし其正當の位地に復せしめんとせり。蓋し藥にして毒と變するを得ば毒も亦藥に變するを得べし、中世惡弊の毒本と純善なる耶蘇敎より出てたるものなれば、遂には復た惡弊を轉して純粹の人間敎となるに至るべきは必然のことと云ふべし。而して今耶蘇敎の積弊を洗滌し人間敎の眞面目に復せしめんとせば唯一の經典に依るの外なし、經典は淳朴の風を帶び言語文章亦古雅にして、道德上人間性を開發するに最も適當なり。若し眞正に經典の根本に復歸するを得ば宗敎の改良茲に至りて畢れりと謂ふべし。又通常經典を見て其奇蹟怪談に滿さゝるを訝かると雖も、是れ決して奇怪なることにあらず、人間性の最も完全なる眞善眞美の狀態を其中に含有せるものなり、故に人は之によりて眞且美なる性質を開發するを得べしと論じたり。

以上陳述したるヘルデル氏宗敎哲學を概括するに氏はスピノザ、ライプニッツの兩氏の說を統合し、此後に起る所の理想哲學に向て新思想を與へたるものなり、故に

氏は理想哲學の前驅をなすと云ふも可なり。而して其宗教上經典の解釋はレッシンを取りて教育的の者とせしが、氏は更に進みて從來一致せざりし道理と天啓とを結合せり然れども其論たる氏以後の説に比すれば其見る所至りて淺近にして宗教心を説くに於ても之を分析することなく、且つ宗教心の尙ほ深くして且つ高き原因即ち本心より發生し來るものなることを知らざりき。斯の如く氏は幾分か理想一元論の論緒を開きたるも、氏は理想學派の門に入りて未た其堂に登らざるものなり、されど十八世紀の學風を一變して十九世紀學風に轉せしめたる功は氏に歸せざるべからず。

## ヤコビ氏哲學

ヤコビ氏 (Friedrich Heinrich Jacopi) は千七百四十三年普魯西ゾーセルドルフに生る。始め氏の父は氏をして商人たらしめんとせしが、氏は瑞西のゼヂバに在りて教育を受くるの間哲學を好み之を研究せり、然れども父の目的に反するを以て其教育終るの後專ら商業に從事せしが、商業は氏の好む所にあらざれば後之を廢し專ら哲學の講究に從事せり。千八百〇四年ミューニッヒ學校の招聘に應し其校長となり終生此職に當り千八百十九年其地に歿す。氏は哲學者たるのみならず又詩人にして能く世態人情に通せり故に其哲學の如きも論理上並に講究上往々精密を缺くの弊あり又其書も順序系統の整備するものなし、要之氏の書は談話躰隨筆躰の文章なり、且つ氏自身にも缺くことを知り自ら説明して曰く余の書は余の意思を以て人爲的に順序を設け或は組織を立つることなし、唯公心中に考ふる所あれは其盡之を寫したるものなりと思ふに氏の説が世に行はるゝことの少なきは其書の分類明ならざると順序整はざりし故ならんか。

ヤコビ氏の哲學はカントの哲學を批評するを以て起りたるものにして氏はカントに反對して直覺的學説を唱へ信仰原理の哲學を講せり、故に氏は直覺學派中尤も有名なる一人なり。カントの説は主觀的理想論或は抽象的道理教の一邊に偏倚したるものなるが氏は之に反して直接の知識(直覺)即ち吾人が道理思想を待たずして直感即知する所のものを以て哲學の原理とす、是れ所謂信仰なり、故に信仰は道理を要せず吾が感して其事に疑なきを云ふ。其の如く氏はカントが道理一方に偏したると同しく直覺の一方に僻したるを以て、氏は直覺と思想、即ち氏の所謂直

接的知覺(直覺)と間接的思想推理とを結合するを得ざりき。

ヤコビ氏の哲學が順序系統のなきことは既に陳べたり、畢章氏が一家の哲學者として知られたるは重にカントの哲學を批評して其論理上の撞者を指摘し道理一邊の說に反して信仰說を立てたるにあり然れども氏の學が獨乙哲學に及ぼしたる影響は頗る大にして氏が始めてカント哲學を批評したるが爲に學者諸方に輩出しカントが遺したる餘地に向て說明を企てたり、故に氏を以てカント哲學批評の率先者とす、而して氏が批評の論鋒は甚た銳敏にして明確なりしが其說の組織を有せざるが爲に左程に世に行はれざりしは實に惜むべきことと云ふべし。

ヤコビ氏カントの哲學を批評して曰く、カントは唯物唯心の兩說の間に彷徨するが如とし、何となればカントは外界の事物を以て知識の原因とし、其知覺に顯はるゝ所の外界其者の本躰は人智以外にありと云ふを見れば唯物實躰學者の說の如し、然るに一方に於ては外界は悉く主觀以內にありとし、知覺の原因を悟性に歸し悟性の先天的原則によりて外物の吾知覺上に顯はるゝ所以を說く故に氏の說は此二點に於て撞着を生し二者の間に彷徨して其歸する所を知らず、而るに今カントの說をして唯心說とせんか其說一部分の唯心說にして完全なるものにあらず故にフィヒテは更に一歩を進めて全躰の唯心を立てたり。ヤコビはカントに服せざるは勿論、併せてフィヒテの說をも取らず、何故に氏がフィヒテの絕對的唯心論をも取らざりしかと云ふに吾人の意識上には主客兩觀彼此相對して存し二者互に制限して成立つものなり。若し主觀にして無からんか客觀なるもの何れにかある、若し客觀にして存せざらんか主觀亦存することを能はず然るに此相對的のものを以て絕對的とせは何故に絕對的のもの意識中に相對的となりて顯はるや又何故に二者同時に存在するを得るか又フィヒテは主觀の本躰を以て正確なるものとし之を離れて客觀なるものなしと斷定せしが若し果して然か云ふを得ば客觀外に主觀なしと云ふも亦何の不可かあらん是れヤコビのフィヒテを排斥したる所以なり





カントは神の現存意志の自由魂靈の不滅の如き問題は純理批判にては空想となし之を實理批判中に說くに當りて實際上必要缺くべからざるが故に神は現存し靈魂は不滅なりとせしは論理上許さゞる所なり例せば夢の空想は迷見を以て之を信せば確に存在せることを信ずるを得べきも實際上には空無なるものなり、之

と同じく神の形躰の如きは迷信上現見すべきも是を以て實在を證すべからす然るに實際上には必要なるを以て存在すと云ふか如きは謬妄も亦甚しき論斷にして實際上如何に必要なりとも之を以て直に實在と云ふとは論理上許すべからず故にカントは理論と實際とを結合するを得ずして二者の間に彷徨したるものなり。是れ蓋しカントが道理一邊を取りたるを以て勢ひ爰に至れるなり、凡そ眞理なるものは道理のみにあらず道理以外に道理の本づく所の眞理なかるべからず、此眞理は即ち直覺信仰なり。ヤコビかカントの道理教に反し又一般の哲學に反して立つる所の原理は此の直覺即ち直接的知識なり、直覺とは目を開けは直に物の形狀黑白を知り、耳を欲つれば直に聲音を分ち其間に毫も思慮を要することなきを云ふ、而して此直覺は單に感覺上の知識なりやと云ふに氏は感覺を內覺と外覺との二種に分ち通常五官上の感覺は外覺にして此他に內界上の感覺即ち內覺ありとすヤコビは直接的知識を主張して曰く如何なる道理議論も既に論定せられて自然に明瞭なるものなかるべからず、今甲を論せんとするに甲其者は未た確定せざるも甲以外に乙或は丙の既に確定せるものなかるべからず若し甲を定めんとする乙にして不確定のものなれば何を以て甲を定むるを得ん故に乙若し不確定のものならば乙の他に更に丙或は丁の明瞭確定なるものなかるべからず、恰も幾何學上一の公理（アキシヨム）を立て二點の最近距離は直線なり、部分は全躰より小なりと云ふ如きは既に明確なるものと斷定して是より他に論及するが如し。此議論證明を要せすして既に明瞭確實なる者は即ち我人か自然の啓示によりて直に感知する者にして所謂直接的知識是なり。要之直接的知識は思想上の想像を要せず、又道理の證明を待たず總て思想の媒介なくして直に外物を知るものなり、而して此知識は空妄なる想像又は虛僞なる現象の如き者にあらずして、直接的に感知する所のものゝ裏面には一種不可思議の本躰あり此本躰の啓示によりて直覺あり又直覺によりて其本躰の存するをも知るを得べしと。

以上陳べたる所によればヤコビの說はロック等の唱へし普通の感覺說に似たるが如きも其實大に相異なる所あり。今其異點を舉くればロックの說は現象のみに就て講究し現象以外の本躰松論及せず然るにヤコビの說は現象の基礎たる本躰ありとし其本躰は思想上推理して知るにあらず現象を見ると同時に其裏面に本

躰あることを感知すと此れ其異なる第一の點なり。次に普通の感覺說は五官の感覺に止まりてヤコビの所謂外覺なるものなり然るにヤコビは內意なるものあるを唱へ五官に感するを得ざる本躰即ち神の如きものを直に心內に感知するを得と此れ其の異なる第二の點なり。

カントは心を覺性悟性理性の三に分ち純理上には理性を主とし實理上には理性を本とす然るにヤコビは之に反して理性悟性を奪て之を覺性の上に說きたり、氏はカントの說を評し悟性を排斥して曰く悟性は理解力或は推理作用と云ふべきものにして形ありて實なく全く虛想なるものなり、而して其形を充たす所の材料は感覺より來るものにして唯感覺の材料を收集し之を順序正しく組織ずるのみ故に悟性は智識の物柄となるを得ずして、畢竟概念と云ひ總念と云ふものと同一なり、總念は決して智識を組立つるとなく只其形を與ふるのみ之を以て氏は總念概念を空虛なる抽象的思想とし外形の實躰を知る作用は唯、直接的知覺なりとせり。此の如く外界の實躰を直覺に由りて知るを得と等しく內界の實躰をも亦知るを得即ち氏は直覺を內外の二種に分ち外部の直覺は外界の本躰を知り內部の直





覺は神の現存等のことを知る。今何故に神の現存することを直覺作用に由りて知ることを得るかと云ふに若し神にして道理上證明することを得ば是れ既に神にあらず、凡て證明とは推論することにして推論するには或る既知の者なかるべからず、然るに神は尤も明瞭に尤も確實たるものなり、此の明瞭なる者を他の者に由りて推論せば是れ神を以て不明不確の者とするなり神は決して然る者にあらず、證明以外にある所の自明自證の者なり。且つ吾人の思想上眞善或は自由と云ふとあるは神に就ての直覺より起る者なり、故に神は總の思想總の道理の根本なりと。

方向を轉して更に以上の論點を說明せば、悟性或は概念によりて推究するは凡て一のことを他のことによりて證明すと云ふことを意味す故に悟性概念は互に制限せらるゝ事情の中に於て一方より他に及ぼすものなり、換言すれば悟性概念は相對的有限の間の知識作用なり、吾人は即ち其間に議論を上下し相對的を離れて一歩も進むを得ず、然るに神は無限絕對の躰なり、故に若し吾人有限の知識を以て之を證明せんか然るときは神は有限の範圍內に入り復た無限にあらず何者事物には證明するもの(能證)と證明せらるゝもの(所證)とあり神は證明せらるるもの即

ち所證の躰とせんか之を證明する者即ち能證の躰は有限の事物にして且つ所證の者は能證の者の一部分を分派したるものならざるべからす、例せは茲に甲なる一物あり之を證明するに乙を以てす即ち甲は所證にして乙は能證なり而して甲を證明するは乙の中に存せる眞理を分ちて甲は與ふるなり、故に今有限的事物を以て神を證明せんとせは神は有限の者より分派したるものとなるなり、然れとも神の有限ならさるは既に明なり。且つ悟性概念なる吾人の道理作用は万有自然の理法に基つき經驗上の原則に照して論するものなれば神の存在精神の不滅の如き問題は如何に此れが解釋に力を盡すも到底完きを得ず故にカントは純理批判に於て之を否定せりヤコビも亦神は道理作用を以て決して知るべからず、之を知るは直接的智識即ち直覺に依らさるべからざることを云へり、而して其直覺中殊に內界に存する直覺即ち信仰作用に於て感知するなり、此信仰は他物の假定を要せず直接に其確實なるを知る故に吾人が感覺以上現象以外の事は總て信仰に由らざるべからずと。

以上陳述せし如くヤコビ氏は信仰を以て總の智識の基本とせしが、世間或は氏を





目して盲目信仰論者と看做さんとを恐れ、氏自身に之が盲目信仰にあらざることを辯護せり、氏は曰く愚夫愚婦の信仰は其事の善惡正邪を問はず一概に他人の說を其儘信す、是れ即ち盲目信仰なが然れども余が所謂信仰は他人の說に憑りて信するにあらず己の心に於て自ら感したるものを謂ふなりと、由此觀之氏の所謂信仰は愚夫愚婦の信する盲目信仰とは異なる所ありと雖も之を道理或は理解に比するに亦全く異なるものなり、道理理解は有限の間接的知識にして、氏の所謂信仰は無限の智識即ち天啓によりて自然に感する所の直接的智識なり。此道理と云ふことに就て氏の說前後に於て不同を生す始には道理と理解とを同一視し、共に之を有限的のものとして、直覺信仰より區別せしが、後ちカントの覺性悟性及理性の區別を見理性の道理上の直覺は即ち信仰なりとし、道理と直覺とを一致せしめ之を悟性と區別せり、故に心內の直悟即ち信仰は道理上直接に感知するものなり、吾人は此道理上の直覺に由りて神の本躰の如きものを直接に感知することは猶ほ感覺上の直覺にて現象上の有樣を知るが如しと、氏は曰く一切の事物は內外直覺の二作用に依らさるものなし、抑も直覺作用は總の智識の根本にして、人獸の區別

あるも人には內部の直覺信仰を有するを以てなりと是亦カントと異なる所以にして、カントは神の實存等の如きは理性上の空想にして事實上虛僞なるものなりと排斥せしがヤコビは之に反してカントの所謂覺性を取り之を理性の上に持來りて說明し此等の問題は直覺によるものなれは眞正なるものなりと斷定せり且つカントは悟性を主とせしもヤコビは之を排斥し理性を以て眞理の基礎とせり、即ち感覺上の現象は外部の直覺を以て知るを得れとも感覺以上の神の如きは直覺理性に由て知ると茲に至れば氏の說甚スピノザに近つきたり、スピノザは萬有の本躰即ち神にして吾人の心は其一部分なれば吾人若し神を見んと欲せば須らく其心內に反省すべしと云ひしがヤコビも亦心內に直覺作用ありて之に由りて感すと云へり是れ其一致する所なり然れども前者は道理を本とし後者は信仰を本としたるは二氏の相異なる點なり。是を以てヤコビはスピノザを評して無神論者とせり、何となれはスピノザの神は道理に由りて說明せられ、因果必然の法理に由りて支配せらるゝものにして、所謂器械的物理的論法を以て神に當欽めしものなれば是れ却て神を無みするものなりと、此の如くヤコビはスピノザを排斥したれとも、其說スピノザの影響を蒙りしことは甚た大にして、且氏の力によりてスピノザ哲も大に世に知らるゝに至れり。





ヤコビ氏の耶蘇教に對する點は只直覺的信仰によりて神を知ると云ふことを論したるのみにして從來の哲學者の如く實際上の制度儀式には更に論及せざりき又耶蘇と他教との區別も耶蘇教は直覺に本つき他教は悟性に本つくと云ふ考なりき。要之氏は智情意三種中カントが智を主とせし如く情を取りしが氏の缺點たる所は此情即ち信仰一邊に偏せしにあり。若し此の智と情との中間即ち道理と直覺との折衷を取らば茲に始めて宗教哲學上の眞理を見るに至らん。

## ゴエテ氏哲學

ウォルフガング、フォン、ゴエテ (Wolfgang von Goethe) は歐洲文學界の北斗と稱せられし大詩人にして且つ哲學上にも一家の說を爲せし人なり。氏は一千七百四十九年獨逸メーン河畔のフランクフォルト府に生れ十五歲にしてライプチヒに遊ひ此處に其教育を受く然れとも氏は順序を逐ふて學修したるにあらず。千七百六十八年此地を去りてストラスバルク大學に入り專ら法律學を研修し千七百七十一年法理

學の學位を得たり。千七百七十四年文學上の一書を著述せしが是そ氏が最初の著述にして是より續々書を著はし其名聲を歐洲諸國に轟かせり。千七百八十六年以太利を遍歷し二年間此地に止まり、千八百三十二年ワイマー府にありて歿す

ヤコビは其哲學の系統整頓せざるが爲に哲學者として大家の稱を得ること能はざりしが其説の當時の哲學上に及ぼせし影響は尠少なりとせず、ゴエテの如きも亦ヤコビの説に感動せられて興起したる一人なり。ゴエテが千七百七十四年ライン河畔に沿ふて漫遊せし時、ヤコビに會し親しく其説を聽き大に宗教哲學の思想を得又此時よりスピノザの哲學を研究せり。前段述へし如くヤコビはスピノザの影響を蒙りしがゴエテはヤコビよりスピノザの説を聞き且つ自らも亦之を研究し大に得る所ありき然れどもゴエテも亦スピノザを祖述せし人にあらずして、夫のスピノザが本質屬性の説の如き又因果必然の説の如きは其取らざる所なり。氏は以爲へらく因果必然の理法は物質上の規律たるが故に之を神に適用すへからず、若し之を適用せは是れ神を器械的に説明するものと云はざるへからず、又此世界の表面には必然性の理法あるも其世界全躰の裏面には一種の理想ありて其作用を現はすものなりと、又氏は世間の唯神論を排斥して曰く世人は神を有限的のものとして説明を與ふれとも是れ人間の有限の範圍を擴充したるに過きず神は無限の本躰なれは諸有限の上に位するものなり、故に吾人は如何なる名稱を以てするも到底神を表彰するに足らずと然れとも氏がスピノザを許するやヤコビの如く無神論者とせず、蓋し氏の考は世界萬有は總て神の天啓によりて成立つものにして萬有の時々刻々變化するは是れ神の啓示なるを以て吾人は心内を省るも心外を考ふるも世界萬有は總て皆神を知るの階梯なりとするか故に此説はスピノザか萬有皆神の現れと説きたる點と相一致する所にして氏がスピノザの影響を受けたる點亦實に此にあり然らばゴエテは唯一神教なりや萬有神教なりやと云ふに氏がヤコビに與へたる書翰の中に曰く、吾は詩人及ひ技術家としては一神教者なり博物學者としては萬有神教者なりと、畢竟氏の考は神と種々の方向に於て其の力を啓示し種々の事柄に於て世界と關係するものなるか故に吾人は單に一事物に就て神を知るを得す換言せは神は心内に啓示するのみならす萬有普遍に顯示するものなれは吾人は廣く内外を觀察して始めて神を想見するを得べしと

云ふあり是れ氏か世間の反對論者より不信神者として攻擊せられし所以なり。然れとも氏は世間の有神論者が神を以て有限なりとする狹隘の考を排斥して吾人の有限なる知識思想によりて限らるゝ如きものは眞正の神にあらすと論したるを見れば假令世間より不信仰者と看做すと雖も或る意味に於ては氏も矢張り信仰者なり且つ氏は物心萬有の啓示を說くものなれば耶蘇教者より見れは萬有神教の傾あり、然れともスピノザの意より見れは一神教なるが如し要するにスピノザは世界の本躰神なりとして神の世界の上に及ほせる作用を明にせざりしかゴエテはヘルデルと同しく萬有の本躰即ち神にして神は萬有の上に啓示をなすと說き又ヤコビは心內の直覺信仰によりて神を知ると云へども氏は廣く萬有の上に於て感知するとを得べしと云へり、是れゴエテの他の說と異なるの點なり。

ゴエテのスピノザに基きたる說に二點あり一は神を以て世界の本躰とすると一は神か世界の上に顯示する作用は因果必然の規則に從ふと是なり。然れども其之に異なる點はスピノザの所謂本質の躰は活動作用を有せざる死物的本躰なるも、ゴエテは此本躰に創造力を有するものとし活物的本躰とせり、又スピノザの萬有





は實躰あるものに非すして本質の外面に顯はるゝ性質即ち外象に過きす、且つ其者に特別の成立勢力を有するとなしとせしがゴエテは萬有の一物々々に勢力を具するものなるとを說けり。此に由て之を觀ればゴエテはスピノザの說にライプニッツを加へ二氏の說を折衷したるものなり。又スピノザは因果必然說を唱へライプニッツは目的豫定說を主張せしがゴエテはライプニッツを取り萬有の內部に一定の目的ありて神の啓示に從て開發すと說き、又ライプニッツに據りて世界萬有愈進化すれは一致契合するに至ると說けり。故にゴエテの說はスピノザ、ライプニッツ二氏の折衷論と云ふも敢て不可なるとなし又其道德說に於ても氏は一方にスピノザの說を取りながら其厭世說のみは之を用ゐす之に代ふるにライプニッツの樂天主義を以てし、二氏の說を結合せしめたり。

ゴエテの道德說とカントとの關係を說んにカントは感覺上の刺戟に由りて生するものは惡にして吾心內より生するものは善とし感覺上の欲念と純粹高尙の道理との二者について之を結合すると能はすして遂に欲念を放棄せり故に其說は乾燥枯槁せる高尙の道理一邊の道德にして嚴肅主義に傾きたり。然るにゴエテは

情念と道理とは本來一致せるものにして決して反對に立つべきものにあらず却て情念は吾人の善を爲す助となり且つ道理を充たす所の材料となるべきものなり、然れとも吾人の善を妨碍する下等の情欲のみは之を排除せさるべからずと論し、カントが欲念と道德心とを結合する能はさりしものを一致せしめたり。然れども吾人は實際上外界より刺戟せらるゝ欲念と本來の道德心とは往々相反抗するものなり、此の如き場合は如何と云ふにゴエテの考に依れは是れ二者の兩立して爭ふにはあらず、萬有自然の發達の途中に於て假に不和抵抗の現象を示すのみ、故に其發達の極度に到らは不和を生するとなしと是れ蓋し氏が心の上に啓示を說くのみならず萬有の上にも之を說くを以て勢ひ物心二者の契合一致を論定せざるべからず。

凡そ耶蘇敎の宗敎を說くに消極積極の二方あり消極的より云へば吾人々類は罪惡人なりと說き自ら己を責めしむ而して神は之に反して純善なるものとす、然るに積極的より云へは吾人も神の愛によれば罪惡消滅して神人同等の位地に進むを得るなり。故に消極的より云へは神人相離隔して其間甚だ遠けれとも、積極的より云へは神人相同しき者なり、而して消極的によりて人間を有罪なりと說くときは人をして恐怖心を起さしむ、是に於て積極的にありては神の仁惠を說く。(此說は眞宗の機法二種の安心に類似せるか如し、機とは吾人の機根性質にして機より云へは吾人は罪惡の凡愚なり、法とは佛の方に寄せて云ふものにして法より云へは吾人の如き惡人と雖も彌陀の本願を信せは其願力によりて助けられ彌陀同躰となる、即ち機は消極的にして法は積極的なり。此の如く安心の說明は二敎稍類似し此に彌陀の五劫永劫の苦行を說けば、彼には耶蘇の磔死し萬人に代はるとを說く、固より彌陀と神とは其性質全く相異なるものなれども其宗の他力往生を說く安心の上には多少類似する所なきにあらさるは實に奇と云ふべし。而して同中におのつから異味の存するあるは亦掩ふべからす、宜く比較的に講究すべし。)

カントは耶蘇敎を取るに當りて其消極的の方を取りたるものにして、吾人の欲念を探れば一も善なるものなしと說き、ゴエテは積極的の方を取りて其有罪なる人間も神の愛に倚れは無罪の人となると說けり、是れ二氏の說と相異なる點なり、耶蘇敎も或る場合には幾分か厭世の傾きありて、中世の耶蘇敎の如きは全く遁世脫

俗の風なりしが是れ蓋し宗教の性質として止むへからさるものたりゴエテは此厭世の風習に反對し此天地万有は神の啓示を與ふるものなれば外界其者の本來悪しき筈なし外界既に悪世界ならざる以上は何ぞ之を遁るゝの要あらん、若し之を遁れんとする者は其見識の極めて狹少なるものなりと云へり。

又ゴエテは神が人間の如き性質を有すと云へる説に反對し神は有限のものにあらず尚ほ廣大無限の者なり、人間より比較して之に類するものとなすは誤謬も亦甚しきものなりと、然れども氏は耶蘇教の説を全然排棄せしにはあらず、耶蘇の如きも之を捨つるとなく基督は道徳上神の最上の啓示を得たるものなり、然れども基督のみ神の啓示にあらず世界万有總て神の啓示なり、只人間の中に在りては基督尤も多く啓示せられたるものにして、外界万有の中には太陽こそ最も勝れたる啓示を得たるものなれ、故に吾人は宜しく外には太陽を禮し内には耶蘇基督を拜すべしと云へり。

## シラー氏哲學

フリードリッヒシラー(Friedrich Schiller)はゴエテと共に獨逸文學界の兩雄と稱せらたる大詩人なり、氏は一千七百五十九年獨逸のマールバッフに生れ、一千八百〇五年ワイマー府に歿す、氏の父はウォルテンボルグ公に仕へし人にして、公は氏が少年にして非凡の才能あるを知り其教育を引受られたり、氏は始め法律を學びしが中途にして之を廢し、更に醫學を修め大學卒業後も醫を以て其業とす、然れども其間常に好みて詩文を作り遂に著名なる詩人となれり、又傍ら哲學を研究し初に英國の倫理學者並に佛國ルーソーの書を讀み、一千七百九十一年以後にはカントの書を閲讀し殊に其斷定批判に意を注ぎ又其間カント派の學者と議論を上下し大に哲學上の智識を得たり、故に氏の哲學はカント哲學の影響を蒙りしこと太た多し。

カントは感覺上の欲念と道理上の道徳心とを互に相反對するものとせしがシラーはゴエテと同じく欲念と道徳心とを一致せしめたり、シラーの考によれば吾人の一學一動が正しきを得るは感覺上の欲念より起るものにあらず、然れども道徳上に生ずる欲念なきときは以て完全なる道徳を得ると能はず、道徳上の徳とは道徳上の義務を爲さんと欲する一種の欲念たるに過ぎず、故に吾人の有する欲念を悉く排棄するときは道徳を完成すると能はずと、要するに氏は先天の義務と後天

の快樂即ち道理と幸福と一致したるものを以て道德の目的としたるなり、又氏の說に依るに人間は其全躰が道德性より成れるものにして其下等の欲念(情)が道德上の義務心(道理)と一致するを得ざるは是れ人間が尙ほ下等の位地に止まりて高等に達せざるが故なり、若し一歩進みて吾心內に固有する善良完全なる美靈の躰に達すれば二者必ず相一致すべしと。

今カント、ゴエテ、及びシラー三氏の道德說を比較せんにカントは道德上に感情と道理との二元を唱へ此二者は一致せざるものと看做せしが、ゴエテ、シラー二氏は共に之に反して一致するものとせり、然れども二氏の中にも亦各差異あり、ゴエテは本來二者一致する者と看做すが故に更に一致せしめんとする必要なしとす、詳言せば氏の考は物心兩界は共に神の啓示なりと唱へ殊に万有自然の上に重きを置きし說なれば、道德上にも亦此の如く吾人の善を行ふは万有自然の然らしむる所なり、故に吾人は殊更に感情と道理と一致せしむべき必要なし、然るに吾人が實際上善惡二心の相爭ふことあり、本來旣に一致するものならば何故に此衝突を生ずるやと云ふに、是れ万有自然の開發啓示の未だ十分ならざるが爲に假に此現象を





生するのみ、已に本來一致せるものなれば十分に發達すれば此衝突全く消失するに至るべし、之を一個人の上に就て見るに其人一時惡をなすも自然に其惡を滅する樣に進み又人間全躰の上より見るも万有自然は人間の惡を除きて善に進ましめんとする傾向あり、蓋し自然は神の啓示によりて開發せるものなれば自然の人を惡に陷らしむる理なし、然るに吾人が外界の刺戟によりて惡心を起すは是れ自然の目的にあらず、只其發達の途中に於て遭遇する事實のみと、然るにシラーは內外兩界を別にし其の內界、即ち心の內部には美靈なるものあり、此美靈は諸心力を結合する高等の本性なれば進で此躰に達するに至らば感情も道理も共に契合するに至るべしと論ぜり、之を要するにゴエテは万有の上に重きを置きシラーは心の上に重きを置きたるの相違あり、故にゴエテは嘗てシラーを評して曰はくシラーは万有自然の恩義を知らざるものなりと。

上來陳述せし直覺學派を一括して論ぜば抑もカントは近世哲學の漸く衰ふるに乘じ一大革命を企て始めて批判哲學なるものを唱導せしが、其說高尙なる道理一方に偏し純理の極端に走りたるが爲め、之が反動として情感上より直覺の一方を

主張する學派興るに至れり、即ちハートマン氏直覺軍の先鋒となりて道理軍を攻擊し大に戰端を開く、而してルデル、ヤコビ、ゴエテ等各一軍に將として以てハーマンに次ぐ、然れども彼等は其進軍する間に最初ハーマン氏の唱へし所に一歩々々改良を加へ以て同氏が論理に反して道理以外に偏し過激極端に奔りたる僻見を去れり、殊にゴエテ、シラーに至ては人間精神の理想的觀念を取り之を以て道德の本原とするに至れり、ヘルデルは神の啓示の開發するを以て人世の歷史とし之に學術を適用し、ゴエテはスピノザの主觀說を取りて之に加ふるに万有自然を以てし万有自然の開發は神の啓示なりとし之によりて道德上の完美を得る所以を說きシラーはカントの影響を受け人間に本來諸性を結合一致する美靈の存するとを說き此上に神人相合の有樣を見ると云へり、是れ畢竟ゴエテ、シラー二氏が文學者にして希臘古代の文學上より得來れる思想ならん、尙ほ玆に陳述すべきとあり、即ち當時詩人の上よりゴエテ、シラーに反對したる說なり、之を「ローマンチシズム」(Romantioism)直譯して荒唐學派と云ふ。

## ノバリス氏哲學





ノバリス氏の學說を講ずる前に先づ荒唐學派(ローマンチシズム)の如何なるものなるかを略陳せざるべからず、抑も此荒唐學派なるものは十九世紀の初年に當り一種の詩人により て組織せられたる學派にして當時社會の氣風思想の其以前よりは人爲に過ぎ柔弱に流るゝ傾向あるを以て、之に反して中世時代の氣風を挽回せんとする目的を以て起りたるものなり、而してゴエテ、シラーが古代文學の理想的觀念に支配せられ美學倫理學の思想に抑制せられたるに反對して一切放任主義を取り少しも檢束するとなく人間自然の性質に從ひて道德を組立てんとせり、是れ其荒唐の荒唐たる所以なり、然れども其說は尙ほ直覺學派の範圍に屬すべきものなり、今ゴエテシラー二氏の說と荒唐學派との異同を述んに二者共に詩學派たるが故に何れも想像を以て其基本となせども、ゴエテ、シラーは其想像の多少道理に檢束せらるゝ傾あり、然るに此學派は自然の自由に放任し其想像を縱橫に奔騰せしめて敢て檢束するとなく、道理規則の如きは之を捨てゝ毫も顧みるとなく却て想像を以て道理規則を支配し、從來の思想上の秩序論理法に代ふるに無制限無規律放任自由を以てせり、然れども其內に亦幽玄秘密の風を帶びたり、是れ蓋し事物に毫も檢束を

加ふるとなきが故なり其氣風の中世時代の風を學ぶを以て勇壯なる所あれども其舉動は粗野に傾くの弊なき能はず、此風先づ詩文の上に顯はれ文學上の一派をなし、延て哲學上に波及し又其一派をなすに至れり、而して此風を宗教上に用ふれば幽玄秘密微妙の趣味を添へ實行上に用ふれば忠臣義士の勇壯なる士風を興起するに至る、乃ち此風を宗教哲學上に持來りしはノバリス氏なり、

ノバリスの稱は通常文學上に呼ばるゝ名にして其實名はフリードリッヒ、フォン、ハーディンボルグ(Friedrich Von Hardenberg)と云ふ、氏は千七百七十二年獨逸に生れライプシッヒ及びウィテンボルフに於て其教育を受く、不幸短命にして千八百〇二年、廿九歲を以て肺病に罹りて沒す、氏は最も感情深き人にして詩人的才能に富めり、始めシラーの說を聞き大に之を愛玩し其說を固執せしが後にフィヒテの哲學を知り又其說に感化せられたり、故にノバリスの心中にはフィヒテの哲學的觀念とシラーの詩學的觀念と相結合したるものありて、是より得たる結果は哲學的宗教的詩學的秘密的の種々の結合せる一種の學說なり、氏自ら之を稱して魔力的唯心論(マジッケ、フィヒテリズム)と云へり、

ノバリスの學說は大躰の組織をフィヒテの唯心論より取り我(エゴー)を以て絕對的原動躰



とせり、而してフィヒテは之を道理に訴へて說明せしも、ノバリスは純然たる想像の上に說きたり、其想像の奇々怪々妙々なるを魔力と云ふ、凡そ吾人が日々夜々經驗するものは總て奇々怪々なるとにして一として魔力ならざるはなし、又吾人一切の知識は道理にあらずして信仰に由る者なり、而して其信仰は奇怪秘密の魔力より生ずるものなり、又或は思想を事物に變へ事物を思想に變ずるも皆是魔力の作用に依るものなりと要するに此魔力論はフィヒテの唯心論を空想秘密に一變したるものにして、氏は道德上の作用に至る迄亦此魔力に歸するものと說き直覺學派の論をして一層極端に奔らしめたり、

此魔力は如何にして起るかと云ふに是亦フィヒテの所謂絕對的我より生ずるものなり、此絕對的我は吾人の有する我と異なりて吾人の我の根本なり、而して吾人一個人の我は此絕對的我の一分子にして吾人若し是より進むときは遂には絕對的我に到達するを得べし、而して此點に飯するときは全く一となりて相對比すべきものなし、故に之を絕對的と云ふ、

ノバリスの宗教說は感情を以て基礎とし道理を離れて想像一邊に說出したるも

のなり、而して衆感情の相合して一となるに至れは即ち絶對的感情となるなり。換言せは絶對的感情は絶對的我を感する情にして、此感情によりて、宗教思想成立するなり。例せは吾人は事物に對して恐怖の情あり、此情の最も大なるものは神に對して恐怖するの情あり、此情の外に吾人の情は尚ほ許多ありと雖も總て此情の中に包容せらるゝなりと。此考ハシュライエルマッヘルと一致する點ありてシュライエルマッヘルが宗教と哲學とを判然區劃し宗教を情感の一部に迄めたるは即ちノバリスト一致する所なり、然れともシュライエルマッヘルは理想的感情に基きて宗教を講しノバリスは實際的感情を本として宗教を立てたり、實際的感情とは吾人の實際上の種々の刺戟によりて起る所の衝動的感情を云ふ、此衝動的感情に對すれは美學的情は靜止的感情なり。故に二氏共に情の一方を取りしは相同しきも其情の性質に至りては各相異なり。今二氏の學説の基く所を探究するにシュライエルマッヘルはスピノザの靜止的觀念に近く、ノバリスはフィヒテの自動的我躰に本つき或はシッペンハワーの意志に類似せるを見るなり。

次にノバリスの宗教歴史の考を述んに、氏は曰く神と人とは直接に關係するを得





ず、故に其間に必ず一の媒介者を要す、而して此媒介者は宗教に由りて異なるものにして又此媒介者の撰擇如何によりて宗派の相別るゝを見る、或は日月或は草木或は英雄或は鬼神或は偶像或は人性的の神を取りて其媒介とす、蓋し此の如く媒介の種々異なるは人智の程度性質に由るものなり、然れとも全く此媒介なきものは僞教なり、又日月動植等の媒介其者を以て直に神とするは即ち偶像教にして是亦眞正の宗教にあらず、眞正の宗教は偶像教と媒介を立てさる僞教との間にあるものにして即ち媒介物を拒絶するにあらす又之を神として信するにあらさるもの是なり、然らは媒介物を何と信するやと云ふに此媒介物は神の機關にして吾人は之に依りて神に對するを得、神は之に憑りて吾人に顯現するを得とする者是なり。此眞正の宗教に二あり一は凡神教、一は一神教なり、凡神教(万有神教)は一切万物を以て神の機關とし、一神教は世界中に神の機關たるべきもの唯一ありとするなり、而して凡神媒介説と一神媒介説とを結合するときは多種媒介中に特殊の媒介ありて世界を以て盡く媒介者とし其中に耶蘇を以て殊に勝れたる媒介者となす、此の如く考ふれは古代の宗教も今日の宗教をも悉く一致統合するを得るなり。此

點に至れば、ノバリスの説ゴエテの万有を以て盡く神の啓示なりとし其中に耶蘇獨り最も天啓に富めるものなりとしたる説に相全し、只其間二者の異なるは、ゴエテは啓示について此説を唱へ、ノバリスは媒介について此説を述べたるのみ。

以上カントの道理教に反對して起りたる直覺學派の大要を講了せり。是よりカントノ道理説に基きて興りたる理想學派の説を講述すべし。

## フィヒテ氏哲學

フィヒテ氏(Johann Gottlib Fichte)は一千七百六十二年獨逸の一地方に生る。氏は十八歲にしてエナ大學に入り神學を修めしか大に哲學を好み殊にスピノザノ著書を愛讀せり。大學を出て、後氏は地方の一寺に住職たらんとせしか、其説通俗の宗教説に反對せるか爲め世に容れられず、遂には其故郷をも去らさるを得さるに至れり。千七百九年始めてカントの書を繙き大に其説に感し自著の書を紹介としてカントに見え其門人となれり。後學けられてエナ大學の教授となりしが其説極端なる唯心論なるを以て世間より無神論者として目せられ非常の困難に遭遇せり。然れとも氏は社會に非常の効績ありし人にして當時獨逸は佛帝那破翁の爲に蹂躙





せられ國民皆其壓制に苦しみしかは氏は慷慨の情に堪へす自由獨立の必要を諸方に演説し以て愛國心を奮起せしめたり。後伯林に移り千八百十四年其妻の熱病を患ふるに際し之に傳染して歿せり、行年五十三。

フィヒテ氏の宗教哲學を講する前に方りて先つ氏か哲學全系に就て陳述せさるへからす。氏の哲學は前後二期に分れ其エナに在りし時と伯林に在りし時と其説異なれり。初に氏かエナ時代の説を陳ふべし。而して此時代の説は理論的哲學と、實際的哲學との二部に分る。

フィヒテ氏の哲學はカント氏哲學より其思想を得來るものにして其全躰を取れは全くカント學説の結果より生せるものと云ふも不可なるなし。抑もカントか事物其者の實躰は心の現象を離れて存在するものにして吾人の心には之を知るを得すと云ひしは是ぞカント以後哲學上の大問題にして即ち率先して之か説明を試みし者はフィヒテ其人なり。フィヒテは心の外に事物の本躰ありと云ふも其實は心内に存する者なりと説きカントの唯心説を更に一歩を進めて純然たる唯心論となせり。是れ氏の説を絶對的主我論(唯心論)と云ふ所以なり。即ち通常の説は我に對し

て非我あり非我に對して我ありと云へとも、氏の說は我なる者根本にして非我は我自身を制限して生したるものなり、故に我の中には外界も實躰も藏まり唯自己のみ存在するなりと、元來吾人の知覺上には物心二元即ち我非我の並存するを見る、其中物の方本なるか心の方主なるかと、云ふに哲學上二派の論あり、唯物派は物は原始より存して心之より生すと云ひ、唯心派は心本來存して物之より現はる物と前者は物躰學派、後者は心躰學派なり、此の如く二說より他に取るへき道なく二者孰れか其一を擇はさるへからす、心躰論者は曰く凡て物は吾人の心に見て以て其存在を定むる者なれは本來心なるものありて後に物あり故に心は物を產出するものなりと、物躰論者は曰く我感覺上に日月星辰山河草木ありとするには其現象を表示すへき原因即ち物の本躰別に存せさるへからすとフィヒテは之に對して曰く全く此の如き道理あるとなし、物の現象を或は見或は聞き或は其本躰を想像する如き皆心より考へ出すものなり、故に心は絕對性能動作用なり、夫の經驗學派唯物學派の吾人の知識を組成するには必す經驗に依らさるへからすと云ふ如きは未た深く考へさるの致す所なり、既に知識の本源たるものは本來我心內にあり





て存す之を知らさるか故に外界より來るものとするなり、尙ほ能く考察せは物心万境盡く我の一躰より顯現するものなり、故に我のみ絕對性の原動躰なりと、由此觀之其說カントに反するか如く見ゆるもフィヒテ自身にハカントの眞意實に茲にありと云へり、之を要するにフィヒテの說は我か最上の原動躰にして宇宙万有ハ都て之より派出したるものなり此我は一切の原理の最上に位し一切の道理を生す、且つ他の原理は必す其他の原理の證明を待て始めて成立するものなれとも此我のみは更に他の原理を借るを要せすと此我を基礎として立てたるは理論的哲學なり、

フィヒテは我を以て衆原理の根原とせしことは既に陳へたり、既に我ありとすれは次に起るものは我に對するの非我なり、非我とは世界万有なり、既に我非我あれは從て二者の關係茲に起らさるを得す、換言せは始に我あるを知り次に非我あるを知る、而して此二者は或る制限內に於ては相對するものなりと、是れ後にヘーゲルの三斷論法の起りし根原なり、此三斷論法は固とカントが哲學を三段に分ちて論したるに基つくものなれとも氏は未た之に論理上の證明を與へさりき、是に於て

フィヒテ之を繼きて論理上の說明をなしヘーゲル之を完成せり。此三斷論法とは

茲に一の正斷あれば必す之に對する反斷を生す而して正反の二斷對立して存するときは必す之を結合する合斷を生するなり。フィヒテの所謂我は正斷なり。既に我あれは之に對する非我茲に生す、非我は即ち反斷なり、而して二者の並存する時は更に其間に關係を生し我非我の結合を生す、是即ち合斷なり。

元來フィヒテの說はデカートの一切万物を疑ひ盡して其極、疑其者のみを除くを得さるに至り此疑や我の疑ふなり故に我は存すと云ひし說に基きて起りたるものなり。蓋し如何なる者と雖も思想其者を確定せされは議論するを得す、彼の思想を排斥する唯物論者も尙ほ思想を假定せる者にして彼等か物の實在を確定するには其以前に既に思想あるを假定したるなり。思想其者は之を解釋せんとするも證明せんとするも將た定義を與へんとするも到底爲し得へからす何となれは解釋





定義等は思想其者の中に造出すとにして思想ありて後之ある者なれはなり、此の如く論し來れは必す思想其者を確定せさるへからす、是れ氏か論理の大本は我なりと云ふ所以なり。

フィヒテ氏理論的哲學は三段に分る。即ち第一段智識一般の原理、第二段理論上の原理、第三段實際上の原理是なり。

第一段、智識一般の原理は之を三段論法の考によりて三段に分つ、其第一は眞理の眞理原理の原理と稱すへきものにして甲は甲なり」と云ふ命題なり之を同一命題或は均同法と云ふ「甲は甲なり」と云ふは「甲は甲其者に同し」と云ふとにして、例せは「人は人なり」「花は花なり」「雪は雪なり」と云ふか如し此命題は其正不正を論するを待たすして吾人の思想は固より之を確實と認定せるものなり。若し此命題にして誤謬を免れさらん乎、吾人一切の智識思想は悉く謬妄なりと云はさるへからず、故に此命題は絕對的確實にして思想の原理たり。然れとも「甲は甲なり」とは是れ形式上の論のみ、形の上には確實たるへきも形を充たす質は絕對的に確實なりと云ふを得す、何となれは「甲は甲なり」とは甲なる者若し茲に存在せは其甲は即ち甲なりと

云ふものなれは甲其者は猶ほ假定を免れさるなり、然らは此形の中に質の絶對的確實なる者を適用すれは始て正確となるべし、其絶對的確實の者は即ち我なり、故に甲に代ふるに我を以てし「甲は甲なり」と云ふを「我は我なり」とすれは形質共に絶對的確實の命題となりて寸分も假定を加へさるものなり而して是より他に確實なる者あらさるを以て見れは此命題こそ論理の大根本にして智識一般の原理と云ふへきものなれ。

第二は「甲は非甲にあらす」と云ふ命題にして之を否定命題或は背反法と云ふ。此命題は第一命題を一變して構成したるものにして既に第一に於て「甲は甲なり」と云ふ命題の確實なる以上は「非甲は非甲なり」と云ふとも確實とせさるへからす、又之を變換して甲は非甲にあらす」と云ふも亦確實なりと斷定せさるへからす。然に單に甲と云ふときは第一に於ても既に絶對的確實ならさるを以て第二に於ても亦甲に代ふるに我を以てし「我は非我にあらす」とせさるを得す。然れとも此第二命題は第一命題ほど絶對的確實にあらす、何となれは今の所謂我は相對的にして第一の絶對的我より生したるものなれはなり。第一命題に於ては絶對的我のみにして





之に相對するものあらす、然れとも茲に我あれは其反對の非我ありとは思想上に免るゝを得さるとなるか故に第二命題は第一の正反對なり。然れとも第二は第一に本くものなれは第二は第一より分派したるものと云ふへし。

第三は第一と第二とを結合して「我は非我なり」と云ふ命題を構成す、之を制限法と云ふ。固より我と非我とは反對の者なれとも制限上我は非我となり得る者にして此二は反對しなから並存するを得並存するを得るは必す何れにか一致する點あれはなり。之を實際上に徵するに我が主となりて非我を制することあり、非我が主となりて我を制することあり、主客兩觀物心二元の上に考ふるも主の客を制するとあり、客の主を制するとあり、又物の心に制せらるゝとあり心の物に制せらるゝとあり、此くして物心互に制限せられつゝ對立並存す故に「我は非我なり」と云ふを得。然れとも我全躰の上より「我は非我なり」と云ふを得す我の一半か非我の一半に同し即ち或る制限内に於て我は非我に同しと云ふとなり。此第三命題は第一第二を結合したるものにして、是に至りて論理の完結を見るなり左に智識一般の原理の三段論法を表示すべし。

第一　「我は我なり」……同一命題或は均同法

第二　「我は非我にあらす」……否定命題或は背反法

第三　「我は非非我なり」……制限法

第二段理論上の原理は第一段智識一般の原理を應用したるものなり。凡そ我と非我と相對する上に於て非我が能動作用となりて我が所動となる場合と我が能動となりて非我が所動となる場合とあり。理學の如きは前の我が非我に依て制限せらるゝ場合にして、道德學の如きは後の我が非我を制する場合なり。今此第二段理論上即ち學問上の原理は前の非我の我を制する場合を云ふなり。何となれは理學は外界萬有を以て主とし萬有を確實として論する者なれはなり。此事たる既にカントの上にありて純理批判に於て外界の經驗を待て後智識を生すと云ふは所謂非我の能動となり我の所動となる場合なり。而して實理批判に於て理性の力外界を制すと云ふは所謂我の能動となり非我の所動となる場合なり。又唯物論唯心論も此關係より出てたる者にして唯物論は非我が能動となる場合を論したるものにして唯心論は我能動の位置にある場合を論するものなり然とも我と非我との





眞正の關係を知らす或は非我あるを知て我あるを忘れ或は我あるを知て非我あるを忘る故に獨斷的唯物論或は獨斷的唯心論に陷るなり。フィヒテは之を排擊し批判的に我と非我との上に絶對的我あることを說けり。蓋し獨斷的唯心論は非我の境遇を以て我より與へたるものとし。獨斷的唯物論は非我の本躰ありて後ち我ありとして各々一方に偏倚するものなれとも之を推究するときは其上に絶對的我あるを知るべし。此絶對的我と相對的我との關係は絶對的我が自身の上に制限して我非我の區別を生したるなり故に相對的我は絶對的我の自制自限の作用によるものなりと論せり。由此觀之フィヒテはカントが事物の本躰心外にありとせしを心內にありとし、カントが事物の本躰と心の現象との間に界線ありとせしを是れ我自身に制限を置きたるものなりとせり、是に於てカントの說絶對的唯心論に變せり。

第三段實際上の原理は前述せし如く我非我相對の上に於て我の能動作用となり以て非我を制する場合を云ふ。而して理論上の原理實際上の原理共に第一段の智識一般の原理を應用したるものなれは第二第三は第一段より分派したるものと

云ふへし。而して理論上の原理を應用して起るものは萬般の學術にして實際上の原理を應用して組織するものは實際的哲學なり。是れ蓋しフィヒテ氏の論カントに基つく所にして其純理批判は理論的哲學にして實理批評は實際的哲學なり。

フィヒテの所謂實際的哲學とは政治學と道德學とを說くものなり、故に實際的哲學の問題とする所は權利と倫理との二なり。先つ始に氏の權利說を述ぶべし。

氏の權利說は人間を一個人として與へる解釋を基本として說き出したるものなり。凡そ吾人人類は天地間に棲息して一種の思想を有する動物にして即ち吾人は思想道理を本として成立つものなり。苟も思想道理を有する以上は吾人に自由の動作なかるへからす若し吾人にして自由の動作を有せすとせは決して思想的動物と稱するを得す既に吾人か思想的動物にして自由の動作を有すとせは此自由の上に於て吾人に對する外界の存立を要す、若し外界なくんは自由ありと云ふも何の用をかなさん吾人か自由あるには必らす其相手なかるへからす又若し吾人か一個人として自由の動作を有するものとせは他の人類も亦自由の動作あることを計さゝるへからす何となれは思想的動物の同類なくは己自身に己の自山なるとを知るを得す雙方の關係によりて己の自由を領會するものなれはなり。前に絕對的我の制限して非を我生するは我の顯はるゝ爲に非我を要するなりと云ひしと同論法にして吾人の自山動作を有するには之に對する外界の存立なかるへからず而して又之と同時に他と己と同しく自山の動作を具ふるものありとせさるべからず此の如く各人總て自由の動作を有する具にして各人皆自己一人の範圍內に於て自由なり此範圍を超えて他人の區域を犯して自由なるを得す、是に於て吾人の間に互に制限するの必要起るなりと。要するに吾人は自由動作を有するものにして自己か自由なると同時に他人も亦自由なり是れ各人相互の間制限の起る所以にして此各人相互の自由を妨害せさる樣に自己の自由を達する作動を權利と曰ふ、故に其格言に曰く「爾は爾と關係を有する他の各人の自山なることを領知して爾の自由を制限せよ」と是れ權利なる者の眞意を盡して餘蘊なしと云ふべし、此の如く權利は各人相互の關係より生するものにして此權利に三種あり。第一原始的權利は權利の本源たるものを云ふ是は一個人の道理上より起る解釋にして即ち個人性の絕對的權利なり。元來一個人の上には自主自由不羈獨立の權

利あり、是れ即ち權利の大本にして之より他の關係を生す之に身躰自由權と財産自由權との二種あり、即ち絶對的權利あれは吾人の身躰に於て自由の權を得又之と共に財産上に自由の權利を有するなり。既に吾人には不羈獨立の權あり、然れとも自己のみならす他人も亦共に之を有するか故に茲に自他の關係を生し吾自由の權は他に對して制限を置かさる可らす、即ち他人吾權利を保護せは吾亦他人の權利を保護せさるへからす若し其制限を超えて妨害するとあれは其權利を器械的に保繼する必要を生す、是に於て第二の强行的權利あり。此權利に基きて法律上の刑罰起る蓋し法律上刑罰の目的は他人に對して不正の行爲をなさは之を防禦し且つ刑罰と云ふ苦痛を以て報酬せらるゝことを知らしめ各自の權利を完全に保護するなり。此の如く强行的權利を與ふるとき各人の上に契約の必要を生す即ち規則を設け之に牴觸するときは刑罰を與ふることとなす、見れ一般の法律の起る所以にして第三に契約的權利(或は法律的權利)なるものを生するなり。此契約により て各人相互の間に各其自由を保護することを規定す、若し之を實行する場合には一般人民の意志を集め之を法律とするの方法なかるへからす是れ立法部なる者





の起る所以にして既に立法部あれは此に於て規定せる法律を執行する行政部なかるへからす、是れ即ち政府の組織ある所以なり。

凡そ事物には道理上と實際上との二種あり實際上は必す道理上の指定に從はさるへからす、然れとも道理上此の如くせさるへからすとすることも實際上之を行ひ得さるとあり、權利にも亦此二種あるものなれは其時に應して道理實際の結合を計らさるへからす、此二種を一致結合せしむる目的を以て研究するものは即ち政治學なり。勿論道理上考定せるものと寸毫の差異なく實際上に行ふとは到底爲し得へきとにあらされとも、出來得へき限りは道理上に近似せしめさるへからす、若し實際上にのみ一任して道理上によりて改良を計るとなくんは是れ權利の思想に反對したるものと云はざるを得ず以上は氏か權利說の大要なり。

次に實際的哲學として說きたるは道德學なり。氏は理論的哲學に於て絶對的我を說き之を萬般の學說の根據とし、且つ之を實際上に應用して初に權利を說き次に倫理を論せり、權利の上に於ては許多の人あるを豫定し其間の關係について說き、倫理の上には數多の我を統合して一となし其上について論したり。而して權利と

倫理との相異は氏の考によれは權利は各人相互の間に各其自由を全ふせん爲に其人の行爲に外部より制限を與ふるものにして、倫理は全く外部に關係せすして單に內部の精神上に制限を與ふる者なり。詳言せは權利は他人と自己との間に衝突する場合あるを以て相互の間に制限を設け其範圍內に各自の自由を完うせしむるものなり。倫理は內部に二種相反の刺戟ありて互に抗爭するとあり其刺戟とは一は外界より來る刺戟一は內部に生ずる刺戟なり、凡そ吾人人類は道理思想を有するものなれは此作用により絕對的自由に向て我舉動を刺戟する者なり、是即ち純然たる自由を求めんとする內部の刺戟にして、之を假に純然性衝力と云ふ、此衝力は即ち道德の本心なり。然るに吾人は實際上有限なるものにして非我の境遇に圍繞せらるゝものなるか故に自己以外に非我の存立を許さゝるへからす。是に於て萬有自然の上より我感覺上に與ふる刺戟あり、此救戟は吾人に快樂を與ふるものにして、之を純然性に對して不純然性衝力と云ふ是れ快樂の情を起すものなり。之を要するに第一純然性衝力は無限絕對にして第二不純然性衝力は有限相對なり、前者は自由を得るを目的とし後者は肉躰的なり、前者は精神的にして後者は肉躰的なり、前者は自由を得るを目的とし後者は





快樂を得るを目的とす、而して前者は絕對的我の內部より發する刺戟にして後者は非我萬有より與ふる刺戟なり且つ此の問題は最も重大にして前者は直覺學派、道理學派の唱ふる所後者は經驗學派、功利敎派の唱ふる所にして其間互に論爭絕ゆるとなく常に學者の之を結合せんと力むる所なりカントは嘗て此二を結合せんとを試みて却て一方に偏せしかフィヒテは稍二者の調和を爲すを得たりフィヒテの考に依るに此二衝力は我心中にありて互に相抗爭し相破壞するものなれとも二者の本原に遡ほりて探究すれは其上に尙ほ一の絕對的境遇あり此點に達すれは二者合して一となるなり其故は肉躰性快樂的の刺戟は吾人をして自己を保全せんとする性力を生せしむるものにして精神上純然性の作用を誘發するに缺くへからさるものなり、若し此自己を保全せんとする衝力なくんは吾人か世界に對する一切の活動も知覺も一時に止まるへし、然れとも肉躰的の刺戟即ち不純然性衝力は純然性の道德に附屬して成立せさるへからすと、是れ蓋し氏の唯心論より來るものにして理論上に於て相對的非我は絕對的我の自制自限より生出せるものなれば之を還元すれは絕對的我に歸入するなり、而して不純然性は非我の境遇

より起るものなれは我の純然性は之より勝るものと云はさるへからす且つ我非我は其裏面に於ては相結合して共に絶對的我に屬するものなれは純然性を以て主とせさるへからす、而して吾人は第二種の刺戟と雖も單に肉躰上の快樂を得るを目的とするにあらす倘ほ之より高等なる感覺以上の快樂を得んとを目的とするなり、然れとも亦消極的に外界を離れ世間を遁るゝを以て目的とするにあらす積極的に感覺世界より倘ほ高等の自由を得んとするなり、且つ我其者は己の自由を發達せしめんとするものなれは此點に到達せは非我をも支配するに至るへし而して此點に達せは二衝力相一致するなり、此目的を以て一致の方向に進むが即ち倫理の性質なり、要するに倫理は人類の一段々々進歩じて一層高等の自由を得んとするにあり、換言せは絶對の我中有限の存立あれとも此有限の關係を脱して純然たる無限性の自由を得んとするか倫理の究竟の目的なり、故に吾人は道德上に益々自由を開發するとを力めさるへからす、且つ吾人は無意識無知覺にて不純然性の刺戟に隨從するは決して目的にあらす、意識上道理上明了なるものを以て道德を履行せさるへからす、然れとも吾人は無意識にて自然の天性として同情相





憐むか如き道德心ありて倘ほ道理に合することあり、此の如く不知不識道理に合する場合なきに非すと雖も是れ極めて稀なる例にして外界上の刺戟悉く道理に合すと云ふへからす、之を要するに吾人の目的は「自由なれ」と云ふ命令に服從するにありて其自由を道理上明了に知覺して以て自由の本境に進まさるへからす、而して其一段々々の進歩の階級を講するは即ち倫理學なり是れフィヒテ道德論の大要にして此道德説に基きて宗教論を組織せり。

以上フィヒテ氏第一期哲學の大意を講述せしか倘ほ茲に講述すべきは氏の第二期時代の哲學なり。

第二期の哲學はフィヒテ氏か一千七百九十九年エナを去て伯林に移りし以後の時代を云ふ此第二期は第一期に比して多少其説を變せし所あり。今其原因を穿鑿するに、第一氏の最初唱へし哲學は絶對的主義論にして唯心論の最も極端に奔りしなるか、之を實際上に適用するに實際上の事實に當嵌まらさる所あるを見て多少其説を變し、第二當時セリング氏ありてフィヒテの主觀的理想論に反對し客觀的理想論を唱へ其説世に行はるゝに至りしがフィヒテは之に反對して自説を守りた

るも尙ほ多少セェリングの說に影響せられ自然に其形を變するに至れり。又第三には外部の關係上よりも多少變說の原因を爲したるか如し。氏の哲學に於ては神の解釋全く普通の說に異なるか爲に、世間より無神論者として攻擊せられ、氏は之か爲に數々困難に遭遇したるとあり且つ氏か伯林に移りし以後は其交際する所も前に異なりてシライエルマーヘルの如き宗敎家もありしかは此等外部の關係より多少影響を蒙りしものならん。

第二期の說は、第一期の如く價値ある著書なく、又思想上より見るも前期の如く新思想なく、論理も亦其秩序方法前期の如く整然たらす。要するに第二期は第一期の餘派たるに過きすして、第一期より數等劣れるか如し然れとも宗敎哲學の點に於ては第一期より第二期に論すへき所多しとす。

第二期に於ては前の主觀的理想論に客觀的凡神論を混同せり。故に第一期の所謂絕對的我は第二期に至りては變して絕對的神となれり。第一期に於ては神を說かす一切萬物は我自身の力より發現したるものなるとを唱へ、最後に至りて道德上の關係より、僅に神を說出せるのみ。然るに第二期には神を立て之を以て哲學上の





原理とせり。要するに第一期には我を以て第一原理とし、第二期には神を以て第一原理とせり。故に第一期の論理的道理的嚴正の主義は第二期に於ては宗敎的秘密的溫和の風に化し且つ第一期の義務說は第二期に至りて愛の說と變せり。是れ第一期と第二期との異なる點なり。

次にワイヒテ氏の宗敎哲學を述へんに、氏の宗敎說はカント氏に本つき道德學と相關係して起りたるものなり。氏は始めカントを知らさりしが後に其書を讀み大に之を感し、カントに面せんと欲し一千七百九十一年一書を著述し、此著を紹介としてカントに見えたり。其書は天啓批判(Critique of all Revelation)と題せるものにしてカントの意を推測して宗敎を論したるものなり當時カントの宗敎論未た世に出てさりしが一千七百九十二年匿名にて此書を發行するや世人皆カントの直作なるべしと想せり。是より氏はカントの門弟として知られ、又其名聲嘖々として世に顯はるゝに至れり。

此書の大意を述へんに、宗敎の神の命令の下に道德上の規律を現示するものなり此現示の方法によりて獨り道德上の規律を保護するのみならす、道德上の規律に

反對する情慾をも制止するを得るなり。若し人下等の慾念の爲に壓服せられ其有する道德心も其勢力を失ふに至りて、よく道德心を喚起し人間の道德上の本性を啓發するは人間以上の神の命令即ち天啓に依らさるへからす。其天啓の吾人にあるは我良心の內に神を以て道德の立法家として、之を認知し且つ道德上の規律を自知する本心あるに就て發見するなり。故に吾人か道德心の自由を開發するには宗教に依らさるへからす、宗教の力は即ち天啓なりと。由此觀之道德も宗教も共に同一の者なり。蓋し氏はカントの意を察して此書を著はしたるものなれば其カントに同しきは固より其所なり只其中に二氏の異なるはカントは道德心と情慾とを結合すると能はさりしにフィヒテは之を一致せしめたり、是其理論的哲學より出てたる結果なり。

フィヒテ氏の宗教哲學は其實際的哲學に屬するものなるか、氏は其後宗教信仰の基礎(On the ground of our belief in a Devine government of the world)と名くる一書を著はせり。此書に由れは氏の說と耶蘇教の說とは大に異なる所あり、氏は懷疑學者の如く無神を主張するにあらす、然れとも氏の所謂神は天地萬有を創造せる神にあらす。





又格段の存立を有する神にもあらす、道德世界を支配する者を以て神とし道德上に規律秩序の行はるゝは是れ神の現はれなりとす、故に道德上の規律秩序の躰を指して直に神と名けたるものゝ如しされは吾人は常に正道を守り規律に從ふときは神の活動發現するを見るなりと云ふ。由此觀之神の世界なるものは別に我生存の世界を離れて存するにあらす、我道理の範圍內にある世界なり。而して氏は之を以て宗教の基礎とし此道理を示すものは宗教なりとす。抑も神なる者は前述せし如く吾人の道德性を開發し支配し道德上の規律を遵守すへき樣に命令する者にして吾人は此他に別の神あるとを信する必要なし、又之を信せんとするも道理上決して信するを得す世間の所謂神は道德の範圍を離れ天地萬有の目的を豫定し人間に類する智情意の性質を具するものなりとす、若し果して神は吾人を離れて存するものならは此れ世界以外に存するものなり、又神にして智情意の性質ありとせは神も亦身心の二を具へさるべからす、此の如き神は吾人の道理上信するを得さる者なり。是神は吾人の大なる者と看做し其躰を想像して神の名を與へたるに過きす、抑も吾人と有限性の者にして如何に吾人の想像を放大ならしむるも

尙ほ有限性たるを免れず、有限性の神は論理上決して許すへき者にあらずと。是れ氏の說道德と宗敎とは同一の基點より起れりとする者にして唯其異なるは道德は行爲擧動の上に關し宗敎は信仰の上に關すとするのみ。是氏の世間より無神論者として攻擊せられたる所以なり

氏の說によるに道理上に存するものは必然の理なり、若し必然ならざる者は道理に合せず、必然ならざる者を眞理とするは吾人の迷誤なり、通俗の所謂神は人の想像したる者にして道理上必然にあらず、故に通俗の神は迷誤なり、彼等は云ふ既に宇宙あれは之か原因たる神ありと然れとも之れ道理上必然と云ふを得す、若し道理上より考ふるときは世界其者は絕對不可知的なるを知る、而して絕對其者は有機活動躰にして其內部に一定の規律を有し、此規律に本きて自發自動して此世界を顯はす、故に此世界其者即ち絕對にして世界以外に神の如き絕對の躰あるとなし而して此絕對の躰より自發自動の作用を以て世界に自由の啓示を爲すものは道德上の世界なり、故に道德世界は自由の世界にして感覺以上に位し感覺世界を脫して達すへき境遇なり、而して吾人の目的は此自由の境遇に躰達するにあり。以





上は氏の道德宗敎の基礎として論したる所なるか世間より無神論者の攻擊を蒙りしを以て、氏は之を辯護し、宗敎の眞理を示すものは哲學にして世人の偶像に均しき人間性神躰を信ずるか如きは却て無神敎者なりと論せり。

フヒテカ世間の攻擊に對する一論文あり、曰く耶蘇敎中に含む眞正の道理を開示するは哲學なり、抑も哲學上の問題は善とは何そや眞とは何そやと云ふにあり、之を論するには恰も理論的哲學に絕對的我あるを假定するか如く、道德上宗敎上に對絕的善絕對的眞あることを假定せさるへからす。吾人の心には一種の聲ありて吾人に義務あるとを知らしむ、又外界より獨立せる一層高尙なる自由の境遇あるとを知らしむ、此境遇は吾人の心に關係を有し內に省れは良心の存するを見るなり、而して道德上に一定の規律あるを知るは即ち良心の鏡面に於て知るなり。故に義務の命令に從て自由の境遇に躰達するを勉むるは道德宗敎の目的なり而して感覺上に現るゝ諸事諸物は絕對的我の境遇より反射して顯れし者なれは是れ只道德上義務を充すへき材料方便たるに過きす、然るに世間の宗敎は感覺上の萬有萬境の上に神あるを定め、感覺上の性質より想像して其形躰を構造したるものな

り。然らは是れ偶像教たるに過きすして却て無神教なり、道德上の規律を以て神としたる說こそ眞の有神論なれと。由此觀之氏は世間の宗教を眞宗教にあらすと論破せしか勿論世間の宗教は有限に偏し過きたるものなれともフィヒテも亦一方に偏する說にして公平を得ざる所なきにあらす、元來神は絕對無限の躰なるも之を心裡に想出するときは多少の制限を蒙らさるへからす、是れ蓋し人智の止むを得さる所なり、是に於て多少の偶象性を帶ふるに至る、若し全く純然たる道德一邊の神を說くか如きは形式のみにして材質を缺きたるものを生すへし今フィヒテの論は此の如き神に偏したるを免れず。此等の點を考ふれは氏の宗教論も未た完全と謂ふへからす、然るに氏自らも亦多少感する所ありしにや第二期に至て其說を一變せり。

第二期の說は第一期の如く斬新なるにあらされとも第一期の唯心論に傾き過きたるか爲め稍其說を變するに至りたる者なり。第二期に於ては宗教の上に實際的の宗教と宗教學即ち理論的との區別を立てたり、宗教其者は人間全躰に關係し人間の行爲擧動を支配するものにして、宗教學は之に反して衆人一般の關する所に





あらす、宗教其者は活物にして宗教學は死物なり、且つ宗教は感情に關し宗教學は感情に關せす、されは宗教學の爲に新に感情を起すとなく又破るとなし、又宗教學は論理によりて推理するも宗教は道理に由りて組織すへきものにあらす人間固有の純然たる道德の感情を開發するを本意とするなり、故に宗教には神の存在、神の性質を論せす唯神人の關係を吾人の行爲に對して教ふるものなり、されは宗教は外部より新思想を注入するにあらす自己の固有せる宗教思想を發育するものなり。此の如く氏は始に主觀的唯心論の極端に奔りしを一變して客觀的唯心論となし其宗教論も倫理的凡神教の形を取るに至れり、是れ宗教論の第一期第二期の異なる點なり。

第二期中に氏は人務論なる書を著はし其中に氏の宗教說を論せり、其書によるに感覺上に顯るゝ事物も又推理概念によりて得たる智識も共に世界の眞理を示すを得す、感覺上より研究せは世界の外に眞理として定むへきものなく、殊に經驗論によれは我心に自由の思想の存するを知らすして萬有の器械的制限を受くるもの實と、又推理概念より得たる智識は萬有實と在を我意識の反射とし我其者の實

在をも之を夢中の空想とす此事たるカントの所謂悟性理性の論點に考ふれは明なり、フィヒテは之に對して絶對的の眞理は一層高尚なる信仰に由らされは達するを得す、信仰は感覺推理より得へきものにあらす心の本性の上に屬する者なり、即ち心の本性の上には良心と名くる者ありて我舉動を支配し行爲を命令し吾人は此命令に由りて我心中に眞實世界即ち自由獨立の世界あるを知る、而して感覺世界なるものは只良心上より發する義務を達する手段階梯たるに過きさる者なり、と、此に本きて實際的宗教起るなり、然るに宗教學は推理上の講究にして絶對的の實在を感するを得す、人は此世界に在りて只信仰によりて一層高等の世界あるを知る之に達するには感覺世界の境遇を媒介として進まさる可らす、而して推理概念と感覺上の現象とは共に絶對的無限の上にありて一なり故に此二者其根本に遡れは同一なり、然るに吾人の知識の有限なるは何そやと云ふに是れ無限の道理か自制自限して有限の顯象を爲すなり、此無限の道理を神とす即ち第一期の所謂絶對的我なり、然らは有限の理は無限の道理即ち神の中にありと云ふへし、此無限の道理は精神と連絡する者にして、吾人の義務の道理も此中より生し吾人の生命も此中より顯はる、而して神と我心とは互に相關係し神の聲は吾人の心に響き吾人の聲は神の眸中に響くと云ふ、然れとも吾人の有限上の神は眞正の神にあらす、眞正の神は一切の有限上即ち物の上にも心の上にも遍在するなり、是れ萬有神教の形を爲したりと云ふ所以なり、又神の上には一種の眞世界を見る、其中には萬有なく變化なく只神のみ存す、而して此世界は感覺世界より更に一層高等にして一物として善ならさるはなし、現在世界の善惡は最上の善に向て進む刺戟にして死は一層高等の生活をなす方便なり、神は吾人に通するに精神上の眼と聲とを以てするものにして吾人の生命も心内の聲音も共に神の發顯なり、而して外界の現象は恰も旭日の光か數千萬の露に反射して無數の色を生する如く神の反射なりと論し遂に凡神教に傾き秘密的宗教論となれり、而して此說は一方にはシェリングの客觀的絶對論に達する階梯となり、一方にはシュライエルマーヘルの宗教論に至る階梯となれり

フィヒテの宗教說は第一期に於ては道德宗教を一に看做せしも、第二期には之を分ちて宗教は道德より尙ほ深奧高尚なるものとせり、道德は心中の義務の命令に從

て善を行ふのみにして更に其義務の起る所以並に義務の性質如何を知らず、然るに宗教は道德より更に深き根源に遡り規律義務の性質を明にして而して此規律義務は無限の生命の發達より起る所以を詳にす、道德は其道理を知らすして單に義務に服從し、宗教は其命令の根原たる生命其者の精神中に呼吸し生活して存する者なり、故に道德にありては命令に從ふを本とし、宗教にありては命令の前に意志あるを要す、而して道德宗教の外界に對する關係は道德は外界の規律を離れ內界の規律に基きて起る、故に外界の規律は道德に對しては其力を失ふ、然れとも尙ほ內界の規律を存す、然るに宗教は內界の上に立つものなれは內界規律其者も宗教に對しては其力を失ふ、されは宗教は道德より一層高く且つ深き處に位するものにして宗教心の中には道德心を包有するなり、例せは克己作用の如きは我心に苦痛を感する者なり、然れとも道德上にありては其何の故たるを知らすして只心內の命令に從て此苦痛に打勝つのみ、是れ道德の性質なり、然るに宗教上にありては克己の苦痛なるとを覺えさるなり、何となれは宗教は道德より尙ほ高き處に位し神の愛惠或は幸福と自己の心とを一致結合するを以て更に服從の苦痛を覺ゆる





となし凡そ宗教上神の愛惠を得たる上には苦藥盛衰の範圍外に超出し其生命は神の生命を根據として無限不滅の惠福を有する者なり、されは道德は宗教の初門にして道德上規律に服從するとを練習すれは其結果愛惠を感し眞味眞樂を感するに至ると是れ第二期の宗教と道德との關係論にして如此解釋すれは其論秘密的たるを免れさるなり

次に形而上學と宗教との關係を述んに形而上學は宗教に缺くへからさる要素にして古來宗教は種々の形を以て顯るゝも何れの宗教も形而上學に關係し形而上學の道理に基つくものなり然るに宗教家は形而上學を擯斥し愚弄するものは是れ自から宗教を擯斥し愚弄するに均し蓋し宗教は一種の見一種の光にして其光は所謂神の光なり其神光中に一切の生命生活を現するなり故に宗教は道理思想と密接の關係を有す、然るに道德は實行一方に關するものなれは宗教と異なると論を待たず

其後一千八百〇六年又宗教上に關する一論文を發行せり此論文には惠福なる生活の道理を論し生命と惠福と其根源一なるとを論したり若し汝は何を愛するか

何故に生存するかと問はゝ愛は汝の生活の根原中心なるとを知るへし、而して眞の生活は其中心なる神の愛と生命と同一なるものなり然るに神の生命は不生不滅にして吾人の生命には變化あり吾人の生命に變化あるは是れ吾人の生活の屏影幻像に過きす而して此神の不變不化の生命は吾人の思想に存し、又吾人の思想に由りて知らるへし、何者其思想は神の精神より發して我心中に入りて存すれはなり、故に吾人の思想によりて神の生命の不變不比なるを知ると、氏は此の如く說明し之を以て眞の宗教なりとし眞の宗教にては吾人は外界の諸物に付て有る愛を捨て單一の愛即ち神の愛に躰達し之に由りて得たる生活を惠福の生活と云ふと說けり。



又フヽヒテは世界の解釋に就て其發達の順序に許多の階級あるを說けり。第一は下等淺薄なる見解にして感覺上の現象を其儘眞實の物として說くもの即ち唯物論者の如きもの是なり。第二は第一より一歩進みたる見解にして世界を感覺上の物質的規律の支配の下に置かすして道理的生物の規律の本にあるものとす普通の道德學は此見解による。第三は第二より一層高等の道理より與ふる見解にして、我



心內の規律の最上に遡りて絕對性の規律に達し神の生存と結合し神の啓示の上に內界の規律道德を講するものなり。第四は今一歩高尙にして純然たる宗教の見解なり即ち此見解によれは善美は神の性質の吾人に存するものにして此性質を離れて善美なし而して吾人は其神の直接の影像にして此世界は間接の影像なりとす、何となれは世界は吾人の意識の反射せるものにして吾人の意識も世界の現象も共に神の光明より發したるものなれはなり。同一の神の光明より發して種々の現象を示すは恰も同一の大陽光線の屈折して種々の現象を爲すか如し神の光明吾人の意識に映し此の意識より屈折反射して万物を顯はすなり第五は最後の階段にある見解にして第四段に於て神と世界との關係を宗教上に說きし者を學理上より說明する者なり、即ち哲學上の解釋を與ふるものを云ふ、素より宗教は信仰に本つき哲學は思想に本つくものなれは同一の說にして宗教に說くと哲學に說くとは大に相異なる所あり然れとも其見解一致する所なかるへからす、是に於て宗教と哲學とを一致したる今一の說明起らさるを得ず。氏の論は始め宗教と哲學と同一に看做し後に宗教と形而上學と一致するとを說きしか、第五段に至りて

宗教は形而上學より尙高き處にありと云ふ說を唱へたり、然るに其說又一變して宗教の最上最純の見解によれは道德よりも哲學よりも宗教は尙ほ頂上に位し道德及ひ哲學の上に其光明を與へ之を一致せしむる根本なりと說きたり。抑も吾人と神との關係は吾人は神の心中にありて生存し神は吾人の心中にありて生存す、即ち吾人は意識上に於て直接に神と關係するものにして、此點に至れは神と吾人と一致するなり、啻に然るのみならす我と外界と一致するに至る、此根元に成立する者即ち宗教なり、換言せは宗教は神人相互の愛の上に成立する者にして其相互の愛に達すれは神人の區別鎔解して一味となる、故に宗教は哲學道德の上に位するものなりと是に至れは氏の說は秘密的宗教の性質を帶ふるものと云ふべし、而して此說は宗教上より云へは高尙なる考なるへけれとも哲學より云へは極端に奔りたる者にして遙に第一期の下にありと云はさるへからず。

フィヒテの宗教論の秘密的たる所以を尙ほ少しく陳述せんに、吾人は我心內に在て神と一致契合するを得、然れとも此神人一致の思想は下等の情念に蔽はるゝ間は其光を發せす、即ち自己は神の外に獨立するものなりと考ふる間は其思想我心中



に發せす何となれは、自己を利する欲念のある間は神の愛の心中に浮ふへき理なし、若し其利己心を離れ下等の欲念を排し去らは其中に神の思想顯出し神人一致の境に達すへし、而して此境に達するは吾人の力にあらす吾人は唯情念を除去するのみにて神の方より自然に我心中に離れ來るなりと、是れ氏の說神秘的凡神教と云ふ所以なり、又氏の說によるに吾人は神を顯して獨立するものにあらす、然るに吾人か神を離れて獨立するものと思ふは迷なり、吾人は神を知ると同時に迷の雲霧消散し神と一致するに至ると、由此觀之氏の說は外界を空するか如く思はるも氏は外界を空無なりと排棄するにあらす、氏か第一期に說きし絕對的我を其儘神の躰としたるものなれは、外界は我意識上に缺くへからさる材料なり。要之道德上宗教上共に自己一個獨立して存するものと偏信するは迷妄なり、故に先つ自己獨立の念を去らさるへからす、換言せは我の中に神我と人我とあり。神我は眞我にして人我は假我なり、此假我を去て眞我を開顯せさるへからす、是れ即ち宗教上の目的なり。

以上陳述せしフィヒテの說をスピノザ、ライプニッツの說に比較して批評せは氏の說

の最後に万有神教の性質を有するに至りしはスピノザの説に近し、然れともスピノザの神は寂然不動の躰を云ひ、フィヒテは活動勢力ある躰を云ふ、即ちスピノザの神は死物にしてフィヒテの神は活物なり、故にスピノザは厭世に傾けともフィヒテは然らす、且つ二氏共に神人相愛を説くもスピノザは沈靜的なりフィヒテは活動的なり例之スピノザの愛は月光の如くフィヒテの愛は日光の如し而してフィヒテは神の愛を活動的とすれとも神か外部より肉身上に愛を與ふるを説かす、是れ神は眞我を愛するものなれはなり、故にフィヒテの活動の點はラブィニッツに似たるも亦其間に差異あり、即ち神の愛を與ふるに付てライブニッツは外界の手段を取りフィヒテは内界の手段を取る、之を表示すれは左の如し、

スピノサ——沈靜的——内界
ライブニッツ——活動的——外界
フィヒテ——活動的——内界

次にカント、シラー、フヒテ三氏の説を比較せんに、シラー、フィヒテ二氏はカントの道理教より一歩を進め同氏か内界の義務の思想と感覺上の情念とを結合する能はさりしを一致せしめたり、然れとも二氏の間亦異同ありてフィヒテは宗教的道徳論にしてシラーは美學的道徳論なり、勿論フィヒテも始め道徳的宗教論を唱へしも後には宗教的道徳論を唱へ、シラーは美學的より得たる思想を以て説明し美靈に達せは雙方一致するとを説けり、然るにゴエテは神人本來一致するものなりと説きたり、フィヒテの万有は神の啓示としたるはゴエテに同しきも神人一致の點に於ては異なれり。

又フィヒテの耶蘇教會に就ての論あれとも茲に必要なければ略す。





### シュライエルマーヘル氏哲學

シュライエルマーヘル氏(Friedrich Daniea Ernst Scslo iermacher)は神學上一派の説を組織せし人にして其説は宗教哲學史上最も大關係あり。氏は耶蘇新教一派の僧侶の子にして、一千七百六十八年十一月廿一日獨逸ブレスローに生る。幼にして「モラビア」ン教社に入りて其養育を受けしか此養育こそ實に氏か一代の宗教思想の基礎となりたるなれ。後ハレー大學の神學部に入りて之を卒業して諸方の法教師となり、又ハレー大學の神學及ひ哲學の教授となり、伯林大學の起るに際し擧けられて神

學部の教師となり死に至る迄此職に從へり一千八百三十四年二月十二日歿す。

シュライエルマーヘルは始めカントの哲學を學ひ、後フィヒテ、シェリングの哲學に注意を置きて研究し、又ヤコビの書によりてスピーザの哲學を知り、又後にプラトー並に希臘諸派の哲學を知るに至れり。されは氏の哲學はスピノザ、ライブニッツ、カント、フィヒテ、シェリング等の種々の學説を結合し之に一家の意見を加へたる説なり。就中スピノザ凡神教の説を基礎とし、之にライブニッツの元子活動説並にカント、フィヒテの唯心論を調合したるか如し、然れとも其調合は外部の混合にあらすして之をよく和合同化せしめ自己一家の見識を以て新哲學を組織せるなり。

氏の哲學の大要を述へんに、氏の説は事物の本躰は不可知的なりと云ふ點に論を起し、カントか時間空間は心の形式にして物の性質にあらすと云ひしを氏は獨り吾心の形式のみならす物其者の本躰の形式なりとし、又カントか十二の原則(カテゴリー)は全く主觀的にして外界其者の實躰は不可知的なりと抛棄せしを氏は原則によりて物其者の性質をも知了するを得とせり。要するに氏はカントノ所謂時間空間及ひ十二の原則は主觀的虛形なるのみならす外物其者の形式なりとしたるものにしてカントは唯心一方を以て外物の論明を與へたれとも、其形式たる主觀的なるのみならす雙方一致して成るものなれは雙方の形式なりと。而して氏の考には物心の兩存は合して一となるものにして、此二者の一致は吾意識内に成立するのみならす一致其者か獨立の成立を有す、而して此世界の相合して一となれるもの即ち神なり、此神の一部分に能動所動の交互作用あり、此能動作用の上には自由の感情結合し所動作用の上には服從の感情結合す而して吾人は宇宙合一の躰即ち神に對すれは絶對的服從の感情を有す、此絶對的服從に本きて成立するものは宗教なり、而して其感情の道理を示すものは宗教學なり。故に宗教上の問題と他の諸學の問題とは自ら相異りて諸學術の問題は主觀上意識思想の上に客觀上の眞理を發見するとを力め、宗教の問題は主客兩觀の相合して一躰となる者に對して眞理を發見するにあり、此の如く神學と哲學とは既に其兩分を異にするものなれは各々自己の範圍内に在りてのみ自由を有し互に相干渉すへき者にあらすと。從來哲學に於て宗教を説明せんとする者二者を混同するか爲め却て破壞するに至りしが氏は宗教と哲學との本領を分ち各相犯すとなからしむ、而して氏は之によりて耶

蘇教を説明せんとを企てたり。

氏の宗教説は當時獨逸に行はれし荒唐學派の影響を蒙りて起りたる者の如し、元來氏自身も荒唐學派中の一人にして、氏か直覺一邊を以て宗教を哲學より區別せしは、一切の道理を排斥し直覺想像の一邊を取る荒唐學派の影響と云はさるへからす。又氏は近世初年エッカルトの唱へし神秘教の説を取り之を學理上に説明せり、獨逸に於ては神秘教の一たひ世に出てし以來久しく神は理外の者と一定せられしにライプニッツ、ウォルフ出て、道理上神を説明せんとしカントに至りては神を道德の範圍内に入れて論したり、且つ當時神秘教は世の攻擊を受け殆と泯滅せんとするに至れり、此の如く學界の形勢道理一方或は道德一方を以て神を説明し、想像直覺を全く捨てゝ顧みさりしかは氏は之に反して感情を離れて宗教の存せざる所以を説きたり。從來道理上宗教を説明するもの抽象的道理を以てし之を組成する宗教の皮肉なく唯道理の骨格あるのみなれとも、氏は之に反して眞正の宗教は直覺の皮肉を加へて始めて完全なるを得とせり、勿論直覺學派に於ては其主義の宗教を説くと雖も未た氏ノ如く學術的に立論せるもあらさりき。





氏か千七百九十九年の發行に係る宗教排斥論者に對へたる宗教論あり。此書によるに現今宗教を論する者多く道理若くは道德より説明するも若し一般の宗教眼より之を見れは是皆無宗教たるに過きす、通常説く所の宗教と雖も其中には一種磨滅すへからさる理の存するありと論し、宗教内部より宗教の本原となるへき者を取出せり、故に氏は宗教の辯護者なれとも又一般の宗教者と異なる所あり。氏は宗教を攻擊する者よりは一層深き處に入り宗教の因て以て起る本原を説き、且つ宗教は如何なる作用より起り如何なる道理を含めるかを論せり。氏は曰く世人の宗教を排斥するは宗教と哲學とを混するに由るなりと。又氏は入に對て曰く世人は何故に我心に宗教の至高至大無限不滅の者と交通するを知らさるか蓋し宗教心は此無限不滅の躰に頼りて存ずるなりと、由此觀之氏か宗教の本原此にありとする者は無限不滅と交通する直覺あるを示さんとするにあり。又當時獨逸には實利主義盛に行はれ利益の有無を以て諸事の得失を判斷したるか爲に宗教上の議論も從て淺薄に陷りしか、氏は之を排斥して曰く社會に利益を與ふる法律と混同して宗教を説くは誤なり、又法律道德の補助を籍りて宗教の行はるゝあらは其宗

教は眞正の宗教にあらず、之と同時に法律道德の宗教の輔助を藉りて行はるゝも誤なり、宗教は最も高き處より必然自發するものにして其占領する範圍は實に感情にあり、故に其信仰は我感情を支配し且つ其範圍を專有するものなり、是の感情より成立する宗教こそ眞正の宗教なれ故に宗教は純正哲學にもあらず又道德學にもあらず、此二者を混同したるものにもあらず、要するに宗教は智識に依るものにあらず、何となれは智識の尺度は信仰の尺度にあらされはなり、然れとも沈思熟考は宗教にも必要なり、併しなから此沈思熟考も亦理學に異なりて理學は一の有限より他の有限を知るにあれとも宗教は有限をしるにあらず又理學哲學は有限より次第に進て最上の原因に達するも宗教は然らすして宇宙全躰を直接に我心に感知するなり、されは宗教上の信仰者は道理を知りて後善行を修するにあらず、道理を解せさる婦人の如きも自然に善良の行爲をなす、是れ宗教の哲學に異なる點なり、又信仰は行爲舉動の上に存せす行爲に關するは道德なり宗教は我心の上に宇宙全躰の無限を感受するを以て道德上の作用とは自ら異なり、然れとも宗教は智識と舉動との上に關係して存す、宗教の本原は宇宙全躰其者より發する感情



なれは外界に對しては必然なり內界に對しては自由なり、此兩範圍に至りて宗教其者の啓示を顯はす、然らは哲學も道德も其根元は宗教なりと云ふへし、氏は宗教に依らすして推究し並に動作し得へしと思ふは傲慢に過きたるものと謂ふへしと云へり、故に宗教の思想を知らんとせは物心二者の相合する感情の上に考へさるへからす、若し吾人か外界に對して明了に其活動する所以を觀察するに物心相互の關係を生す其接合して一となる點に至れは宗教の感情此に存す、是れ宇宙全躰の觀念か一個躰と接合して一となる所又吾人の生活と物の活動の生する所、宗教其者は實に此點に起る。由此觀之氏の宗教說は感情を以て宗教の要素として其感情は宇宙全躰即ち物心二者の合して一となりたるものを感知領得する者なり、故に宗教の目的は宇宙全躰なり、而して之を知るは万有人間の生存上にあり、万有に於ては万有の一致する點即ち一定の規律及世界万有の變化中に不變化あるの點是れ所謂外界の啓示なり、此啓示によりて宇宙全躰の如何を感知するを得、又吾人の心によりて宇宙全躰を感知するを得るなり。道德上には人の個人性と理想とを比較して個人性を排拒すと雖も宗教は一個人と宇宙との一致契合の上に存す

るなり、是れ所謂宗教情操にして最上無限の生活上に成立す、其生活は吾人の感覺を以て知るを得す、只宗教情操によりてのみ達するを得、而して愛仁恵の諸德も皆其情中に存す、故に宗教は道德の僕婢にあらすして其監督者なり、又宗教は無限不滅の躰に關接して存する以上は私見小識の如きは之を排斥す、從て論理の演繹推論證明等は宗教其者にあらす、既に宗教は論理の關する所にあらすとせは從來種々なる問題の講究は如何にして起るかと云ふに此等は宗教其者にあらす吾人の反省思慮たるに過きす、即ち宗教を世間に弘通する手段として之を講するのみ宗教其者は論理上の講究を要するものにあらす、されは宗教問題を講究するよりは神告託宣天啓の如き者却て宗教を知るに益あり、又宗教上の講究問題は純正哲學或は倫理の如く爭ふへきものにあらす、又宗教上の書に記せる靈怪は宗教上の不思議として普通人の特に信するものなるも、若し宗教上の眼より見れは宗教上の出來事は一として靈怪ならさるはなし、啻に然るのみならす信仰の尤も深き人は一切の事物悉く靈怪なるを見る、然るに彼に見るも此に見さるとあるも其人の信仰に深淺あるか爲なり、故に宗教上の見二あり、即ち世界見と宗教見となり世界見





は俗見にして之より見れは靈怪を見るを得されとも若し宗教見より見れは一切の事々物々悉く不思議靈怪なり、又天啓は宇宙全躰と吾人と交通する道にして吾人は我内部に於て宇宙其者と相通するを得、而して前に所謂宗教上の感情は天啓に出る者にして天啓は意識外にある者なり、故に天啓は道理上の沙汰にあらすと、此の如き說を以て氏は託宣神告を說明し從來道理派の否定せし所を宗教上實に有り得へき者にせり、然れとも氏は妄に經典其者を奉信するを以て宗教とせす、只經典を崇拜するは人の死せし墳墓を拜するに異ならす須らく經典の内部に存する精神を感知領得すへしと云へり、又氏は宗教論の終に於て神並に不滅に就て論し此等のことは信仰の前に假定すへきものにあらすして信仰によりて得たる結果なりと、又神を有限性とし無限性とするに就て氏は人の神を想像知覺するに三段あるとを說けり、一は拜物教、二は多神教、三は一神教なり、其一神に就て有限無限の問題あれとも是れ宗教上第一の要點とするに足らす、何となれは有限無限共に宗教感情によりて顯るゝものなれはなり、通常有限無限は相隔離するものと思ふも是只想像の方法異なるのみ、宗教の想像と自甲の思想と結合すれは有限となり、

之に反して宗教想像と智力の道理と一致すれは無限性となる、故に共に宗教の感情より起るものにして孰を正とし孰を非とする能はす、是を論爭するは宗教上肝要のとにあらす。

氏の宗教說は近世初年の秘密的の風あり、又カント、フィヒテの唯心論に近き所あり、其唯心の風あるは宗教は外部より注入する者にあらす、人の高尙なる心の上に人と宇宙全躰との關係上より成立す、即ち吾人は深く心內に考ふれは吾人は絕對的に宇宙全躰に依賴して成立するものなり、從來の學問は宗教を理外と看做し吾人の心に宗教其者と通するを得ずとする者多かりしか是蓋し外部に宗教を說くを以てなり、若し宗教は內部にありて其根據は我心內に在りとせは心內に宗教を知り神と通するを得へし、即ち吾人は自知反省によりて宗教を顯はすを得、此自知反省によりて宗教心を湧出し之を言語に顯はして他人に傳ふるときは世間の宗教を生するなりと。此說たる既に多少神秘教の說く所なれとも氏の說は却て唯心論に近し、是神秘教は理外として道理の外に捨てたるものを氏は之を拾ひて學術學に說明したるを以てなりレッシング以後多く哲學を基礎として宗教を講したりしかシュライエルマーヘルは宗教を獨立せる者とし、學術と其基礎を異にするとを說き而かも之を學術的に講究せり、是れ氏の長所と云ふへし、

然れとも氏の說は論理上の缺點なしと云ふへからす又不明瞭の點も尠少ならす、今其缺點を擧くれは氏は初に知見と感情との二を基本として宗教を說明し、次には感情一方を以て說明せり若し感情一邊を以て說明せは是既に僻論たるは論を俟たす、又知見と感情との說に由るも氏は此二者の關係を明示せす、元來知見は世界上の觀察にして感情とは別作用の者なり、勿論氏の所謂知見は宗教的知見なれとも、知見は一般に有限の者にして吾人の有限性感覺上に感見すへき者なり、然るに宇宙は有限以上の者なり然らは有限以內の知見にして有限以上の者を知り得へき理なし、故に若し此知見と感情とを以て說かは知見と感情とは如何にして一致するを得るか未た明ならす、氏は感情は宇宙全躰を感するものと云ふも知見の說明なし是れ氏の荒唐學派に影響を受けたりと云ふ所以なり、又感情一邊に於て說くも許すへからす、宗教は感情の上に成立すと云ふも感情のみにて宗教の成立するにあらす、又總ての感情悉く宗教なるにあらす、凡そ感情は人心の一作用なれ

は感情一方を說かは是れ僻論なり、氏は宗教は智と意即ち形而上學と道德學とに離れて成立すと云ひたれとも、宗教は單に感情のみならす多少智力意志にも關係する者なり、若し情のみにて成立すとせは情は受動的作用なれは感情一邊より成立する宗教も從て受動宗教と云はさるへからす、若し宗教は受動的にして道德は行爲舉動に關するものとせは宗教と道德とは全く別なりと云はさるへからす、然れとも實際には宗教道德相關係し宗教は行爲にも關係する者なり、フィヒテ嘗て曰へらく健全なる信仰は沈靜的にあらす活動的なりと、若し情一方の宗教なれは宗教は沈靜に陷らざるへからす、眞正の宗教は決して然らさる者なり、然れとも氏か宗教は感情に屬すと云ふもの多少道理なきにあらず、情は外部に向て活動せす只外部の刺戟に應して之を受込むのみ、宗教は絕對的なる宇宙を感する者なれは吾人は之を感受するのみ、故に宗教は主觀的なり、然れとも宗教は單に感受するのみにあらずして又客觀上の作用を爲す、故に眞正の宗教は主客兩觀上に成立する者なり、然るに氏は眞不眞の理は宗教に適用すべきにあらす宗教は總て眞なり、只吾人の推理思想の上に涉るとき眞不眞を生すと論したれとも此論亦情一方の僻論



なり、若し情一方にして眞の宗教とするか、又情感上の者は總て確實とするか、然らは野蠻人に於ける恐怖的の感情のみを以て成立せる宗教も亦眞正なりと許さゝるへからず、天下豈に此の如き非理を容れんや、宗教の眞不眞は必ず道理上並に客觀上の事實に照さゝるべからず、又之を局外より觀察すれば宗教の智力思想を藉らさるへからさるは明瞭なり、若し假りに宗教上感情は眞にして智力は不眞なりとせんか、然らは情感上謬妄の想像生するとき何を以て其誤謬を指摘するを得るか、又孰を眞實とし孰を不確實とするか、思ふに之を判斷する者は道理を措て他に求むへからす、凡そ世上に在る夥多の宗教は皆自己の宗旨を以て最上と信する者なり、若し情感より發するものは悉く眞なりとせは何れの宗教も皆眞とせさるへからす、然れとも眞理は唯一あるのみとして考ふるときは感情上の者を以て盡く確實と斷定するを得す、氏は又曰く總の宗教的感情眞なるのみならす總の眞の感情は皆宗教的なりと、若し此言を推し極論せは氏か宗教は一宗獨立の範圍を有すと云ひしとも亦成立すると能はすして宗教は實に漠然たる者となるへし、何となれは感情は廣くして單に一部分の宗教にのみ關する者にあらす、且つ感情は始終

變化ある者なれは一定不變とするを得す又感情は智力意志と關係するものなれは其中に宗教は一定の範圍を定むるを得されはなり。此の如く氏の說は感情一方の僻論たるを免れす、是れ氏の論の世間より攻擊を受くるの點なり。然るに之を辯護するものは是れ氏の宗教論一部に限るものにして後に氏は感情は智識と結合する者と論したりと云へり。此說を見るに智力と意志とは本と其性質を異にして互に相抗爭するものなり、而して之を結合するものは智力にあらす又意志にあらすして感情なり、元來智と意との媒介となりて之を結合するものに二あり、一は主觀上吾人の心內に存する感情にして一は客觀上宇宙の上に於ける神なり而して此客觀上の結合即ち神は吾人の智力の上にも又意志上にも存せすして吾人心內の感情上に通するものなり、故に智意を結合するものは情にして其情は吾心內に通する神の現れなりと、而して氏は終に斷案を下して曰く感情は吾人內部の神なり吾人は神を求むるに外にありては宇宙全躰にして內にありては感情なり、故に宗教は感情なりと此說はカント哲學に於て感情を智と意との結合として說きたる影響なり、然れとも此說は誤れりと云はさるへからす、何となれは智情意は心の





區別にして同等同權の者なり、且つ智情意は共に現象にして本躰にあらす、然るに氏はフィヒテの我の如く情を以て本躰の如く看做し、智も意も神と關係せす只情のみ神靈なりとせり。是れ此說の偏見たる所以なり、又氏は感情中に神の含まるゝとを云へとも、感情は斯く高等純良の者のみに非す、下等の者もあり是亦氏の僻論なり、然れとも此點は氏か或る著書中に其僻說に陷らんとを恐れ宗教感情は絕對的依憑の情なり、之に對して普通の感情は相對的依憑の情なり、而して絕對的依憑は宇宙の一部分たる我にして宇宙全躰に依憑する情なり、即ち吾人の心に有する絕對的依憑に依て此世界の有限の範圍を超へて神其者の躰を感知するを得、是れ吾人の意識の上に位する最上高等の自知なり、換言すれは吾人の意識中に世界万有の有限を感する意識と世界万有の全躰即ち神を感する意識との二あり、此世界の意識と神の意識とか或場合には結合するを得、此結合の難易に應して宗教的生活の苦樂(成佛不成佛)の分ると云ふとを論せり。此解釋は宗教は感情の上に成立すと云ふ考より起るものにして情は受動的依憑性の者なり、然るに此點より見れは宗教は依憑性に限らす、其中に多小活動の意を含む、又我方にして依憑性のものなる

とを知るを得は身既に活動の意なりと云はさるへからす、今宗教は絶對的依憑と云か其中には自由の意味を含むものと云ふへし、換言すれは相對性依憑の範圍を脱して絶對性の範圍に入りて自由を得るものなり、然らは是決して感情にあらす、然るに氏の之を感情のみとしたるは僻論なり

以上の所論を概括するに、氏の說は感情に偏する弊あれとも、又一方より見れは一種の卓見とすへきものあり、第一從來の宗教は經典儀式の上に成立せしか、氏は之に對して宗教は吾人の生命なりとし吾人の心内にある感情其者か宗教にして此感情は智力意志の中心なりと說きしは卓見なり、第二宗教を學術的に說くものは宗教を思想推理の上より論せしも氏は宗教は推理思想の外にありて一層高尙の者なるとを示し宗教を一種獨立の基礎の上に成立すとせしは是亦卓見なり、然れとも其弊たる情一方に偏せしにあり、恰もカントの道理一方を取りて之を充たす材料を捨てるか如く、氏は主觀的の情一方を取りて客觀上の道理を忘れたり、此點より見れは兩氏の論各異なれとも共に抽象的虛形の唯心論に陷りたりと云ふへし、故に若しカントに感覺上の材料を與へシュライエルマーヘルに客觀上の材料を





與へは二者共に完全なるべし、又シュライエルマーヘルはスピノザに據りたる所少なからす、氏の所謂宇宙に無限絶對の躰にしてスピノザの本質と同し考なり、若し其本質に自由の性質を加へて考ふるときは即ちシュライエルマーヘルの神なり、又氏は神に一種格段の人間性ありとするは宇宙に自由の思想を加ふるとき此考を生するものにして神は自由に世界を作り自由に之を支配するものとして想するときに人間性の神となるなり故に宇宙も神も同一なり、既に宇宙は神の躰なれは神と世界とは相離れたるものにあらす、唯吾人の思想上神として考ふると世界として考ふるとの相異あるのみ、之を單一の點より見れは神となり衆多の點より見れは世界となる故に神も世界も宇宙の上に名けたる者にして神の外に世界なく世界の外に神なし、又神は此世界を開發せし力よりは餘分の力を以て此世界の規律に反對し得へきものにあらす、故に今日世界の規律は神の自由に變更するを得さるものなりと此點はスピノザに一致する所なり、然れともスピノザは万有の本質を神として、万有神教を唱へしか氏は宇宙全躰の上にて一部分々々々の結合して一躰となる點に於て神とせり、此點はスピノザより寧ろシェリングに近しと云

ふへしシェリングの說は主客兩觀の分るゝ以前に二者の一なりし點あり、此點より分れて一は主觀上に心となり一は客觀上に物となり而して此物心と反對の性を有すれとも其根本は絕對の一なりとす、即ち物心万境の一致して宇宙全躰に單一の有樣をなせるもの神なりとするは此說と一致する所なり、元來吾人は物心相對の上に活動する者にして相對を超えて活動するを得す、即ち絕對の境界は吾人智識の關する所にあらす、然れとも智識は絕對より生するあり、又神は單一にして世界は雜多なり、而して單一の躰を充たす者に雜多の世界あり、換言すれは吾人の神なる考は總の智識の虛形にして世界は之れを充塞する材料なり、故に神は智識の如何なる有樣なるに拘はらす其の虛形を充實するは世界の思想なり、されは神は最上抽象的の虛形にして吾人智識の關せさる所、物心万境の一致は吾人智識外即ち超理的に存する者なり、即ち積極的にあらすして消極的の位置にあり、是れシュライエルマーヘルの神は智力上に考ふるを得す情感上に存すと云ふ所以なり、氏か宗教は感情にありとの考は終始其說を支配し智力意力と結合するを得さりしも亦此點に出てたるものなり、然れとも吾人の智識思想は氏の云ふ如き狹隘者のにあらすして不可知的と雖も多少知るを得るなり、且つ氏か物心万境一致の點にありと云ひしも是れ氏か智力の作用に由るにあらすして何ぞや是れ氏の說に撞着ある所なり。





## シェリング氏哲學

カント氏以後獨逸哲學の潮勢は唯心論の一方に流れ世界萬有を以て意識上の現象なりと云ふ說明を與へたり、始めカントは現象を以て物心二者の上に成立つものとし、物心二者の本躰は隔歷して一致せさるものとせり、是れカント哲學の缺點なり、若し物心二元論によりて二者の調和をなさんとせは其幾分心に屬し其幾分物に屬するや明ならす、是に於て其調和を說明せんとするもの或は主觀的より或は客觀的より試みしがフィヒテに至り絕對的主我論を提出し物心万境は我の所造なりとせり。シェリングは之に反對し物心二者は本來隔歷したるものにあらす二者共に同一の躰より現はれたるものにして內部外部共に相關係するものなり、されは心性は之を不可見万有と云ふへく万有は可見心性と云ふへし、即ち同一本躰上より二者を開發せるものなれは本躰に至れは一なりと、是れ氏か立る所の哲學

の原理にして之を説明するか氏の哲學組織なり。今其宗教論に入る前先たち其學説一班を叙述すべし。

シェリング氏(Friedrich Wilhelm Joseph Schelling)は千七百二十五年一月廿七月ウルテンボルグ州レヲンボルグに生る。弱年の頃より神童と稱せられ、十六歳にしてチュービンゲン大學に入りカント哲學を攻究しヘーゲルと友誼上の關係を有せり、在學中氏は一の論文を草し千七百九十二年之を世に公にし。其翌年亦一論文を發行して知名の士となる。大學卒業後一時ライプツヒに移り貴族の師傅となり、後エナに行きフィヒテに從ひ兼ねて其助手となり、フィヒテエナを去るの後代りて其職を繼げり。此時に至るまでは氏は全くフィヒテの説を取りしが、爾來其説を一變し自家の獨見を以て哲學の基礎を築き一雜誌を發行せり、千八百〇七年ミューニヒに移りヤコビの死後其學校長となり、千八百四十年伯林に轉し千八百五十四年八月二十日逝去す。

シェリング氏が一生の著書を集めたる哲學全書は千八百六十一年發行せり、其中十卷は前時の著述にて四卷は後時の著述なり。氏か一代の哲學論は完結せる一組





織をなすにあらず、氏は其一代に五たび其説を變せり、然れとも其間歴史的順序を追うて其説を發達せり。今其説の基つく所を考ふるに氏はプラトー新プラトーアルノーボイメスピノザライプニッツカントフィヒテ等の説を結合したる者の如し。

氏か著書中尤も著名なるものを擧くれは万有哲學、世界精靈論、超理哲學、哲學及び宗教論、鬼神哲學、天啓哲學等なり。今其説を陳ふるに就てはシュウェグラー氏哲學史の分類に從ひ之を五段に分ちて講すべし。

(第一期) シェリング氏のフィヒテを繼述したるは本と師弟の關係より出てたるものにして最初には「我」と云ふとに就て論したる一文あり。曰く吾人知識最後の基礎は我ありて起るものなるか故に哲學中の最も眞正なるものは唯心論を以て成立せさるへからす、而して若し吾人の知識にして眞實を有せは思想と實在とは同一ならさるへからすとフィヒテは此論文を稱して自身の主我的哲學の補注に過きさるものなりと云へり、然れとも此中はフィヒテと原理を異にする所を胚胎し、又物心一致の點あるとをも指示せり。

氏は又一論文を草しカント學派が遂に其唯心論を去りて獨斷的に傾きたるを排

擊せり、爾後氏は專ら万有の哲理を講究するとを力め遂に絶對より万有の開發するとを考へ万有哲學及世界的精靈論を出したり、是に於て乎氏はフィヒテに反對せる一種獨立の起點を取れりフィヒテは物心を結合するに物心二元中心を以て調和を說きしがシェリングは非物非心なる絶對を以て結合せんとせり、其所謂絶對なる者は獨立して物心の媒介をなすに非す物心の互に一致する點に名るなり、之を物より研究すれは心に入り、心より研究すれは物に入る、其最終は必す一致する點なかるへからす、是れ氏か万有を可見心性とし心を不可見万有とせし所以なり、抑も物には引力と拒力との二ありて此二力の結合より成ると同じく心にも有限力と無限力との二ありて心を組織するものなり、而して引力は物を團結せんとし拒力は之を離散せんとし二者の作用によりて以て此世界を成立す、之と同しく又心に於ても無限力は我と他との相對を超越して無限絶對の體に同歸するの傾あり、又或る場合に於ては外界と我との制限を立つ、是れ有限力の然らしむる所なり、此の如く物心の作用は互に相對すと雖も此二作用の何れにか一致するものなるは恰も磁石の兩端の一端より一端に至るには必す其中心を通過せさるを得さるが如く物心二者の間には必す一致する點あり、此點を稱して均同點(アイデンチチー)と曰ふ、是れ氏か一代哲學の骨髓にして氏か第一期に於てフィヒテを繼述する中に自ら現れたり、而して此均同點より物心万境の開發して有機組織をなすは恰も草木の漸々發達して一大有機組織をなすが如く天地間の一大理は確乎不易なり、且つ此一致の體は抽象的ならす具體的にして其上に宇宙万有の組織をなすなり、されは此一致點は物心何れよりするも體達するを得へしと。

シェリング氏は精靈論に於て世界は自動的の活躰なりと言ひしが此點はフィヒテ氏の說に於ては許すへからさる所なりフィヒテは我より非我を造出すと云ふを以て心は自ら開發するを得るも物は然らす、然るにシェリングは物心二者共に活動的のものなりしと反對の地位に立てり、是れ氏か万有哲學超理哲學の二部を組織するに至りし所以なり、されは第一期の哲學も既に獨立の基礎を含有せりと云も敢て不可なるとなし。

(第二期) 第二期の哲學は万有哲學と超理哲學との二部より成る、此二學はシェリング氏哲學の骨髓なり、而して此万有哲學と超理哲學との區別は氏の說に依るに凡

の智識學問は物心の一致する點より起るものにして、此物心一致點より客觀性一方を取れは万有となり主觀性一方を取れは心となる、是に於て二の學問を生し一は万有を基礎にして如何にして心か万有に一致するか又一は心を基點として万有は如何にして心に一致するかを研究す、即ち前者は万有哲學にして後者は超理哲學なり、故に超理哲學より云へは心性主となりて万有に及ほすを以て思想實在の二者中實在をして思想に附屬せしめ、万有哲學より云へは思想をして實在に附屬せしむ、されは万有心性何れよりするも其所謂一致均同點に達するものにして此躰に絶對的均一の名を與ふるなり。

シェリング氏の万有哲學は普通の万有哲學の如く万有を死物的器械性の者として論するにあらす、之に自由自發自動の勢力を與へ活物的の者と看做したるなり、されは氏の万有哲學に於ては万有の活物たるを説明するにあり、今其説を見るに前に万有は可見心性なりと云ひたる如く万有は活動を有せる有機躰にして其内部に含める勢力の開發するものなり、且つ其開發や一定の規則計畫によるものなり、抑も此世界は物心の二者より成立し二者の上に互に關係するものなり而して其





關係を探究するに物よりするも心よりするも絶對に達し、心の内部に含む力は物質に作用を及ほし物質の規則は心の上に認識するを得、是に於て物心の二者は互に關係し一致するを知る、之を説明するか万有哲學なり、曰く吾人は直接の經驗より他に万有を探究する起點を有せす、此直接の經驗によりて外界を探究するときは世界は一大活動躰にして其内部には吾人の心の如き勢力ありて其勢力一定の順序規律を逐て發達するなり、即ち万有の根本は先天性のものにして絶對唯一の點より起るを知ると。又氏は万有哲學の原理を論して万有には成形力と成形物とありて其交互作用より開發す、換言すれは此世界の開發は生産力と生産物との間の作用にして此二の關係によりて内部にある無限の力を外部に發現し以て無量の形狀を呈す然らば万有は二元並存の上に成立するものと云ふべしと論じ二元を以て万有の原理とせり、又氏は始に物界心界を分ち次に其兩界にも亦二元ありとし、此二元は何の處にも普遍にして且つ一致する點ありとす、其點に即ち絶對の躰なり、而して此絶對の躰より開發して万有成立す、故に万有は絶對一致の力を外部に發現したるものなり、換言すれは万有は絶對性唯一性の作用を開現する機關

にして其機關たる唯一絶對の力の中に前より豫定せらるゝものなり、然るに絶對の躰は無限の力を有すれとも此力の一旦開發するときは有限となる、是れ蓋し万有の上には一時に無限を造出するを得すして止むを得す有限の狀態を以て顯出するなり、然れとも其間には無限性を示すものなり、例せは茲に無限の水あり之を流出せしめんとするには唯一二の孔口よりせさるへからす、然らは其内部は無限なるも流出するは有限なり、然れとも無限の時間連續するときは無限性を開示するを得るなり。

シェリング氏は氏万哲學を三段に分ち第一段には有機躰に就て論し第二段には無機躰に就て論じ第三段には有機無機の關係に就て論す第一段有機躰に就ての論によるに万有は絶對的に無限の生産力を有するか故に此力の開發するときは無限無量の物を産出す、然るに今有機躰を見るに有限なるか如き觀あるは蓋し万有其者の固有せる規則として生産開發するに當り一方に産出するあれは他方に之か反動を生し爲に無限性も無限性として開發するを得す必す反對性を生して有限となるなり、万有若し開發するとなくは反對の制限なくして一元に止まるへき





も苟も開發するとある以上は必す二元たらさるへからす、然れとも其有限無限に連續して無限の時間を經て開發す故に万有の本性は無限にして其生産力も無限なり、然れとも生産物より云へは有限なり、何となれは生産物は万有の本躰にあらすして現象なれはなりされは尚ほ無限の連續を以て無限の生産力を滿足せしめんとす、換言すれは万有は無限の生産力を有すれとも空間的には無限の生産物を現する能はすして時間的に無限の生産力を現するなり。斯くして万有の發現に二個の相反せる性質を生す、即ち生産性と制限性となり、換言すれは正動と反動となり一方に無限の生産をなさんとすれは一方に之を制限する性を生す、而して此二性同時に相現して互に相爭ふ。故に生産性無制限なれは制限性亦無限なり。要するに二性無限に相抗爭する者にして是即ち万有自然の性質なり、故に吾人か天地間に目擊する所の現象は悉く二元互に制限するにあらずや、此理に由りて考ふれは有機躰は無限の生産力を内部に包有するにも拘らす無限の生産力を現はさすして一個々々の有限物を産出するは當然のことと云ふべし、而して之を繼續する爲に、有機界に男女兩性の別ありて其性互に制限せられ各一個格段の成立をなす、され

は之より生するものも一個格段ならさるへからす、斯の如くにして以て相繼續するなり、もとより一個々々の開發は万有其者の性質にあらされとも制限上實に止むを得さるとたり、されは一個格段なる子々孫々の生産は万有の本性か無限に開發する階級に過きず、故に之を實際に徵するも親は子を生する爲に生せしものなれは子を生し終には自然は其親を亡ぼす方に傾くなりと。

氏は有機性の作用を分ちて三とす、成形力與舊力感知力是なり、成形力は植物之を有し、與舊力は動物之を有し、感知力は人間之を有す、此の如く三作用ありて以て有機躰を現はすなり、其中感知力最も多く發達して他の二力を支配するものは有機躰中の最高等にして入類なるもの即ち是なり、次に與舊力最も發達し他の二力の之に支配せらるゝものは動物なり、而して成形力中心の作用となり他の二力を殆と有せさるものは植物なり。

第二段無機躰に就ての論を見るに無機躰は有機躰に反對なれとも無機躰も亦有機躰と同一の階級を有す、有機躰は己より產出する力あるも無機躰は之を有せす有機躰は自己一個の躰を有し自己の種屬を繼續する力あるも無機躰は自己一個





の躰あるのみにして自己の種屬を繼續する力なし、要するに無機物は物質の集合にして其結合は外部の結合なり、即ち重力の原因によりて一の塊躰を形成するのみ、而して無機躰も有機躰の如く三段に分る、即ち第一化學的作用、第二電氣作用、第三磁氣作用是なり。

第三段有機無機の關係に就ては此二者の區別は万有を活動躰と看做さゝるより起るものにして、若し万有を活動躰と看做ときは二者併立せすして一致するものなり即ち此一機無機の二元を超えて其根元に遡れは二元相一致するものあり、故に無機の現出するにも一層高等の力ありて之より開發するものにして有機無機共に其力の開發なり然らは此有機無機の外に第三の者ありて二者を連絡せしめさる可らす其究竟の原因に至りて考ふれは世界万有には共有の精神あり其精神は有無二機共に之を有し無機にありては變化を生し有機にありては諸活動諸生產の原因となる、由是觀之此世界は一種の活動組織を有するものと云ふべし、此の如き區別ありて有機無機各互に制限する力を生し二元並行對立して止むときなし然れとも其大本は二元一致するものなり。(此點は支那の大極より陰陽の兩儀を

生し此兩儀何の處にも存すとする說に甚た近似せるを見る)以上はシエリング氏万有哲學の大略なり。

シエリング氏第二期の哲學は二部に分れ其一は万有即ち客觀の邊より絕對を說き一は超理即ち主觀より之を證明す、前者は即ち萬有哲學にして既に講述せり、後者は之より述へんとする所の超理哲學なり。凡そ哲學には許多の種類あれとも皆一物の連絡して順次に發達するものなり。故に哲學は意識の發達したる歷史と看做すも可なり、換言すれは哲學は內部知識の力の外部に發表して組織せられたるものなり、而して之を萬有の上に說くと超理の上に論するの二方あり、若し萬有と超理とを特別に論するときは物心二者の互に連結一致するとを示すは甚た困難なれとも此二者を照合し各他の缺點を補へは二者の一致所謂絕對の存在を知ると敢て難きにあらず。

氏は超理哲學を三段に分ちて說明せり、第一は理論的哲學第二は實際的哲學、第三は技術的哲學なり、第一理論的哲學は外界を本として心に對して活動する所以を論し、第二實際的哲學は心を本として外界に對して活動する所以を說明するなり、





而して第三技術的哲學は第一第二の外界內界の反對するものを結合する所以を說明するなり、此分類は蓋しカントの純理實理斷定の三段に分類せし所に本つくものなり、今第一の理論的と第二の實際的とを比するに物心相隔歷して二者の間に一致の點あるを發見すると難し之を一致するは更に高尙の點より說明を與へさるへからす、是即ち第三の技術的の司とる所なり、此物心二者の一致するとは既に述べたる如し二者の共に保有せる勢力ありて此勢力我心內に發しては意識作用となり、外界に發しては無意識作用となる、此の如く二者相異なれとも二者共に勢力を有するは其一致する所なり、之を說明するは第三の技術的なり。

第一理論的哲學は自知自覺を本として自知自覺より感覺直覺虛想絕對的虛想と發達するとを說く、即ち外界の啓示に於て感覺し直覺し之を抽象し概括して遂に絕對的虛想に達す既に絕對的虛想に達すれは絕對的意志を生す、既に絕對的意志となれは茲に實際的哲學を生するなり。

第二實際的哲學は之を第一の理論的に比するに第一には外界か能動の位置にあるも第二には內界か能動となりて外界か所動の位置に立つ、且つ此第二に於ては

我其者有意識となり、能動作用となり生產的となり以て外界に其活動を及ぼす、此點は氏かフィヒテより得來りたる所なり、然れども其結局に至りてはフィヒテの說に異なりて更に一層高遠なる處に其原因あるを發見せり、フィヒテは道德上主として世界の秩序規律を說きたれとも尙其上に此等の根原たるへきものあるを知らす道德は主觀以上作用の結果にして此作用に反せば一切の秩序は成立するを得す、故に道德の根原は主客兩觀を結合せる高等の者即ち絕對なり、フィヒテは之を我と稱せしもシエリングは我は未た相對の位置にあるを免れすと云ひ我の範圍を離れたる絕對を立てたり。氏の說に曰く道理的動物即ち人なるものは心內の一致作用を無限に向て開發するものにして其發達の順序を示す者を歷史と云ふ、而して其開發に三段の時期あり、第一は自由なく意識なく眞の盲運盲目時代として開發す是れ野蠻時代の有樣なり、第二は此盲目より發達して規律を生す此時代には國家の結合あり、第三は全く神の世界となりて現出す、今日は未た此時代に達せざれども將來必す到るべき時ありと、此の如く三段に分ちて歷史を陳べたり、





茲に謂ふ歷史とは世間の所謂歷史とは全く相異なるものにして絕對性其者が發達する順序に就て之を分ち今日は尙ほ物心並行するも後には必す一致する一點あるを云ふ。

第三技術的哲學は主客一致物心契合を目的とす、實際的に於ては無限の時間に向て物心の一致を求むれとも其一致の現るゝとなきのみならす却て物心相離るゝの傾向あり、然らは此一致は何れの處にか發見せさるへからす、是即ち第三の目的とする所なり、凡そ物心とは其外部に於ては並立するも內部に於ては一致するものなり、即ち物は無意識にして器械的盲目の作用なり心は有意識にして計畫ある作用なり、然れとも其內心には一致する所あり、然らば其一致は吾人の之を知るを得る方法ありやと云ふに之を知るは技術なり、技術の直覺は內外一致を感するものなり、之を要するに万有より生するものは無意識にして技術は有意識なり、有意識無意識の相反は歷史上之を一致せしむると難く歷史上には益々相反對して進むものなり、然れとも萬有は無意識的に一致し技術は有意識に之を一致す、されは物心の相反は其內部に於て一致するも外部に於ては隱蔽して現はれざるなり、然るに技術は之を開發して一種調和せしむるものなれは技術は物心二元の絕對と

云ふも又絶對性の啓示と云ふも可なるべし哲學より高等に位すとも云ふを得へし、是に於て知識の虚形か外面の躰質を得て物心一致の有樣を示す、換言すれは技術は絶對及ひ知識をして其實を充塞せしめ萬有をして有意識たらしむるものなり、以上は超理哲學の大要なり。

上來陳述せし所を考ふるにシエリングは初にフィヒテの説を奉せしも後には全く其見解を異にせり、フィヒテは絶對的我を物心の根原とせしもシエリングは我は相對の上にあるものとし更に其上に一致の點を發見し、又フィヒテは絶對的我中に我非我を生すとするか故に勿論二元一致なれともシエリングは技術に於て一致するとを説き、又フィヒテは神は道德上の規律に存すとせしもシエリングは技術的直覺の上にありとせり(絶對を神とし之を技術上に感するか故なり)、要するに兩氏の異なる點はフィヒテは主觀的理想論にしてシエリングは之に對すれは客觀的理想論なり、然れとも其實は絶對的理想論なり。シエリングか物心の二者其外面には相反せるも内部に於て一致すと云ふは嘗てスピノザの説ける所に近し是に於てシエリングはフィヒテの範圍を脱してスピノザに近くに至れり而して



氏かスピノザに本つきて物心一躰を説くに至りしは第三期の哲學なり。

(第三期) 此時期にはフィヒテと全く分離しスピノザに依りたるものにして千八百〇三年頃の著書は此主議を示すものなり、此時期の始にはシエリング氏自家の哲學組織を述へ道理其者の定義を下せり、道理とは絶對的道理にして絶對的には主客無關係の道理なり、凡そ何人と雖も道理を有せさるものなし、此一般の人類が思考する道理を抽象して深奥なる點に到れは始め心に屬せしものも主觀性を失ふに至る、然れとも轉して客觀性となるにあらす、主觀を失へは同時に客觀をも失ひ以て超絶の上に達するなり、此點を名けて絶對と云ふ、是所謂道理の起點なるものなり、而して凡の哲學は此の道理を起點とし之より進むものなり、されは道理以外に一理一物なく一切の事物は皆絶對的道理の中にありと云ふべし、然るに或は之に反對を唱へるものあり、此の如き人は平常自己以外に事物の存するを見て絶對道理中に一切の事物の存するを知らす、是れ謬見の甚しきものと云はさるを得す。此道理は論理の均同法即ち甲は甲なりと云ふを以て其規律とす、何となれは一切皆道理なりとすれは甲も道理乙も道理何れを取るも道理にして道理は

即絶對的道理なれはなり、此絶對的道理より物心の二者派生するなり既に物心二者は共に一均同中より、派生せしものなれは何そ二者の間に性理上の相異ある理あらんや一物は何の時、何の處に至るも一物なり然らは何故に一均同中より物心の二を生せしか、曰く是亦性質上の相異にあらす分量上の相異のみ、されは物心の關係或るときは客觀の主となりて活動することあり、或るときは主觀の主となりて作用することあり、然れとも此差別は絶對其者にあらす畢竟絶對の外表たるに過きす、即ち有限上に存するものにして絶對上には分量の差たもあることなし、元來有限には實躰なく眞の實躰唯、均同の躰あるのみ、故に有限上には輕重の別あるも之を合すれは其相和は常に同一なり絶對的均一は絶對的同一なり、換言すれは物心相和の宇宙の躰は絶對的均一の躰なり、されは絶對上には個々の別躰なきは明にして其合一の外に物ありと思ふは其實あるにあらすして一個の妄見なり、是れ蓋し全躰と個躰とを別に觀るか故なり、例へは絶對的均一は一直線なり其兩端に輕重の別を生するは物心の關係なり、然れとも其相和は常に絶對の躰なり、以上はシエリング氏絶對論にして此説はスピノザの説に似たる所あり。





シエリング氏は又物に三段の階級を立て第一重力第二光線第三有機機關とせり、第一は外部に關係し第二は內部に關係し第三は第一第二を結合したるものなり、凡てカント以後の哲學者は三斷論法の性質によりて論究せしかシエリングに至りて其考益々進みたり、氏は復た物の中に有機性と無機性とあることを云へり氏の説によるに物は其實凡て有機性にして眞の無機性あるとなし無機性は有機性の卵にして之を開發するときは有機を生す、地球の如きも始は無機性なりしも漸々開發して草木となり動物となり、人類となる故に其表面は有機無機の區別あるも其內部には先天的に有機性の存するものなり、而して前に示せる物質三段の階級は開發の度の高低に從ひて次第したるものにして有機は其最も階級の進めるものなり、されは外部より之を見るに世界の始は總て無機性にして之より發達して有機性を開發す而して其殘餘は即ち無機性なり、故に凡の物質は其內部には有機無機の別なく均一平等に活動勢力を具するものなり但し其外部には無機は死物の如きも是れ唯眠息するのみ、或時期に達すれは一切有機性となりて內部の精神世界を外部に現することあるべし。

氏は又心に於ても三段を分ち第一知識第二動作第三道理とせり、知識は眞を目的とし、動作は善を目的とし、道理は美を目的とす、而して又之を形と質とに分ち知識は形中に質を同化すると、動作は質中に形を同化すると、道理は形質二者を混和一致するとなり、形中に質を化するは理論にして質中に形を化するは實行なり而して形質相和して一致するは美術なり、茲に道理を美術に結合したる所以は物心一致の點即ち絶對は道理によりて達すべきものにして此絶對を直接に開示するものは美術なりと云ふ考なれはなり。又氏は吾心に於て絶對一致の點を知り得る手段を考へ來りて之を知るには分解法總合法若くは數理論理によりて爲し難しとし遂に直覺を以て之を知るの起點とせり直覺は思想若くは實在の一方を感するにあらず、雙方平均して其一致を感す、故に吾人は絶對を直覺せは實在も思想も一致すへし、然れとも此直覺は普通の直覺に異になりて普通には吾人の見んと欲する時に其前に物の現在するを感する即此直覺は思想と外界の感覺との結合するものに過きす、今の所謂直覺は道理的直覺にして物の實在と心の思想と相合して絶對一致の點を感するなり、換言すれは絶對の知識と云ふか如し、此の如くシエリング





氏は論して其極一切の事物は絶對の中にありと云ふに至る、是に於てスピノザの論に一致す、又シエリング氏は此道理を解釋して宗教上の神とせしが、こは宗教論の部分に於て講すべし。

(第四期) 第三期に於て絶對は物心にあらさるとを説明せしが其論結局に至り心の方に傾き絶對を解するに觀念を以て其基礎とし絶對を定むるは觀念にありとす、即ち觀念を以て第一原理とし第二には觀念性の否定によりて實在性の成立を説き第三には萬有其者を論せり是に於て第三期の説一變せり、而して第四期に入り物心の平均を失て心の方に傾き心の否定によりて物の生するとを論し心を以て第一原理とせり、此點はスピノザを離れて一種の原理を立てたるものにして一千八百四年以後の著書は即ち此第四期なり、其説は中世及ひ近世の初年に起りし神秘教或は中世の新プラトー學派の形を取りて起りたるものなり、第三期には絶對は物心を結合したるものにして宇宙は絶對と同一のものなりと云ひ物心共に絶對の現象なりとせしか第四期に至ては宇宙と絶對とを分ちて同一と看做さず此世界は感覺上の有限世界にして絶對世界は眞實なるも有限事物は眞實にあち

す有限事物の此に存するは絶對より退化して沈淪したるものなり、而して人の此悪世界にあるは神の罰なりと、又氏は靈魂の輪廻轉生を說き吾人は善を修むれは高等に進み若し物界に執着せは下等に沈む換言せは下等に沈むは我情によりて悪世界を愛するによると是れ全く新プラトー派の說より得たる所なり、氏は此道理に依りて耶蘇教を解釋せり。

（第五期）此時期には新プラトー派の說より更に一轉して近世の初年獨逸に起りしボイメに本きて一說を立てたり、即ち千八百九年以後の著書是なり、氏の說は始よりボイメに似たる所ありて絶對を知るは直覺によると云ひ、絶對の進化は絶對自個の躰に有する力を開發せるなりと云ふ如き、又其論理精密なるも其中に想像の元素の加るは皆兩氏の相似たる所なりボイメは絶對其者の開發して此世界を生し進て元の絶對に歸す、其絶對の動く間に物心善悪の關係を生す、元來善悪なる者は絶對の躰になき者なれとも絶對の開發に從て其別を生す、換言すれは絶對の純善に達するには悪の方便なかる可らす然れとも其悪は絶對の目的を達すれは遂には消滅すべし、而して其絶對は即ち神にして神其者の力を以て進化し神其者に





復歸するなりと云へり、シエリングは此ボイメの考に由るなり、既に第三期に於て氏がスピノザによりて萬有教の形を取りたりし當時ヤコビはシエリングの說の萬有教たるを攻擊しシエリングは自ら其說の萬有教にあらさるとを辯護せり、萬有教は神は世界の基礎なりとする說にしてスピノザの萬有の內部に神の存すと云ふは是なり、一神教は神は世界の原因なりとする說にして原因と云ふときは神は世界以外にありて此世界を產出するなり、シエリングは萬有教と一神教との一致を唱へしか是れボイメの說に近似する一點なり、其一致說に曰く神は自ら自躰を開發して此世界を現はす、而して其現はれたる世界は不完全にして有限なり、然れとも此不完全不完全に向て進むものなり、されは今日の不完全は即ち完全にして完全に進む途中に顯るゝ現象に過きす、換言すれは開發の順序として一部分に不完全を見るのみ若し開發し盡さは完全なる本來の神其者に達すべしと、此論ボイメに近きのみならす其結論はヘーグルに一致せり、氏は此道理によりて立てたる一の宗教說あれとも後に讓る。

上來陳述せし如くシエリング氏は一生の間屢々其說を變更せしが之を大別せは

以上の五期なり、然れども其說論理發達の順序を追ひ前後全く矛盾するにあらず、其說の變遷は即ち論理の變遷にして最初にはフィヒテを繼き最後にはヘーゲルに合するに至れり元來獨逸の哲學起原はカント以前にありしもその尤も盛に且つ高尙なりしは實にカント以後にあり、カントの學說中今日の學者も尙ほ遵奉する所のものは氏の道德說就中義務說なりフィヒテの說中取るべきものは人權說即ち意志自由を論じたるにあり、シェリングは美學の道理をして高尙靈妙ならしめ且氏は論理力に長し併せて想像力に富み吾人の考へ及ばざる處に絕對を建設せり、次にヘーゲルの長所は論理學にして理想の性質を明にしたるにあり、カント以後の獨國哲學は右の四大家にて大成せりと云ふへし。

(宗教論) シェリング氏の宗教に關する書は第三期と第五期とにあり、又第二期の歷史哲學も多少宗教に關係する所あり、歷史哲學に於ては時代を三分し其中第三の時代は神の天啓顯はれて全く完全なる神の世界となるとを說けり。

第三期に於ては鬼神學(マイソロヂー)なる一書あり、此書によるに鬼神學は哲學の詩學的形式を取りたるものなりと云へり、其故はシェリング氏の考には美術は最上高尙なるものにして哲學理學は詩學の幼稚なる時代にして人類の幼稚なる時代に屬す、此時代發達して詩學時代となる、而して此時代をして詩學時代に至らしむる所以のものは鬼神學なりと云へり、斯く氏が鬼神學を尊崇せしは蓋し氏が想像力に富み又絕妙なる理想を主としたるによる、然れども此點は氏の缺點にして氏が天性想像に富みたるが爲め其講究の結果不知不識に想像一邊に傾き荒唐學派に類するに至りしなり。

又第三期中氏の耶蘇教に就て論じたるものあり、其說によれば耶蘇教は世界精靈の漸次發達するに重要なる階段なりと、氏は前に歷史上世界を三時代に分ちしが其最初の時代は完全なる黃金世界なり、然るに此黃金世界の惡世界となりしは第二の時代にして普通の歷史上無智盲目の時代と云ふは是なり、第一時代には彼此の差別なく從て無我無欲なりしも中途にして盲目時代となれり、詳言せば第一時代は自他の區別を存せず人と萬有との懸隔なくして一致し有限無限の反對性相働かさりしが中頃より人と万有との間に分界を生し遂に眞正純良の時は沈降し無我無欲の世は去りて有我有欲となり罪惡を生するに至りしなり、然れども是よ

り、後又黄金世界に達し神と一致するに至るべし、而して此最後の黄金世界となる端緒を開きたるものは耶蘇教なりと云へり。

又氏が耶蘇教三位論に就ての考を述へんに普通には耶蘇を以て神子となせども氏は有限を以て無限の子とし決して耶蘇一人を以て神子と限るにあらす唯基督は最上の啓示を得、有限中尤も高尚なるものなりと云へり又神の託宣は一時一人に限るものにあらす、何となれは神は時間以外にありて時間を支配するものなれは其託宣も亦無限ならさるべからす、而して基督は其託宣の最も高等なるものを傳へたるなり、されは基督の出現してより以來神の啓示世に傳るとを得たりと、然れとも氏は耶蘇教のみならす印度の宗教と雖も多少託宣を蒙るものなり又希臘のプラトーの如きも託宣を蒙りたる豫言者なりと云へり、又普通には聖書を以て無上の寶典と尊崇するも氏は之に反して聖書は此の如き價値あるものにあらす却て耶蘇教の精神を害するものなり耶蘇教は活宗教なれとも聖書は過去の記錄に過きす故に歴史としては尊崇するも可なりと雖も之によりて眞正の信仰を得ると能はすと、又氏は宗教の將來を論し耶蘇教の世に宣布するに從て儀式制度等





種々の弊害伴ひ起るも最後には眞正の宗教世界となるに至るへしと云へり。

第四期に至り哲學及ひ宗教と云ふ書を著はせり、其中に曰く神の躰より有限世界の出てたるは精靈の沈降したるなり、故に精靈は一方に於て有限に結合するも一方には無限に連絡す、是を以て吾人の心中に深く考ふるときは精靈の連絡により て絶對其者に達するを得と、又物心に就て心は自由を性とし物は必然を性とす、又物は實在を有し心は思想を有す、道德上の快樂は物より得、德は自由より生す、今世界の精靈は絶對性の自由に達するを得へき者にして此點に到れは絶對其者と合し德も快樂も同一となる、即ち此同一點より凡ての事物は分出する者なり、されは有限上に物心互に反するは此一致點より派出したるなり、然るに此に一問題あり、即有限は如何にして無限より生せしかと云ふと是れなり、氏の之に對する說明はスピノザの本質論にフィヒテの主我論を加へたるものにして又ボイメの說に近き所あり、シュリング氏は一千八百九年人性自由論を著はし其中に無限より有限の開發することを論せり其說ボイメに據る所多く又支那の太極說に似たり、今其說の大要を陳ふれば万有の起るには其根原あり、此根源は神の躰に具するものにして之

を太極とす此太極より開發して世界を現はす、太極の前は無極にして此無極は無形無香無聲なるを狀態について名く、而して此無極も太極も其躰一にして太極は万有の根元たる方について名くるのみ、故に無極は物心相反の原因にあらす又其の中に物心の性質を有せす物心には全く無關係の者たり、然れとも太極は其中より万有を生する所以の理を推すときは万有の顯出する基礎を太極と云ひ其大本を無極と云ふなり、然るに神はもと絶對の者なるに如何にして其中に太極の存するかと云ふに、氏は太極を以て直ちに神とは云はず太極は万有性の者なり故に實在性なり、既に實在性なれは神其者と同一と云ふを得す、然れとも神と相離るへからさる性質なり、又太極には知覺或は意志を有せす、是れ万有の根本たれはなり、此實在性に反して理想性のものあり、是れ心の根本たるものにして之より知覺意志を生す、太極は知覺意志を有せされとも之を生する傾向を有す、而して理想性は万有性の開發に從て生するものなり、即ち太極の内部には理想性を有すれとき先つ始に万有性發達し後に理想性發達するなり、故に地球も其始は無機性にして吾人々類も始は肉躰より成るは万有性の先きに生するか故なり、太極は盲目的なるも





其躰の開發する願望傾向を有す、然れとも意識ありて爲すにあらざれは之を盲目の衝力と云ふ、而して此無知覺の本原より意識を生す、是に於て從來無規律にして渾沌たる不明了の有樣も内部の理想性の發達に隨伴して規律現はれ知覺意志を生す、是れ蓋し神の創造力の致す所なりと。

大極は不明瞭なる盲目の原理なり、是より万有を開發すれは万有と神と相分るに至る、而して此の如く相分るゝに於ては私意即ち個人性意志を生し、又之と共に神に一致する明瞭なる理想性の原理知識を生す即ち公意を生するなり、私意は肉躰に關する情欲單純の願望にして公意は外界の刺戟より生ずるものにあらずして却て情欲を制御するものなり、要するに私意は万有性より起り公意は理想性より起るものなり、公意私意は人間中にありても絶對中にある如く始は合同したるものなり、第一段より云へは天地未分の時は公私の別なく人間の始にも亦公私の別なし、然らは神人相同しきやと云ふに神は公私の分つへからさる一致の點に於て一致をなし人は公私の分るべき有樣に於て一致す、故に神人は公意私意に於て相違あり、然るに人間は發達するに從て公意私意相分れ其間に競爭を生するを以て

神は天啓を以て之を調和せしめ且つ神人相交通せしむ、此公意私意によりて善惡の差別を生す、即ち私意か公意を支配して公意か私意に服從するときは惡にして公意か私意を支配して私意か公意に服從するときは善なり、人間は此公意私意の孰れを取るも人間の自由なり、されは人間の歷史なる者は全く此公意私意の戰爭に過きす、然るに此爭を調和するものは耶蘇教なり、耶蘇教にては耶蘇最上の天啓を得て公意私意を調和せしか尙ほ未た世界全躰の人をして調和せしめたるにあらす、是を以て耶蘇教は世界全躰の人類の公意私意を調和するを目的とするなり、而して將來必す全く之を調和し終り公意か全勝を占むるの時あるへし、若し此時に達せは現在世界は實に黃金世界に達したるなり、更に言を換へて之を云へは神々に明暗の二點あり、暗點より万有を生し明點より知覺を生す、私意は闇點より出つるものにして惡の原因なり、公意は明點より出て丶善の原因たり、然るに闇點は先きに生し明點は後に生するものなり、世界には人間に於て明點尤も發達し人間中には耶蘇尤も明瞭なるものなり、然れとも最後には此世界全躰一點の外黑なく赫々たる絕對の光明を以て充たさる丶に至るへし。





シェリング氏の說は空想にして且つ詩人的の考あり、人の最初に公私分れさりし說は支那の說に類似せり、太古は黃金世界にして又最終に黃金世界となる、即ち太古は無我無欲なれは公意私意の區別なかりしも少しく進步すれは物我の別を生し隨て利己心を生し惡の生するに至る、而して私意公意と爭ひて其結局神の天啓顯はれ以て公意全勝を占むるに至る、要するに初は無知覺の一致にして終は有知覺の一致なり。

シェリング氏の說には反對者甚た多かりしか就中氏を攻擊せしはヤコビなりヤコビは有神教と自然教とを區別し有神教は信仰を本とし自然教は知識を本とす、有神教は神を世界の原因とし自然教は神を世界の基礎とすと云へり此の如くヤコビは此二者全く相反するものとしシェリングは道理上之を結合し得へきものと信し二者相反を唱ふる論を以て不當となせり、蓋し氏の論此反對論によりて一層詳細を得たり。

シェリング氏宗教哲學中最後に出てし者は鬼神及び天啓哲學なり、此書によりて氏の所謂神の思想は愈明瞭となれり、然れとも是れ前論を敷衍したるものなり、此

書に於ては神の思想を三段に分てり第一は神の將に爲さんとする力の潛勢力として存する有樣、即ち內に萠して未た外に發せさる者之を表はすにA−(即マイナスA)の記號を以てす而して此有樣は消極的の位置にある者にして之を非有と稱す、即ち前の無極是なり、第二は潛勢力の顯勢力となれる有樣にして之を表はすにA+(即プラスA)の記號を以てす、即ち積極的にして有なり、是は前の太極にして万有の根原を云ふ、今第一の非有(A−)と第二の有(A+)とを比するに第一は純然たる主觀の有樣にして神の內部に含む力なり、第二は存立に關係したる有樣なれは客觀なり、換言すれは第一は內部の勢力、第二は部外の存立なり、此の如く二者互に反對するものなれとも此二合して第三の者即ちA±(即プラスマイナスA)を生するなり、故に第三は潛勢力顯勢力共存し內界外界結合し主觀客觀一致す、而して神は此三の合して一躰となりたる者なり、然れとも此三を合したる者直に神なるにあらす、神は此三の以上にあるものなり、換言すれは神は三にあらすして一なり、然れとも其一は三の原因なり、故に神は三以上に存して其性質作用として三を現はすなり、而して宇宙万有の開發は此順序に由る者にして始に非有、次に有即ち世界となり最後に





A±即ち內外一致となりて顯はるゝなり、非有と有との現はるゝ間に互に主となり客となり相抗排するもA±の一致したる有樣に至ては神の精神の現はれたる時にして二者の抗爭漸く息み遂には此世界全く變して神の世界となる。之を研究する上に於て哲學と宗教とは自ら其性質を異にす、哲學は思想一方より開發の道理のみを研究するか故に消極的なり、而して思想上より云へは神は理想性なれとも又之に反する實在性あり、思想と實在とは一致すると能はすして其間に意力加はりて其作用を實在の上に及ほす、而して宗教は此意力の關係にして神の實在を目的とするものなり、之を要するに純然たる思想一邊より說くものは哲學にして之を實在に當嵌むるときは宗教となるなり、故に宗教は積極的なり、由此見之宗教哲學は即ち積極的哲學にして道理一方の哲學は消極的哲學なり、然らは哲學の最終目的は宗教にありと云ふも敢て不可なるとなし、此宗教哲學を分ちて鬼神哲學天啓哲學とするなり。

シェリング氏は宗教を論するに思想道理の一邊に偏せす客觀上の事實を根據として論究せり、故に宗教哲學を立つるにも先つ歷史上發達の順序に由れり、今其歷

史を見るに最初に起りし者は鬼神哲學(Mythology)にして希臘の鬼神說の如き是なり、而して之より進みて天啓哲學に移るものにして天啓哲學は即ち耶蘇敎なり、最初の宗敎時代即ち鬼神哲學は人間の發達に於て最初の盲目無意識の時代なり、此時代は人と万有と一致し後ち漸く物我の區別を生するも尙ほ其道理不明なり、然るに社會發達して今日に至れは物我全く區別を生して其間に爭を起す然れ共又其中に一致あるを見る、凡そ物は必然性にして心は自由性なり、宗敎の最初は万有の支配を受け未た自由を得る能はさるも之より進步するときは內部の自由的精神性を十分に發達するを得、而して此自由性の宗敎を天啓敎と名くと、思ふに氏かこ說ある所以は宗敎は道理一邊に於て論究するとなく歷史上に考究せさるへからすと云ふ意見なるを以てなり、是に於て宗敎哲學の上に於て天啓敎のみならす鬼神敎をも說きたるなり。抑も宗敎を說くには通常空想的超理敎と非歷史的道理敎との二種あり、此二は共に各一方に偏するの弊あれとも、氏の說は二者の上に位する者にして歷史上の事實と道理敎の理論とを結合し鬼神說をも、捨つるとなし、されは氏の說より見れは世間通常の宗敎論は神と万有と隔歷し其神は吾人以外に獨立し理外の理所謂超理の躰とするなり、然れとも是れ其實超理に非すして非理なり、若し果して其說の如くならしめば二者の關係全く絕え万有より神を捨てたる無神論に陷らさるへからす、又之と同しく道理一邊によりて歷史を取らさるも亦非理なり、歷史は宗敎上最も必要のものにして若し歷史を捨てなは是れ既に宗敎の一要素を缺きたるなり、宗敎の成立耶蘇の事蹟は歷史を除て果して知るを得へきか、耶蘇敎は學說にあらす即ち主觀的にあらすして客觀的なり、今日ある所の學說は皆耶蘇の爲したる事實の解釋として起りたるものなり、故に耶蘇敎を道理一邊より說くは誤謬なりと云はさるを得すと、此點は氏の宗敎哲學上尤も肝要なる點にして宗敎は思想上のみならす經驗上に成立するものなりとしたるは實に卓論と謂ふべし、されば氏の說は思想に偏せす實在に傾かすして所謂折中說なり、而して此說はヘーゲルの據る所なり、然れともヘーゲルは尙ほ論理を本として思想に偏しシュリングは鬼神說の如き不道理の宗敎を哲學に入れんとする傾あり、是れ二氏の一長一短なり。

歷史の宗敎に最も必要なるとは既に述へたり、今歷史上より宗敎を探究するに初

は多神(鬼神)の時代にして之より一神の啓示を見る、蓋し多神一神の歴史上前後あるは思想發達上自然に此區別を生したるなり、從來の哲學者は多神教を野蠻時代の宗教として擯斥すと雖も古より次第して今に至り野蠻より發達して開明に進みたるものなれは鬼神と一神との間には亦必す連絡なかるべからす、且つ多神は古代の人民が空想上偶然考へ出せるものなりやと云ふに決して然らす、吾人の心に固有せる神の思想の發達して或る程度に至れは多神の考を生するなり、而して其思想は本と神か自由意志を以て世界万物を創造したる大勢力と同一なる原因より起り人間自然の性として本來有するものなり、然らは此思想は偶然に人間の想像し出したるにあらす又自己の心に工夫して發見したるにもあらず全く人心自然の性質として自己の意志を待たすして發達したるなり、故に其思想の起原は一個人の意志を離れ獨立して存するものと看做さゝるへからす、然らは天地万物の現象並に古代鬼神の思想は本とより同一の關係を有するものなり、何となれは万有は神より現はれ鬼神の思想も亦然るものにして即ち神其者より一方には万有を生し一方には多神の思想を出せるものなれはなり古代の人民か雨風震雷の





現象を觀ては宇宙の大勢力を感じ現象の一物々々に神の想像を爲し以て多神の思想を生したるなり然らは假令其表面は多神なるも裏面は一神なり、經驗學者は多神は野蠻人の空想にして自己の意志を以て造出せしものなりと云ふと雖も、是れ自然の開發より現はれたるものにして其實は一神なりと、蓋し多神の思想は人間一般の思想中に遍在するものにして其道理は吾人か無意識並意志中に固有するものなり、(假令無意識なるも人間固有の一思想なり)此思想万有に觸るゝときは忽に多神の現れを爲すと、以上はシェリング氏多神説の説明なり、此多神一變して一神となる是を説明するは天啓哲學なり。

一神は多神の内部に包含せる眞理にして之を開發して一神となる其一神の現はるゝは多神漸く下りて暗黑となり殆と神の光滅せんとするに當り再ひ宗教の新紀元を起し遂に一神の思想現るゝなり、是れ天啓哲學に於て論する所なり、抑も多神は無意識にして宇宙万有自然の道理によりて現出するも、一神は神の自由意志を直ちに我心内に開發するが故に明瞭に、吾人の意識上に浮ふを得、是れ鬼神と天啓との異なる點なり、而して自由意志の上に開現する宗教は高尚の宗教にして耶

蘇教是なり、即ち耶蘇教は一神の道理を開示するものなりと、從來の學者は一神以前の多神は妄説として排斥せしも氏は耶蘇以前の古代の多神も又東洋の多神も皆一神以前の有様にして只其發達の程度を異にするのみと云へり、故に氏の説は今日の比較宗教學の起る原因と云ふへきなり、而して此考は氏か歴史上の事實を觀察して得たる思想なり。

次に天啓哲學に於て耶蘇教を論する點他と相異なれり、他の學者の唱ふる所は單に道理を本として研究するも氏は歴史上の事實を必要とするを以て耶蘇教は經典の上にあらすして耶蘇其人の上に成立するものとせり、而して氏は曰く基督は此世界に人間一個の形躰を取りて現はれたるものなれは假令其實は天神の分身なりとするも既に神より獨立して人間の形躰を取る以上は天にある神父と同一にあらすと。

又耶蘇教の三位説に就て氏は神の躰は唯一の者にして三にあらす、然れとも三位は唯一の作用其中に貫通して存し其開發するに三位の順序を取るのみ、即ち三位は本と神の中に含まれし者にして之か開發して世界を爲すに三段の順序を取れる者なり、依て此世界を三段に分つ、三段とは第一前世紀第二現世紀第三後世紀なり、前世紀は神父の時代現世紀は神子の時代後世紀は神靈の時代なり、神父の時代とは耶蘇以前の有様即ち希臘多神の時代等を云ふ、此時代には神の力宇宙万有の上に現はれ吾人は万有の上に於て神を信す、次に神子の時代は神自ら一個の人間の形躰を取り此世界に出現して我人に啓示す、更に一歩を進むれは神靈時代なり、此時代は吾人の精神上に神の世界を現し此世界の上に精神世界を開くなり、之を歴史上にて云へは希臘の鬼神時代及ひ舊約全書の時代は神子の出現すへき豫定あるも未た出現せさるを以て此時代を神父時代とす、次に新約全書の時代の神子時代にして神子正く一個の人間となりて現はる、然れとも神子の突然現れたるにあらす神子の出現する原因は既に神父時代の内部に包含して存するなり、されは古今の間其連絡ある者にして他教にも亦天啓あり、然れとも他教は天啓を内部に包有するのみ、之を外部に現示する者は耶蘇教なり、又耶蘇出現以後の神子時代中に又三段あり第一ペートル主義第二ポール主義第三ジョーン主義によりて教會を組織する時代なり、ペートルは神父の使徒ポールは神子の使徒ジョーンは神靈

の使徒なりとす、第一ペートル主義によりて教會を組織せし時代は羅馬教にしてペートルは羅馬教の開祖なり、此主義は形式的規律的にして宗教を外形に立て之を以て宗教の信仰を固むるなり、勿論此主義と雖も耶蘇の天啓を本とし神人の一致を示すものなれども此主義は外部的盲目的不自由の一致なり、此主義に反對して内部の一致を說くものは第二ポールの主義なり、此主義は内部の思想上に於て自由に信仰するなり、而して此主義は新教改革の時に起り重に獨逸地方に行はる、此の如く此時代には内部の一致を主義とすれども尙ほ未だ十分ならさる所あり、何となれは此主義も多少舊教の義式を取るを以てなり、是を以て更に第三の改革なかるへからす、今日は未た此改革時期に達せされとも將來必す到るへき時あらん、況や此主義は既にヲヨーンの唱へたる所なるをや、若し此時代に至れは耶蘇教は國教公認教として傳はるにあらす、廣く人間教となりて行はるゝしと論したり

以上カントよりシエリング迄の宗教哲學此に全く終を告く此外にヘーゲル、シヨツペンハウエル、ロツチエ、ハートマン等の諸大家あれとも本學年はヘーゲルの一部分の講義を以て館内講義を終結するに至りたれは講義筆記はシエリング迄を以て限りとすヘーゲル以後ハートマン迄の分は一學年間の講義を充たすに足るを以て後日其講義の開くるを待ちて其當時の講義錄に掲載すし然り而て獨逸學派の宗教論についてはカントよりシエリングに至る迄の諸家の論を一讀せば其大要を窺ふに於て餘りありとす

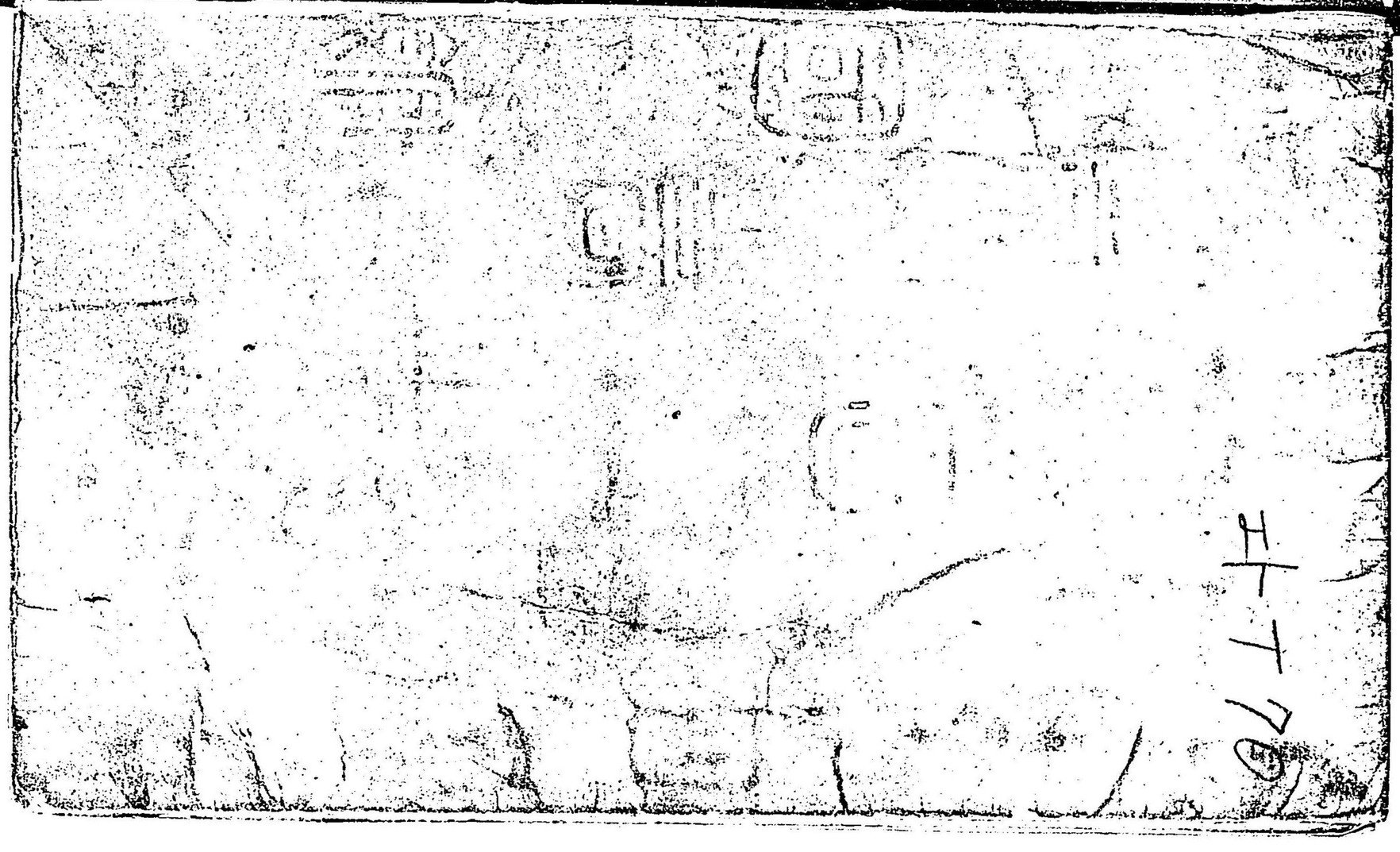
編輯員白





宗教哲學畢

228



14
228
Ⓜ

013630-000-1

14-228

宗教哲学

井上 円了／述

哲学館編輯員／記

M34

ABA-0099

哲學館第十三學年度
科講義錄

# 宗教哲學

井上円了

エ卜T70
14
228